
炎髪 of 魔女

鈴月鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

炎髪の魔女

【Nコード】

N1021J

【作者名】

鈴木鈴

【あらすじ】

舞台はマリーラ国王都シュバル。ナンバーズ【審判】との決着を着けたリリィ。暫くのんびり気分だったが、全ては魔法の終焉に向けて。そして、それぞれが動き出す。幸せの為に。生きる為に。最終章魔女の幸福。不定期更新中

始まりの唄（前書き）

初投稿です。

どうぞ、よろしくお願いします。

始まりの唄

血まみれの手がそつと娘の頬を撫でた。

あの人は優しく微笑みながら、娘をみていた。

呼吸は弱々しく、もう助からないことは明白だった。

「ごめんね……。もう、一緒にいられない」

あの人はとても悲しげに、そして、愛おしげに娘に言った。
娘は首を振る。

まだ、別れたくはなかった。

これで終わりになどしたくなかった。

けれども、それは叶わぬ願いで。

「いやだよ。私を、独りにしないで」

娘の言葉に目を細めながら、あの人の表情は変わらなかった。

「そうね。私の、心残りは……貴女を独りにすること」

あの人はそう言うのと、娘の眉間に人差し指を当てた。

「強い力と悲しい過去を持って、たった一人で生きていくのはあま
りにも辛い。だから……」

そのとき、娘はあの人の言葉を理解する。

止めて。そんなことを言わないで。聞きたくない。

そう思っても、あの人の言葉は止まらない。

「幸せになりなさい。過去を捨てて、すべてを忘れて」

「シエ……」

あの人の名前を呼ぼうとしたけど、のどの奥に何か絡みついたか
のように、あの人の名前が呼べない。

あの人のまぶたが静かに閉じていく。

それと同時に、娘の視界は霞がかかったかのように、見えなくなっ
ていった。

マリーラ国王都シュバルの外れにある森「ライラの森」。

そこには炎のような赤色の長髪に、藍色の瞳を持つ娘がいた。誰も来ないような森の奥深くに一件の家を構え、ひっそりと暮らしている。

「リリイ。リリイ？」

娘を呼ぶ声が出て、娘はベッドから飛び起きた。

そのままの姿で、ベッドの脇に置いてあった杖を手に取り、駆け出す。

家の玄関を誰かが叩いていた。

娘、リリイは玄関を開ける。

「すみません、スウアンさん。寝てました」

慌ただしくそう言うと、たっていた女は溜め息をつきながら、リリイの頭を撫でた。

「とりあえず、寝癖を直して、服を着替える。女だろ」

女らしい曲線を保ちながらも、引き締まった体のライン。

金色の髪を一つにまとめ、マリーラ国では生まれない黒眼。

腰にはベルトを着け、ナイフを着用している。

10代後半にしか見えないが、実は23歳。

マリーラ国女王私兵隊「白翼」の一人だ。

リリイはスウアンに言われたとおり、急いで支度した。

その間にスウアンはキッチンで朝食兼昼食を作ってくれていた。

「朝に弱いのは相変わらずだな」

スウアンはほんのりと笑う。

リリイは2年前、記憶喪失になったところをスウアンに助けられた。2年よりも前の記憶はなく、ただ、「リリイ」と言う名前しか覚えていなかった。

それからスウアンが身の回りの世話を引き受けてくれて、今では自立できるまでになった。

「今日は城下町に行くのか？」

「そうですね。買い物もしなきゃですし」

ご飯を頬張りながら、リリイは返した。

「今日の午後から一週間ほど、東部に行くことになってな。何かあれば知らせてくれ」
スワンがあまりにも真剣に言うので、リリイは可笑しくなっ
てしまった。

「大げさですよ。たった一週間ぐらいなら、自分で何とかできます」
「リリイは魔法は凄いけど、杖がなければただの女の子なんだ。俺
みたいに鍛えているわけでもないし。用心に越したことはない。気
をつけなさい」

「はい」

用事はそれだけだったようで、スワンは何度も念を押すと、家を
後にした。

リリイも片付けを済ませると、杖と鞆を持って家を後にする。
空はよく晴れていて、雨は降りそうになかった。

始まりの唄（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

もしよろしければ、感想などお願いします。

冬休み中はどんどん進めていきたいと思うので、

お付き合い、お願いします。

すみません。スウアンの設定に間違いがあったので、訂正します。

40歳 23歳 これで、turnerの方と年齢も合うと思います。

第一楽章 魔女は出会う

王都シュバルはいつも賑わいを見せている。

大通りには店が建ち並び、店の前に座る語り部達。

脇を子供達が走り抜け、ご婦人の笑い声が木霊する。

リリイは買い物メモを片手に、町を歩いていく。

魔法の道具で必要な薬草や道具を買い、数日分の食料を買いの目
的だ。

魔法関係のものを先に買おうと、広場で一息吐くことにした。

ベンチに座り杖を置くと、空を仰ぎ見る。

家を出たときと同じく快晴で。

こういう日に出かけるのも悪くはないと思った。

「きれいな赤い髪ね」

8歳ほどの少女がリリイに近づいてきた。

「ありがとう」

そう言っただ女の頭をなでると、少女はうれしそうに笑った。

リリイに髪を触っていいか聞いてきたので、リリイは少しばかり遊ばせてあげることにした。

三つ編みやポニーテール、ツインテールなど。

リリイほど長い髪となると、遊び甲斐があるようだ。

「うわ。髪の色、めっちゃ珍しい！」

数人の青年がリリイ達に近づいてきた。

「魔法使い？この街では見たこと無いけど」

「貴方達には関係ないでしょう」

リリイは少女に離れるように合図すると、荷物を持って立ち上がった。

青年の一人がリリイの肩をつかむ。

「待てよ。ちょっとくらい……」

「離して」

杖で青年の手をたたき落として、リリイは青年を睨み付けた。

「ナンパされるの、嫌いな。消えてくれない？」

リリイがそう言って立ち去ろうとしたとき、一瞬殺気を感じた。リリイは反射的に振り返る。

先ほどリリイの肩をつかんだ青年が、襲いかかってきた。

その手には刃先15？ほどで黒い柄のナイフが。

場の空気は一変して、緊張感に襲われる。

杖の先でナイフを交わし、リリイは後ずさった。

青年の仲間達は青年の様子に驚いているようだ。

青年はナイフをとっさに出したのだろう。

自分でも驚いているようだった。

リリイは目を細める。

青年の持つナイフに、リリイは見覚えがあった。

確かあれは……。

「た、助けてくれ……！」

ナイフから手が離せないようだ。

青年は必死の形相で訴える。

「呪刃か！」

リリイは杖を打ち鳴らした。

見たことがあるはずだ。

闇市で最近取引されているらしき呪刃は、小型で柄が黒いことが特徴だ。

一度使えば、人を殺し続けるドールへと変貌する。

リリイは青年へと杖先を向けた。

青色の光を放ち、魔法円が展開される。

青年は操られるまま、その射程内から逃れようと走り出した。

その先にはあの少女が。

そんなことは、させない。

リリイは一瞬で集中を高めた。

世界にいるのはただ一人。

まぶたを閉じれば世界が見えてゆく。
音だけでは処理しきれない情報量。

「拘束」

うつすらと目を開けると、いくつもの光の鎖が青年を拘束していた。
呪刃が少女に届く一歩手前で。

詠唱破棄

倍以上の魔力と情報量を消費する方法。

リリイの頬には汗がにじみ出していた。

「安心して 誰も貴方を傷つける者などいない

刃を納めて 怒りを収めて

ここにあるべきものは怒りではない

優しい女神は舞い降り 封印が施される

手を差し伸べましょう

貴方が平和に生きていけるように

リリイは集中を保ったまま、杖を打ち鳴らす。

青色の魔法円は様々な色が混じった。

人々の感嘆の声はリリイに聞こえない。

その魔法がどれだけ難しいものなのか、リリイはわかっていない。

「解放」

何かが割れる音がして、青年の手から呪刃がこぼれ落ちる。

青年もともに崩れ落ち、戦いは終わった。

しばらく静寂が支配し、リリイは息を整える。

すると、割れんばかりの拍手が送られた。

リリイは驚いて周囲を見渡す。

なぜ拍手が起こっているのか理解できなかった。

この場から逃げだそうと走り出したとき、リリイの腕を誰かがつかんだ。

緑の短髪に藍色の瞳。

18歳ほどの青年で、リリイよりも頭一つ分背が高い。

黒のコートを着て、首にはラピスラズリのペンダントをしている。

「離して」

リリイは青年を睨み付けると、青年はポケットから銀時計を取り出した。

「あそこにいる奴らも含めて、ちょっと来てもらおうか」

銀時計には白い翼の紋章。

警察よりも厄介な、白翼を表していた。

嘘。こんな子供が？

「なっ。私は関係ないでしょ。襲ってきたのはあっちよ!!」

リリイがそう言うと言つと青年は深刻そうに頷く。

「残念ながら、王都での魔法使用は許可があるんだ。君は持っているように見えないけど？」

ぐっ。それはそうだけど。

「私が魔法使わなかったら、どうなっていたかくらい分かるでしょう。死人を出したいか！」

もっともな正論をぶつけつつ、リリイは杖で青年を振り切った。後ずさり、舌を出す。

杖をつくくと、リリイの真下に魔法円が現れた。

「じゃあね！」

強い口調で青年に言つと、もう一度杖を打ち鳴らした。

「移動」

一瞬で風景が変わる。

ぐにやりと歪み、ライラの森奥深く、リリイの家の前へと着いていた。

急激な魔力喪失と精神力の使いすぎで、足下がふらつく。

家の中に入り、自分の部屋へやっとたどり着くと、リリイはベッドに倒れ込んだ。

疲れた。スウアンもない家で、リリイは眩くと眠りに落ちた。

第一楽章 魔女は出会う(後書き)

読んでいただき、ありがとうございました。
続きはまたかけたらupさせていただきます。

第二楽章 魔女と青年

大切なぬくもり。

思い出すのは暖かな声。

大好きだった。

大切だった。

けれどもあの女はもうここにはいなくて。

「幸せになりなさい」

あの人の言葉だけが残響してゆく。

次に目覚めたときには、次の日の朝になっていた。

冷蔵庫の中身を見る。

……食べ物がない。

リリイは頂垂れる。

こんなことなら、先に買い物だけでも済ませておけばよかったな。
無いものは仕方がない。

とりあえずリリイは外へ出ることにした。

「ごめんくださーい」

男らしき声が聞こえて、リリイは首をかしげた。

郵便なんてものは、こんな森奥深くにある家に、くる訳がない。

それは訪問販売とかも同じことで。

怪しげな声に、もしものことを考えて杖を握る。

玄関を開けると、昨日街で会った白翼の青年が、なにやら大量の袋
を持って立っていた。

「昨日ぶり」

にこやかに言う青年。

ちよつと待てよ。

何でこの人、家が見つかったの？

「……ストーカー？」

ぼそりと扉越しに呟いてみる。

「いやいやいや。ちょっと待って。そうじゃないから。違うから閉めないで！」

ゆっくりと玄関を閉めようとするリリイに、青年は必死の形相で止めた。

「スウアンさんに頼まれたんだ。君の様子を見る様に」

「スウアンさんに？」

玄関を閉める手をリリイは休めた。

青年はひとまずほっとした様で。

「……とりあえず、中に入れてくれない？」

嫌だと言いたかったが、相手は白翼だ。逆らわない方が良い。

仕方なく青年を中に入れると青年は家の中を見渡しながら、テーブルに袋を置いた。

「スウアンさんの言っていたとおりだ。君、昨日帰ってきてすぐ寝たでしょ。ご飯の準備はしておくから、風呂に入って着替えておいで」

言いつつ、袋の中身を取り出し始める青年。

「ちょっと。どういう事？」

状況が飲み込めずに杖を握りしめてリリイは聞いた。

青年は説明していないとばかりに困った様に微笑む。

その優しげな顔に、思わずどきりとさせられる。

「スウアンさんに、君の世話を頼まれたんだよ。何か困ったことがあっても、きつと知らせないだろうからってね」

凶星だった。

青年はリリイの背を軽く押す。

「ほら。朝食は作るから」

青年に促されるままに、リリイは風呂に入って着替えた。

髪の毛を魔法で乾かすと、リビングへ戻る。

ハムエッグにコーンスープ。

サラダとロールパンなど。

豪勢な朝食が並んでいた。

思わず涎が出そうだった。

「そう言えば、貴方の名前聞いてない」

リリイが首を傾げると、青年は椅子に座る様に促す。

「俺の名前はカイト・クルト。分かっていると思っけど、白翼の一人だよ」

優しい笑みをリリイに向けてくる。

あれ？

どこかで、その笑みを見たことがある気がした。

どこだろう。

幸せになりなさい

あの言葉が残響する。

優しく。護りたくて。愛おしくて。大好きな笑顔。

あの女は、誰だったっけ？

第二楽章 魔女と青年（後書き）

この調子でどんどんUPするので、お付き合いたさい。

第三楽章 魔女と青年？

「暫く俺も此処で暮らすから」
いきなりそんな事を言われて、リリイは思わず呆然としてしまった。
いや待てよ。

見知らぬ男女が一つ屋根の下って、どう見たってヤバイでしょ。

「その指示は、スウアンさんが？」

カイトは頷く。

そんな簡単に頷かれても困るんだけど。

カイトはリリイが食べ終わると、食器などの片づけを始めた。

リリイも悪いので手伝う。

それにしても、スウアンが簡単にリリイのことを他人に任すことはないと思う。

何もかも自分にさせようとする方だ。

片づけが終わると、二階のリリイの隣の部屋へ案内した。

「誰も居ないから使って良いけど……。本当に、スウアンさんがそう言ったの？」

思わず疑り深くなってしまふ。

「そうだよ。年の近い方が仲良くなりやすいだろうって」

その流れでいくと、ほかの白翼にもリリイの事を言ってるようだ。

カイトは荷物をベッドの上に置くと、リリイに向かって微笑んだ。

なんか常に笑っている気がする。

気まづくなって、リリイは部屋を後にした。

洗濯も魔法で済ませると、外に出て竿に干した。

空は少し曇ってはいたが、雨のおいはいないので降ることはないだろう。

「あ、俺学校だから、王都へ行くよ」

「学校？」

家から出てきたカイトが藍色の鞆を持っていた。

首をかしげるリリイに、カイトも不思議そうにする。

「俺、16だから。リリイは学校行って無いんだよね」
首をかしげ続けるリリイは眉をしかめた。

「そもそも、学校って何？」

沈黙が二人の間に降りた。

「……………学校、知らない？」

カイトの問いに、リリイは頷く。

リリイは学校という存在を知らない。

ライラの森から出ることがあまりないし、王都へ行くときは魔法具と食料を買いに行くぐらいだ。

それ以外は家で研究をするか、家にある大量の本を読むなどして、暇をつぶしている。

スワンもリリイに学校の存在を教えなかったし、そもそも2年前の記憶がないのだ。

友人もいなかったみたい。

リリイが何をしていたのか知るものはいない。

唯一家にある本で、研究や魔法の勉強をしていたことくらいは予想がつくけど。

「勉強するところだよ。年で小・中・高に分けられていて、俺は高
1」

言っていることが理解できなかったが、とりあえず、勉強するところだと記憶しておこう。

「今日は半日だから、昼には帰ってくるよ」

遠慮がちに言うカイトを見て、リリイは微笑んだ。

「私のことを頼まれたと思うけど、貴方は自分の事を優先して。自分の事はできる限り何とか」

リリイが言い終わる前に、カイトはリリイの額に口づけした。

え、え、え、ええええええ！？

リリイは顔を真っ赤にして硬直する。

「リリイはやっぱり優しいね」

カイトはくすりと笑ってリリイに背を向ける。

「じゃあ、行ってくるね」

そのまま行ってしまう。

リリイは何も言えなかった。

呆然と固まってしまった。

ようやくカイトが見えなくなったところで我に返った。

「なんなの、あいつ……！」

耳まで赤くなった顔を両手で押さえる。

春の陽気が、さらに顔を熱くさせていた。

顔の熱を冷やすために手で仰ぎながら、リリイは籠かごを持って出かけることにしたのだった。

第三楽章 魔女と青年？（後書き）

温かい目でこれからも見守ってやってください。

第四章 魔女と青年？

風が赤髪を優しく撫でた。

リリイは家から更に奥にある湖へと来ていた。

森という場所には気の流れが存在し、風に乗って森の中を駆けめぐっている。

時には命を育み、侵入者を拒む。

特にライラの森は気の流れが良い為、精霊が集まりやすく、良い薬草が採れる。

湖も澄んでおり、そのまま飲んでも、傷には効果がある。

杖と籠を置き、湖の側に立った。

呼吸を整え、集中する。

森が共鳴する様にざわめいた。

何かがいる。

誰かが見ている？

ゆっくりと視線を後ろへ流した。

何本も後ろにある木を通り越した、少し高い木の枝に、白い胴体に虹色の長い尾を持つ鳥がいた。

普通の鳥ではない。

魔力を感じた。

誰かの式神だろうか。

「何の用？」

リリイが問うと鳥は目を細め、暫く見つめていた。

しかし、羽ばたいてどこかへと飛んで行ってしまった。

そこは 王都のある東の方向。

「結界でも張ろうかしら」

独り言を呟き、籠を片手にリリイは薬草を採り始めた。

「へえ、あの視線に気づいたの」

シュバルの王宮内一室で、女は藍色の髪を揺らしながら白い鳥の頭を撫でた。

女は白いドレスに身を包んでいた。

身につける装飾品が鮮やかで、女の美しさをさらに引き立たせていた。

「報告ありがとう」

女が言うと、鳥は虹色の光を放ちながら、足の方から霧のように霧散した。

部屋には女一人になって。

女は窓辺によると空を見上げた。

かつては白翼だった人のことを思い浮かべる。

こうなることは必然だったのかもしれない。

こうなることを望んでいたのかもしれない。

「私にも、貴方の考えが分からないわ」

ぽつりと呟いた言葉は、誰にも聞こえることなく消えていった。

リリイが薬草を摘んで帰ったときにちょうどカイトが帰ってきた。

「ただいま」

カイトがそう言って、リリイは今朝のことを思い出す。

どうしても気ままずくなってしまるのが嫌で、見ないように顔を背けた。

「おかえり」

そう言うのは忘れない。

リリイは家の中に入ると、まっすぐに工房へと向かった。

魔法書・医学書・薬物書・魔法円書などが壁の本棚にびっしりと並べられており、実験用器具が綺麗に整頓されている。

本だけでも、小規模な図書館と言っている。

机の上に薬草がたっぷり入った籠を置く。

工房から出て行くと、カイトが昼食の準備を始めていた。

「ああ、リリイは座ってて」

カイトはそう言うと、スープを煮込み始める。

「貴方って、料理うまいのね」

「前は父さんの手伝いで世界中旅をしていたから。一人で何かとすることも多かつたし」

「お父さんの職業は？」

リリーの問いに、カイトは一瞬顔を曇らせた。

「白翼。……3年前に死んだけどね」

「ごめん」

「いいよ。父さんと母さんは何千年も生きて疲れ果てて、寿命だったから。幸せそうだったし」

何千年。

その言葉にリリーは顔を上げた。

カイトの髪の色は、どこの世界でも珍しい色で、ある種族にしかない色だ。

龍族。

古代に存在した、今では滅びてしまったとされる一族。

他種族との交流はあまりなく、人間に知識を与えることもあったという。

その涙はどんな傷をも治し、その血は人に力を与えるという。

それ故に龍族のことを記す文献も少ない。

龍族は滅び行く中で、他種族と交わったものは子孫を残し、今では純血種がいないとされている。

カイトは、純血種なのだろうか。

そんな気もするし、違う気もする。

だけど、ふとした瞬間にカイトから巨大な魔力を感じる。

それは、何を意味するのだろうか。

「さてと、ご飯出来たし、食べようか」

「そうだね」

カイトが何者なのか、リリーには関係ない。

どうせ一週間のつきあいなのだろうか。

第五章 魔女の悪夢

朝、起きたら朝食が用意されているのはうれしいことだ。
一階に下りると、カイトが優しく微笑んでくれる。

カイトが来てからというもの、生活リズムが決まりかけていた。
朝起きてご飯を食べて、洗濯を済ませるとカイトは学校。

リリイは工房に籠もるか薬草を採りに行くかのどっちか。
昼頃になったらカイトが作り置きしてくれた昼食を食べて、また工房に籠もり始める。

夕方になるとカイトが帰ってきて夕食の準備。

夕食を済ませると片付けをして、カイトは宿題をしてリリイは無駄に知識があるせいかわかる。

お風呂に入って魔法で自分の頭を乾かすと、部屋に入って就寝。
そんなことが2、3日程続いた。

リリイは水中にいた。

ただの水ではない。

魔法用の培養液だ。

聞こえるのは同じく連れ去られてきた子供達の断末魔と、研究者の冷たい声。

リリイは、物心ついてすぐそこへと連れてこられた。

毎日聞こえる少年少女の断末魔。

人の姿ではなくなり、母親を呼び続けるものもいた。

キメラとなり、醜い姿へと変わるものも、死に逝くものもいた。

そしてある日、とうとうリリイの番がきた。

「XVは、あの魔法使い貴族の……」

「上等な研究材料だ」

「ミスは許されない」

「龍の血を」

「昨日、捕らえた龍族の女がいただろう」

研究者達の冷たい笑い声。

リリイは悟っていた。

『死』を。

連れてこられたのは緑髪の、カイトによく似た女だった。

女はひどくやつれていて、培養液の中にいるリリイを見ると動揺した。

「こんな子まで……！」

女はリリイを見上げると、どうやらリリイが起きていることに気づいたらしい。

「まさか、貴女は……！」

研究者達は女の呟きが聞こえなかったようだ。

女から血を少量抜き取り、培養液の管に流し込む。

女の静止の声が響いていた。

「この子に飲ませてはいけない！この子は……！」

リリイの胸が高鳴った。

全身の血が沸騰するような、激痛を伴った感覚。

リリイの口から雄叫びがあがった。

研究者達から歓声上がる。

同時にリリイの中には巨大な何かがうごめいた。

殺せ。

それは、確実にリリイの中にいて。

リリイの思考を支配する。

神に牙を向ける愚か者に、天罰を！

リリイは目を見開いた。

「っ！」

リリイは跳ね起きた。

息が苦しい。

頭痛がした。

外はまだ薄暗く、朝にはもう少しだけ時間がかかる。
恐ろしい夢を見た気がするのに、内容が思い出せなかった。
身震いがして、一瞬感じた。

リリイの中に、魔力以外の力を。

「違うっ……！」

とっさにリリイは否定した。

そうしなければならぬ気がした。

自分自身がいなくなってしまうような気がしたのだ。

体の震えが止まらない。

たまらなくなつて、家から飛び出した。

霧が立ち籠める、寒い森の中をリリイは走った。

走り続けた。

木の枝に引つかかっても、むき出しになった木の根に足をもつれさせて転んでも、走り続けた。

求めてほしかった。

存在を認めてほしかった。

あの人に。

誰かは分からない。その、誰かに。

「シエラ……！」

無意識に名を呼んでいた。

けれども、リリイの中に記憶されることなく、言ったそばからその名を思い出せなくなる。

ようやく行き止まりについて、リリイは自分がぼろぼろになっていることに気づいた。

空は青く、朝になっていて。

もうカイトも起きているだろう。

早鐘に打っていた鼓動も安定し、冷静を取り戻していた。

リリイは涙も分ならず涙を流し、元来た森を進んだ。

第五楽章 魔女の悪夢（後書き）

今日の22時あたりに第六楽章をアップします

第六章 魔女は怒られる

帰ってみると、カイトが慌てて駆け寄ってきた。

「その格好、何があった!？」

リリーの姿は悲惨なものだった。

白いワンピースは所々破け、リリーの白い肌は擦り傷だらけで、血がにじんでいた。

足も靴を履かずに飛び出たせい、土まみれになって、こけたときに出来たのか、擦り傷までついていた。

カイトは顔を蒼白にして、急いでリリーを家の中へと入れた。

「とりあえず、手当を」

「これぐらい、魔法で何とか出来るよ」

カイトの言葉を遮り、リリーは自室まで杖を取りに行こうとする。

しかし、カイトはリリーの腕をつかんだ。

「俺がやるから、椅子に座って」

「学校は？」

「それどころじゃないだろ！」

怒鳴られてしまった。

リリーは小さくなって椅子に座った。

カイトがリリーの足を持つと、集中して手をかざした。

魔法を使うには何かしら媒介を必要とする。

しかし、元は神の子孫とされるためか、龍族に至っては、杖などの媒介を必要としない。

「優しい女神よ」

貴女は私に微笑み 勝利を告げるだろう

ああ どうか

貴女のその微笑みが

多くの人の傷を癒しますように

カイトの口調にリリーは驚いた。

魔法を発動させるには呪文が必要になってくる。

その言い方は魔法のランクによって異なる。

例えば、一般的に使うのが「祈り」。

次に高いのが神の怒りを表した「逆鱗」。

ハイブリット

それから何種類があるが、高僧侶と呼ばれる教会の神父・巫女などはもつとも難しいとされる女神へと捧ぐ回復呪文「希望」。

白翼だから。

それで片付けられるレベルではない。

少なくともリリイは自分以外に「希望」を唱えられるものを知らない。

歴代の魔法使い達も然りだ。

「……そんなに驚く事じゃない。妹弟子に負けたくなかったから出来るようにしただけ」

リリイの意志をくみ取ったかのように、カイトはそう言った。

妹弟子……？

「誰かに弟子入りしてたの？」

「両親も白翼だったんだ。父さんには剣を、母さんには魔法を習ってた。けど、母さんは俺よりも妹弟子の方がかなり難しい魔法ばかり教えて。負けたくなかったけど、たぶん、今でも妹弟子の方が魔法使えるよ」

少しばかり悔しそうなカイト。

見ていて可愛かった。

そして、可笑しかった。

思わず笑ってしまう。

それで、カイトはすっかりへそを曲げてしまったようだ。

「妹弟子は、王都にいるのか？」

リリイが聞くが、カイトは何も答えなかった。

「それじゃあ、俺は学校へ行きますカラ」

そう言っつて鞆を持つと、ぼんやり見上げたリリイの頬に口づけをした。

二回目の失態にリリイは顔を真っ赤にする。
何も言えなくて。

カイトは少し寂しそうにリリイの頭を撫でると出て行くところとする。
「風呂に入って、ご飯はちゃんと食べるように。話は帰ってきてから」

そう言い残して出て行ってしまった。

リリイの両足は綺麗に完治されていて、さすが「希望」の呪文。
足だけではなく、そのほかの傷も痕さえなかった。

机の上には朝食と昼食が置いてある。

リリイの腹の虫が鳴った。

リリイはとりあえず朝食を食べることにした。

第六章 魔女は怒られる（後書き）

すみません。

22時に更新するつもりでしたが、21時に寝てました。
今起きたので、更新します。

第七章 魔女と子供

昼食になると、リリイは出かけることにした。別に悪いことではない。

しかし、今度は絡まれないようにするため、フードをかぶることにした。

シュバルはやっぱり賑やかで。

街の雰囲気が好きで住む精霊もいるくらいだ。

リリイはどちらかというと静かな森の方が好きだが、決して街は嫌いでは無い。

そこまで偏屈ではないつもりだ。

リリイはリングゴを買って食べ歩いた。

「あ、あのときのお姉ちゃんだ！」

声をかけてきたのは、8歳ほどの……前回シュバルへ来たときに出会った少女だった。

黒いセミロングの髪にクリツとした子猫のような青い瞳。

少女はリリイのところまで来ると丁寧にお辞儀をした。

「あたしの名前はソラン・ルービスです。あのとき、遊んでくれてありがとうございます」

「ううん。私も楽しかったよ」

リリイはソランの頭を撫でた。

「お姉ちゃんの名前は？」

「リリイ」

一言で返したリリイに、ソランは不思議そうに首を傾げた。

「名字は？」

そこでリリイはハツとする。

普通に考えたら、名字がないことはとても不自然なことだ。

けれども、リリイは自分の名字を知らない。

それどころか、リリイという名前さえ、本当の名前なのか怪しいと

ころだ。

リリイは首を振って考えを消した。

「私は、ただのリリイだよ」

ふうん、とソランは鼻を鳴らした。

「ま、いいや。それよりも遊ばし！」

ソランはリリイの手を取って走り出した。

何の目的もなしに街へ来たのだ。

暇つぶしには良いだろう。

リリイも一緒になって走った。

ソフトクリームを食べながら二人は街を巡った。

花屋でも薬草を売っており、品の良いものが手に入った。

広場では子供達が大縄をしていて、それに混ぜてもらった。

何度も引っかかった。

少年達がボールをぶつけてきたので投げ返してみた。

一人の少年の顔面にぶつけてしまって、泣かせてしまった。

……申し訳ない。と、言うか大人げない。

たくさん笑った。

こんなにも無邪気に笑ったのはとても久しぶりだった。

そう、懐かしい。

たくさん的人数ではないけれど、こうやって遊んでいた気がする。

夕暮れまで遊んだ。

子供達は家に帰っていくのを見送ってから、リリイも家に帰ることにした。

カイトが夕食を作りながら待っている。

そう考えるのが、とても嬉しかった。

朝の不安や絶望はすっかり消えていた。

けれど、リリイは気づいてなかったのだ。

今日シュバルへ来たために、運命が動き出してしまったことを。

女は男の肩に触れた。

男は何も言わず女が肩に乗せてきた手をつかむ。

「レグ……」

女は切なげに男へ呼びかけた。

レグは一度まぶたを閉じて、女の手の甲に口づけした。

「大丈夫だマール。リアリスがたとえ全てを忘れていても、あの人達がリアリスを愛したことは変わらないのだから」

「会いに行くの？」

マール
女の疑問に、レグは頷いた。

「真実は知らなければいけない。それが、リアリスの使命だから」
普通に生きられない。

始めから分かっていたことだ。

だから、あの人達に任せたのだ。

けれども、あの人達はもう、この世にはいない。

「運命が動き出す。魔法を揺るがす運命が」

楽しそうに遊ぶ子供達を見つめながら、レグは呟いた。

第八章 魔女と記憶

「で、こんなに遅くなった訳か」

帰ってみると、夕方ではなく、夜になっていた。

やたらとカイトの後ろに黒い影が見えるのは気のせいだろうか。

夕飯を囲んで、カイトは不機嫌に納得していた。

「とりあえずご飯を食べようか」

何事もなかったかのように、夕食を食べた。

後片付けまで済ませると、リリイは逃げるために自分の部屋まで逃げ込んだ。

ここならカイトも入ってこれまい。

しかし、詰めが甘かった。

「結界ぐらい張ろうよ」

振り返れば、カイトがベッドに腰をおろしていた。

おいおいおい。

可笑しくない？ねえ、可笑しくない？

まさか女の子の部屋に堂々と入ってくるなんて。

カイトは自分の隣を叩き、リリイに座るように指示する。

リリイは仕方なく座ることにした。

「リリイは朝、どうして走っていったの？」

「怖い夢を視て……急に何もかもが嫌になって、気付いたら走り出してた」

リリイは自分で言っていて、かなり危ないと思った。

夢遊病のたぐいだと思われろのではないか。

しかし、そんな心配は必要なかった。

カイトは真剣に聞いてくれていた。

「記憶の方は？」

おそらくスウアンから聞いていたのだろう。

リリイは首を横に振った。

「分からない。何か思い出せたんだと思うけど、すぐに忘れた」
リリーの頭を遠慮がちにカイトは撫でた。

「カイト……？」

「明日は王都へ行こう。俺も、丁度学校が休みだし」
不思議な感じがした。

まるで焦らずにゆっくり思い出せばいいとでも言っているかのよう
な口調。

「怖い夢を視た日は俺の部屋に来ると良い。少しくらいなら話を聞
くから」

「え、いくら何でもそれは……」

しどろもどろになってリリーが言っているとカイトは微笑んだ。

「昔はよく一緒に……」

ぼそりと呟かれた言葉をリリーは聞き取った。

「え？」

「何でもない。気にしないように」

そう言っただけでカイトは立ち上がった。

リリーは思わず目で追ってしまう。

「どうしたの」

「自分の部屋に戻るよ。これ以上一緒にいたら襲いそうだし」
最後の一言に、リリーは耳まで赤くする。

それを見てくすりと笑うと、カイトは部屋を出て行った。

少し悲しげな顔。

何処かでリリーとカイトは会ったことがあるのだろうか。
覚えてはいない。

少なくとも、2年間の間では無いだろう。

じゃあ、いつだろう。

「もしかして、カイトは私の過去を知っている……？」
そう結論を出したとき、突然睡魔に襲われた。

リリーはベッドに倒れ込む。

薄れていく意識の中で、懐かしい声があった気がした。

第八章 魔女と記憶（後書き）

コメディがもうそろそろ欲しいなあ・・・。
でも作者の性格的にコメディ書くの大変……。
頑張ります。

第九章 魔女と祭り

リリイとカイトはシュバルへ出てきた。

街には華やかなデコレーションが施され、なんだか昨日よりも人が多かった。

所々に魔法で宣伝する店もあれば、語り部達が唄の競争をしていたりもする。

こんなシュバルを、リリイは知らない。

「何、何、なに〜〜〜〜！？カイト、何これ」

子供のようにはしゃぐリリイを見て、カイトは笑った。

「結婚記念祭。現在の王と王妃がこの日に結婚したんだよ」

そんなカイトの説明は耳に入らない。

自分で聞いたくせにね。

「あれ、あれ何？」

リリイはカイトの手をつかんで走り出した。

^{カニェル}祭りなんて初めてなのだ！

雰囲気は紛れて珍しい種族や精霊を見つけることが出来、珍しい物が手に入りやすくなる。

とあるカフェにリリイ達は入った。

席に案内され、カタログを見る。

「この、時間制限パフェって何？」

見たこともない物に、リリイは首を傾げた。

「特大パフェのこと。制限時間内に食べ切れたら、賞金がもらえるんだ」

カイトから説明をされ、時間を見る。

時間は20分。量は1？。

余裕じゃない？

「じゃ、私これにする」

「ええ！？」

リリイの言葉に、カイトは驚いた。

「やめておいた方が……」

「お願いしまーす」

「無視デスカ！」

十分後。特大パフェがテーブルの上に置かれ、その大きさに感激した。

店員が時間を計るためにストップウォッチを持って来る。

店の客もリリイの方を見て驚いていた。

リリイにしてみれば、どうしてそんなに驚いているのか、まったく分からない。

カイトはあきれ顔でリリイを見ていた。

「こんな量大丈夫？」

「心配しない心配しない」

リリイがスプーンを持ってパフェを食べようとすると同時に、スタートは切られた。

「そう言えば、昨日街の子供と仲良くなったの」

「へえ」

「大縄とか、ボール投げとか楽しくってね」

「そう言う遊びはあまりしなかったもんな」
え。

リリイはカイトを見て手を止めた。

カイトはリリイを見ている。

何を、言った？

「ほら、早く食べなきゃ」

笑顔で、リリイの疑問を流したカイト。

リリイはパフェの事を思い出して食べ始める。

開始から、10分後。

リリイは最後の一口を食べた。

店の中で歓声が上がる。

カイトは口を押さえてうつむいていた。

「どうしたの？」

賞金をもらったリリイが聞く。

「いや。見てるだけでお腹いっぱいデス」
そうですか。

二人は店を出ると、祭りを見て回ることにした。

面白い物がたくさんあつて楽しかった。

けれども、幸せはそう続くものではない。

リリイとカイトは広場で腕相撲大会に出た。

カイトが勝つて、賞金をここでももらつて。

笑っていた。

「リアリス」

一人のフードをかぶった男が、リリイの事をそう呼んだ。

カイトの顔が一瞬で蒼白になる。

「カイト、知っている人？」

リリイは、男とカイトを見比べる。

「っ」

カイトは、次に男が何かを言い出す前にリリイの腕をつかんで走り出した。

まるで、逃げるように。

「カイト、どうしたの？」

人混みの中を分け入って逃げるカイトに聞くが、応えてくれない。
急に人混みが動いた。

その反動で、リリイとカイトは引き裂かれる。

「リリイ！」

カイトは必死の形相でリリイを呼んだが、リリイは人混みに流されてしまった。

緩くなったところで路地に入り、現在位置を確認する。

広場からかなり流されたようだ。

リリイはカイトと魔法で連絡を取るために、杖を打ち鳴らそうとした。

「リアリス」

男の声に、リリーの動きは停止する。
振り向けばあの男がいた。

男がフードを脱ぐと、リリーよりも濃い赤色の短髪が目に入る。
リリーと同じ瞳の色で、よく似た顔立ち。

年は20代前半といったところだろう。

「久しぶりだな、リアリス。いや。今はリリーか？」

男の声に、リリーの心臓が跳ねた気がした。

第十楽章 魔女と兄妹

「だ……れ……？」

喉の奥に何かがかつかえて、上手く喋れない。

息苦しさを覚える。

こんな男、リリイは知らない。

頭の中で警鐘が鳴っていた。

この男は危険だと。

無意識にリリイは後ずさった。

生理的に逃げなければならぬ何かを察したのだ。

しかし、男はにやりと笑うと、リリイに抱きついてきた。

「何だよ何だよ！せっかく、お前の兄がこうして会いに来てやったのに」

乱暴にリリイの頭を男はかき回す。

……あれ。今、なんて言った？

「貴方が、私の……兄？」

完全に思考停止。

確かに似ている。

顔の作りも、髪や目の色も似ている。

そもそも、綺麗な赤髪なんてそういるものではない。

兄妹だと言われても、納得できる材料は目の前に存在していた。

「会いたかったぞ。2年間も会ったんだからな」

嬉しそうに言う男は、リリイの頭をかき回すのを止めない。

「ど、どうして2年間も会いに来なかったの？どう言うことよ」

「まあ、色々あるって事だ」

軽く流されてしまい、調子が狂ってしまう。

何なのだ。この男は。

「名前覚えてないんだろ？俺はレグ」

「レグ……」

「ああ。お前は、兄様って呼んでたけどな」
少し切なそうな顔。

懐かしんでいるような、記憶がないことに悲しんでいるようにも見え
た。

「まあ、なんだ。少し話でもしないか。家にでも帰って」

「レグ様。リリイは返してもらいますよ」

レグの言葉を遮って、通りの方向からカイトの声が出た。

凄まじい殺気を放ちながら、カイトはレグをにらんでいた。

「カイト……？」

「カイト、お前は俺に楯突く気なのか？」

威圧感のある声。

リリイは二人を交互に見た。

まさか。二人は敵対している？

「俺は貴方の僕ではない。俺が主とするのは、女王陛下ただ一人だ」

「マールが了承していたら？」

その言葉に、カイトは顔を白くする。

「そんなはずはない！あの方はリリイを」

「この子の盾は2年前、大臣達の手によって死んだ。ああ。お前の
母親だったな」

カイトは怒りに震えていた。

拳を血がにじみ出んばかりに握りしめて、レグを睨み付ける。

リリイのいない、どこか遠くの話をしているような錯覚。

しかし、それはリリイ自身のことだ。

「盾が無い異常、この子の立場は不安定だ。スウアンが一樣保険と
してついていたが、先程、失踪の連絡が来てな。今はこの子の盾が
いないという事になる。」

その話に愕然としたのはリリイだった。

「スウアンさんが！？」

「スウアンは元々、この任務が終われば姿を消すはずだった。身ご
もった子供を守るためにな」

それはともかく。

レグはカイトを見据えた。

「お前の任務はここで消えたわけだ。リリーの身柄は俺が預かる。お前は次の任務に」

「納得できるか！」

カイトの怒号が響き渡った。

「盾が必要なら、俺が盾になる。母さんと約束したんだ。リリーを守るって」

「……俺に楯突くのか」

すうっと、レグの目が細められた。

レグはリリーを片手で支え、もう片方で剣を抜く。

カイトはポケットから宝石をだした。

「剣を」

詠唱破棄で、宝石を媒介にカイトは剣を形成する。

リリーは顔を硬くした。

だめだ。二人を戦わせては。

「兄……」

リリーの呼びかけは、剣の重なり合う轟音でかき消された。

レグはリリーを支えているとは思えないほどの動きで、カイトを押しつけてゆく。

何度か剣を交えたところで、レグがリリーにも聞こえないほど小さな声で、カイトに何かを告げた。

カイトは大きく目を見開き、動きが止まる。

レグはそこを見逃さなかった。

鮮血が舞う。

カイトから。

「カイト！」

リリーは叫んだが、カイトは倒れると動かなくなった。

息はしている。死んではいないようだ。

レグがカイトにとどめを刺そうとする。

リリイはレグの腕から抜け出すと、カイトを守る様に立ちほだかつた。

「兄様。私は家へ戻ります。だから……カイトを、殺さないで」
泣きそうなのをリリイは堪える。

レグがあまりにも冷たい目をしていた。

暫くリリイを見つめると、レグは剣を引く。

「分かった。行こう。リアリス」

差し出された手を、リリイがためらうことは許されなかった。
振り向くことも出来ない。

カイトの顔を見ることも出来ない。

「リリイ……」

カイトが呻くように名を紡いだ。

けれども、カイトの下へは行けない。

「行きましょう。兄様」

リリイはレグの手をしっかりと握った。

第十一楽章 魔女と実家

連れて行かれたところは、マリーラ城の西棟の一室だった。

以前はリリーの盾だった人の為に用意された部屋だったという。

白が強調された部屋の隅にはほこり一つ無く、壁の橋やベッドの柱には見事な彫刻が施されている。

しかし、どんなに美しい物があったとしても、リリーの目にはそれらの物が入らない。

リリーはカイトが切られたあの日から、部屋に籠もり、食事もろくにとつていなかった。

今日も、ベッドからこうして動かない。

カイトがどうなったのか、いつも心配だった。

もし、カイトが死んだのなら、リリーも死んで良いと思った。

カイトと出会って、まだ一週間も経っていないのに、これ程までにカイトの存在が大きく感じられるとは思わなかった。

誰かの手が、リリーの頭を撫でる。

顔を上げると、レグの姿があった。

「一応、ノックはしたんだがな」

「兄様……」

レグは立ち上がると、リリーをベッドに座らせ、紅茶をいれてくれた。

「ろくに食べていないらしいな」

そう言って差し出されたカップを、リリーは無言で受け取る。

「……カイトは、無事？」

震える声で、リリーは聞いた。

レグは肩をすくめると、リリーの隣に腰を下ろす。

「『謹慎』という形で養生させている。龍族は普通の人間よりも丈夫だから、命にも別状はない」

その話を聞いて安心してしまう。

「よかった……」

ほっとしているリリイを、レグは抱きしめた。

「2年間。お前が記憶を取り戻さないかどうか、様子を見ていた。けど、お前は何も思いつき出さなくて。だから、今回お前の側にカイトを置いた。お前と数年間一緒に暮らしていたから」

リリイは目を見開いた。

レグを見ると、レグは悔しそうにリリイを見ていた。

「全てを話そう。俺が知る限りの、お前が辿ってきた軌跡を」

代々王家につかえる魔法貴族・ケフィ家の長女として、リリイは生まれた。

本当の名はリアリス・スノー・ケフィ。

真つ白な魂で生まれてきた子供という意味だった。

しかし、一族はリアリスに今までに見たこともない、膨大な魔力を持っていることに気付いた。

一族は焦った。

一族を継ぐ者はレグだと言われていたから。

次期当主よりも強い魔力を持った子供が、まさか女として生まれるなど。

リアリスは狙われる身になった。

家族からもぎこちない愛情しか与えられなかった。

「にいさま、どうしてみんなむしをするの？」

幼いリアリスが聞いた言葉に、レグは何も応えられなかった。

「大丈夫。俺が護るから」

何度もリアリスにそう言うて聞かせたような気がする。

それを母が快く思わないことは知っていた。

実際、母は一度父と離婚している。

レグは父に引き取られ、父は新しい女と結婚した。

その女はおそらくと言っていいほど、マリーラ国では最高の魔法使だった。

レグにも様々な魔法の知識を親身になって教えてくれた。

レグは、そんな継母が大好きだった。

けれども、継母はリアリスを産んですぐに他界する。

すると母はまた父と再婚した。

レグにとっては生みの親より育ての親と、言うほど継母が大好きだった。

だから、実の母親など、どうでもよかった。

あるとき、屋敷からリアリスの姿が消えていた。

「……母上。リアリスを見かけませんでしたか」

そう聞いたレグに、母は濃厚な笑みを向けた。

今でも、レグは母親を憎んでいる。

殺してやりたいと思う程、その笑みを忘れたこともない。

「当主の座にふさわしいのはお前。あんな小娘では無いでしょう？」

その言葉が、全てを物語っていた。

そしてここから、悲劇が始まった。

第十二楽章 魔女と追憶

レグの母はすぐに拷問にかけられた。

けれども母は死ぬまで、口を割ることは無かったという。

それどころか、一ヶ月後に母は失踪した。

ケフィ家は全力で探したが、母の行方もリアリスの居所もつかめなかった。

ケフィ家は諦めかけていた。

それから、1年2年……もはや生きてはいないだろう。

誰しもがそう思っていた。

レグも白翼に入り、リアリスを記憶の一部として受け入れていた。

そんな時だった。

街でレグはリアリスを見つけた。

傍らにいたのは龍族の女性。

白翼は少人数だったため、その女性が白翼にいたことも知っていた。

リアリスはリリイと呼ばれ、レグを見た途端に兄だと気付いた。

もちろん、レグも気がついた。

女性は白翼でも凄腕で、数年前に研究所で人体実験がされていたところを助け出したという。

けれども、女性はリアリスを渡そうとはしなかった。

リアリスもまた、女性から離れようとはしなかった。

頭がガンガンする。

痛い。苦しい。

「大丈夫か？」

話を中断して、レグが聞いてくるが、答えられない。

忘れなさい

誰かの言葉が脳裏に過ぎったが、リリイは拒否した。

思い出さなくてはいけない。

逃げ出してはいけないのだ。
過去から。悲しみから。

何かが崩れてゆく様な音がした。
それは、リリイに封じ込まれていた記憶の結晶。
左腕が突然痛みと光に襲われた。

「リアリス！誰か……誰か医者を！」
虚ろになっていく視界。

リリイは必死に手を伸ばした。
会いたい。貴方に会いたい。

不意に、全ての景色が歪んだ。
すると痛みは消え、自由に身体が動く様になる。

周りは城の一室ではなく、リリイの家の前だった。
リリイが家の中へはいると、二階から声がした。

リリイは自室へと入ると、幼い頃のリリイと、カイトによく似た龍族の女性がいた。

「わたしが、ころしたの……？」

ミニリリイの真剣な問いに、女は頷いた。

研究所。

一つの言葉が脳裏を過ぎる。

リリイはミニリリイと、思考がシンクロしている事に気付いた。

「そう。貴女は目覚めてしまった。本来は眠ったままで終わるはずの力を、私の血でね」

ミニリリイは思い出している様だった。

研究所では連れ去られてきた子供達が人体実験の犠牲者になっていたこと。

ミニリリイが、XV¹⁵と呼ばれていたこと。

女の血が、リリイの中に潜む狂気を、呼び覚ましてしまったこと。
その狂気が、研究所にいた研究員と、もう死を待つだけのキメラに死を与えたこと。

そして女の血はリリイの中に溶け込み、魔法世界をも揺るがす力を

手に入れてしまったこと。

「貴女はもう、普通の人間としては生きられない」
女の言葉はシヨックだった。

そして、先の見えない未来に絶望した。

「貴女は私が引き取るわ。……貴女はどうしたい？」

「かえりたい。にいさまにあいたい。……けど、きつとにいさまの
じゃまになるから」

ミニリリイは女の手を取った。

「あなたとくらす」

場面はそこで切り替わる。

今度は8歳程のリリイがそこにいた。

龍族の少年と遊んでいた。

魔法をリリイが唱え、少年も魔法で応戦する。

しかし、リリイが勝ってしまい、少年は泣いてしまった。

「ほら。男の子がすぐに泣かないの！白翼になるんですよ」

リリイは少年の頭を撫でた。

「カイトは泣き虫なんだから。同じ年とは思えないね」

「なっ！俺だつてすぐに強くなつてやる」

「はいはい。ま、私に勝てる訳ないけどね」

リリイとカイトの何気ない会話。

そこでまた、画面は切り替わる。

シユバルの街。

今度はリリイが12歳になっていた。

リリイは人混みの中からレグを見つけ出す。

「兄様！」

「……リアリス？リアリスなのか??」

「うん」

仲の良い兄妹。

しかし、リリイは実家に帰らず、女の下に残ることとなった。
リリイは幸せだった。

実の家族とも再会を果たし、例え普通の人と一緒に生活出来なくても、不自由などなかった。
何もいらなくて。

ずっと、永遠に続くと思っていた。
本当の悪夢の日が、訪れるまで。

第十三楽章 魔女と義母

次に現れたのは14歳になったリリイだった。

家の中でベッドに腰掛けながら、微笑む女性。

「もう。年なんだから、あんまり無理しないでね」

リリイが冗談交じりにそう言うと、女性は怒った。

「まだまだ若いわよっ」

「いやいや。二千年以上も生きているんだから」

リリイは女性に薬湯を渡す。

「元気になったらまた薬草摘みに行こう。カイトも最年少白翼になったことだし、遊びに来てくれるって言ってたし」

和やかに言うが、その願いはおそらく叶えられないだろう。

女性の体は徐々に衰弱していた。

見た目は40歳前半にだが、もうすぐ死期が近い証拠だろう。

時折、女性は切なそうに空を見上げた。

先に逝った夫のことでも考えているのだろうか。

「リリイ」

女性の呼びかけに、リリイは杖を持つ。

荒く、家の廊下を歩く者たちがいた。

男たちはリリイたちのいる部屋に勝手に入る。

「リリイ・クルト！貴女に危険遺子があるとみなし、処分させていただきます」

男の言葉に、女性は目を細めた。

「それは誰の命令？少なくとも、陛下の命令ではない。あの子は、そんなに愚かではないもの」

「反抗意思があるのなら、この場で」

男の宣言と同時に、リリイは杖を強く打ち鳴らした。

「退け。今ならまだ、命は奪わない。私達の最後の時間を奪うな」
低く、男たちに警告する。

誰にも邪魔されるわけにはいかなかった。

女性の最後のひと時を、せめて平和に過ごさせてあげたかった。男たちは剣を抜く。

こちらの意思は関係ないようだ。

「リリイ」

「大丈夫。こんな奴等、すぐに終わらせる」

リリイはそういうと、もう一度杖を強く打ち鳴らす。

魔法円が形成される。

呪文を唱えている間は、魔法円に誰も入ってこれない。

しかし、リリイは弱点に気づいてなかった。

女性が人質に取られたのだ。

それに集中を欠いてしまった。

リリイの後ろにいた男が剣を振り上げる。

もう、魔法は間に合わなかった。

「リリイ！」

飛んだのは赤い鮮血。

視界が、血で赤く染まる。

きられたのはリリイ？

だけど痛みはない。

そうだ。リリイではなく切られたのは

「シエラ！」

シエラはリリイの身代わりになっていた。

血が溢れて止まらない。

もう手遅れだ。

「嫌……嫌だよ」

どんどん冷たくなってゆく体。

リリイは男たちをにらんだ。

許せない。

許さない。

殺してやる。

殺してやる！

「貴様らあああああ！」

リリイの中で、何かが爆発した。

男たちは消えうせる。

何がどうなったかはわからない。

光がリリイ達を包み、気づいたときには、男達は消えていた。

「リ…リイ…」

シエラはゆっくりと目を開け、最期の言葉を紡いだ。

シエラは最後の最後で愛し方を間違えた。

シエラの死を受け止めるのが、弟子であり、養子こひごであったリリイの役割だったのに。

シエラはすべての悲しみを一人で背負う気だったのだ。

最後にたどり着いた場所は、ライラの森だった。

リリイは元の姿に戻っており、家を通り過ぎ、森の中を歩いた。

リリイが行ったのは、すぐ近くの湖だった。

リリイのためにシエラが蒔いた種が芽を出し、成長し、花を一面に咲かせていた。

紫のアネモネと百合の花。

遠い昔、かつて絶滅した人間世界で咲いていた花だったらしい。

「花言葉は……」

「あなたを信じて待つ」

リリイはその声に振り返る。

「それに、無垢」

そこには、シエラがいた。

リリイは駆け出して、シエラの胸に飛び込んだ。

会いたかった。

思い出したかった。

「シエラっ」

シエラはリリイの頭を優しくなでる。

「つらい思いをさせてしまったわね」

「違う。違うよ」

リリイは顔をくしゃくしゃにしなから、シエラを見上げた。

「私は、ずっと言いたかった事があるのに、シエラってば聞かないで置いていくんだもん」

「え？」

シエラは不思議そうに首をかしげた。

リリイは涙を拭いて、シエラに告げる。

育ててくれて、ありがとう。

「っ」

シエラは大きく目を見開いた。

そして、リリイを抱きしめる。

「ごめん。本当に、ごめんなさい」

「私は、シエラの分も生きるよ。ちゃんと生きるからね。」

リリイの目から一度とめたはずの涙が流れた。

シエラもくしゃくしゃの顔で、リリイの涙を拭った。

「ありがとう。私達の大切な娘」

抱きしめていた腕からぬくもりが消える。

残っていたのは、アネモネの花びらだった。

風に吹かれて、花びらは舞ってゆく。

リリイは目を細めて笑んだ。

「私も帰るよ。大切な人のところへ」

そう言って手をかざすと、リリイの体は百合の花びらとなって、空を舞った。

第十四楽章 魔女と決意

リリイはゆっくりと瞼を開けた。

風が心地良い。

窓が開いていた。

空は深夜を指していて、部屋にはリリイ以外、誰も居ない。

そこは、城の一室だった。

リリイの頭痛はすっかり消えていた。

リリイはベッドから降り、テラスへ出た。

空は満天の星空だった。

記憶を取り戻した今、心の中はどこか落ち着いている。

「リリイ」

青年の声があった。

驚きもせず、リリイは微笑む。

「カイト。傷は大丈夫？」

テラスの手すりに、カイトが座っていた。

遠慮がちにリリイを見る。

「大丈夫だ。それよりも」

「あーあ。カイトって、私にまで他人行儀に話す奴だった？」

リリイの言葉に、予想外だったのか、カイトは驚いていた。

「な、な、な。お前、記憶が……！」

驚きに目を見開くカイトの方を、リリイは見た。

そして、カイトの方へ歩み寄る。

「うん。思い出した」

意外にすんなりと。

カイトは硬直していた。

もつともだ。

カイトからしてみれば、今までの2年間は何だったのかと言いたいのだろう。

リリイは左腕をまくり上げる。

そこには、X Vと刻印が刻まれていた。

「皆、シエラから聞いてたんだね。私から記憶を消すこと」
白翼や家族。

女王陛下までが、承認していたことになる。

リリイは唇をゆがめた。

「きっかけは、誰かが私に昔の話をする事。それから、私が逃げ出さずに現実を受け入れること」

以前に、リリイは夢で思い出しかけた。

けれどもリリイは現実を拒否した。

だから、シエラの名でさえも言葉にした直後に忘れてしまったのだ。
「私が、一番シエラの死を受け入れられなかった。だから、こんなにも遠回りをした」

リリイはカイトを抱き締める。

自然と涙が流れた。

「カイト。ごめん。私が、シエラを殺した」

カイトは暫く何も言わなかった。

そっと、リリイを抱き締め返す。

「違う」

振り絞った様な声。

切ない、カイト自身の言葉。

「母さんは、リリイと一緒に過ごして幸せだった」

カイトはリリイの顔を覗き込むと、シエラと同じように、リリイの涙を拭った。

「有り難う。母さんの最期を看取ってくれて」
嬉しかった。

救われたかったのかも知れない。

カイトに言われたその言葉が、胸に染み込んでゆく。

カイトもまた、泣いていた。

リリイは笑う。

「カイトは泣き虫変わってないね。形ばかり大きくなって」
そう。記憶がなくなったリリイは、カイトが年上だと思っていた。
けれども、本当は同じ年で。

「っな！俺は泣き虫じゃねえよ」

昔と変わらないカイトの口調。

リリイはくすくす笑った。

「はい。そこまで」

二人同時に振り返る。

部屋の扉に、レグが寄り掛かっていた。

レグは髪を掻き上げた。

「カイト。俺の妹に何してんだ？」

カイトとリリイは、互いの顔を見合わせる。

端から見れば、抱き合っているようにしか見えない訳で。

リリイは頬を紅潮させて、カイトを突き飛ばす。

カイトはあまりの勢いに、落ちそうになった。

「兄様、こ、これは違います。その、えっと……」

「リアリス。安心しろ。お前には怒っていないが、聞きたいことがある」

リリイのしどろもどろの対応に、レグは微笑んだ。

「お前の力はまだ完全じゃない。野放しにしても良いレベルの力でもない」

分かっていた。

否。リリイは自分の力がどんなものなのか、分かっていない。

覚えがあるかと聞かれたら、シエラが死ぬときに男達を消し去ったことぐらいだ。

あの後、男達がどうなったのかも分からない。

「実質。シエラ殿の最期に送り込まれた刺客は、お前の力を危惧した大臣によるものだ。お前は、どうしたい」

それでも、生き続けたい。

シエラとそう約束したから。

「私は、死ねない。かといつて、束縛される気もありません」
リリイは、レグにほほえみかける。

「私は、自由に生きます。あの森で静かに……今まで通りに」
カイトはリリイを抱きかかえてテラスから飛び降りた。
カイトの身体が、一気に変化する。

人型から龍へ。

全身は漆黒で、闇夜に動くはちょうど良い。

悪魔の様な翼を持ち、その大きさは全身の半分程。
どこかの昔話に出てくるような龍の姿。

黒龍。

カイトはリリイを乗せてライラの森へ飛んでいった。

「……いいの？」

ずっとそこにいたであろうマーラは、レグに聞いた。
レグは頷く。

「何も知らないで良いのなら、それに越したことはない」

「兄としては？」

「リアリスは、誰にもやらん」

レグのきつぱりとした言葉に、マーラは笑った。

あまりにも笑うので、レグは気分が悪くなる。

薄着で出歩いてきたマーラに、上着を貸した。

「風邪を引く。後でクリネとかがうるさいから気をつける。女王陛下、部屋まで送りましょう」

「はあい」

マーラはふと、リリイ達の去った方向を見た。

「まだ、物語は始まってさえしてない。炎髪の魔女よ」
リリイ・ケルト

マーラの呟きは誰にも聞こえることなく、空の彼方へと消えた。

終わりの唄 そして、続く

家に帰ってきた翌日。

いつもの朝が始まるはずだった。

いつもと同じで、リリイとしての再スタートの朝。

現れたのは、女王陛下からの命令書と段ボールを抱えたカイトだった。

カイトが段ボールを置き、リリイに手紙を渡した。

女王陛下はマール・アマリス・グランディセ・マリーラとよばれる人だ。

リリイも何度か、シエラの付き添いで会ったことがある。

リリイ・クルト

貴殿をマール・アマリス・グランディセ・マリーラが指揮する白翼の一人に任命する。

なお、貴殿に拒否権は無いことを伝え、初任務は

「つえええ！？」

リリイの悲痛な叫びが木霊する。

カイトが、申し訳なさそうに肩身を狭くした。

「城に呼ばれたら、こうなってるな」

グッタリとしたカイトがそう言った。

リリイに対して、同情の眼差しを向ける。

「リリイが学校行って無いこと知ったら、レグ様も陛下もそれは憤怒して」

リリイは段ボールから服を取り出す。

王都魔法学園高等学校の制服。

「リリイには母さんから教育受けてるから、勉強なんていらんけ

ど、行ってもらって良いか」

制服を手にしたリリイは、わくわくしていた。にっこり笑顔で、カイトに微笑む。

「面白そう！私、学校に行ってみたいかも」

その笑みに、カイトはほっとしているようだった。

初任務は、学校に通うこと。これは重要事項である。必ず3年間通うこと。

「カイト、時間って、大丈夫？」

リリイは時計を見て、首を傾げた。

カイトはゆっくり時間を見て、慌てた。

「やばいつ。リリイ、すぐにそれに着替えて。遅刻だ！」

まだ、本当の物語は始まったばかり。

これから紡ぐ物語に、幸あらんことを。

「魔法の根本的理論は心の作用。人も物も、皆心を中心に魔力を発生させている。それを使えるようにしたのが、媒介とされる杖や寶石。一度世界が滅びたとき、生き残った青い少女が、魔法を使ったのが始まり。あの子は、それを超えられるかな？」

「なぐに、一人でぶつくさ言っているのさ。シエラ」

「痛っ。耳を引っ張らないで」

「何？私の話をしてくれているのか」

「うるさいな。死にきれなかったのは、貴女が時空の狭間に連れ込んだからでしょ」

「そうとも言っ」

「否定しなさい」

「けど、シエラにはもう一仕事あるからね。天に昇ってもらったら、それこそこっちに喚ぶの大変なんだよ」

「だからって、友達の魂を時空の狭間に投げる奴がいるか！」

「ふふふふ。でも、そのおかげで、あの子に逢いに行けたでしょ」
「……良いように言わないの」
「もう時間がない。急がなければこの世界は終わる。一度世界が滅びたときのようだ」
「分かっている。止めなければいけない」
「あの子に、目覚めてもらうために、頑張ってね」
「ラピス。主に貴女が頑張るのよ」
「ええ？そんなぁ……」

T o b e c o n t i n u e d ?

終わりの唄　そして、続く（後書き）

第一部はこれにて終了。

自分は寮生で、長期間休みにしか掲載できないので、冬休み中に終わると良いなあ……って、思ってたら、年内に終了しましたよ。こりゃびつくり。

第二部ももちろんあります。

学園編で。一部よりも長いです。

春休みの時間を考えたら、そんなに余裕がなかったので、すぐに始めます。

お騒がせします。

第二部 序章

物語は始まる。

時計は止まらない。

崩壊まで、時間は残されていない。

第二部 炎髪の魔女 学園編 始動

炎のような髪の色をした長髪の娘が、廊下を歩いていた。

廊下には勉強が始まる為か、誰も居ない。

ここ、王都魔法学園高等学校は、マリーラ国で最先端の学校らしい。5年制のこの学校は一つの街でもあるかの様に広く、王都シュバルの東に位置する。

規模が大きく、まず、王都で知らないものはいないだろう。

此処にいるリリイを除いては。

そもそも、リリイは「学校」と言うものを知らなかった。

この学校はリリイの住む、ライラの森の正反対の位置にあるのだから。

それもある。

だが、最大の理由は、養母であったシエラ・クルトが勉強も全てみていた為、必要なかった。

それに、誰もリリイに「学校」の事を教えてくれなかったのだ。

学校へ行くきつかけになったのは、女王陛下と兄のレグに無理矢理白翼へ入れられ、初任務として、この学校へ行くことを指示されたからだ。

おそらくは、リリイに社会的勉強をさせ、白翼の管理下に置きたかったのだろう。

隔離される様にライラの森で過ごしてきたリリイにとって、期待に胸が膨らむ。

真新しい制服に身を包み、女教師の後に続いた。

案内されたのは、南棟の3階。

奥から二番目の「教室」と呼ばれる部屋。

カイトから学校へ来る途中、いろいろと学校での常識を教えられていた。

標識には、1-3と書かれてあった。

女教師は教室の扉を開いた。

リリイは女教師に続いて、教室の中へいる。

空気が揺れ動いた。

誰しもが、リリイを注目していた。

リリイは教室を見渡す。

長い机に、後ろに行けば行くほど、階段重ねになっていた。

一つの机に7人ほどの学生が着席しており、それが正面、左右と3列ある。

階段のおかげで、一番後ろの人の顔もはっきりと見え、机で考える
と3段。

人数を数えてみると、47人座っている。

当たり前の様に、女教師は教室の前にある「黒板」に、リリイの本
名を書いた。

リアリス・スノー・ケファイ

まだ馴染みのない名前。

リリイは有名な魔法貴族ケファイ家の長女として生まれた。

しかし、生まれ持つ魔力が莫大であったが為に事件に巻き込まれ、

リアリスは死人扱いされた。

故に、リリイはその名を使わなかった。

シエラ・クルトの義娘として、リリイ・クルトとして、生きてきた。
だから、本来の名前を出されたところで、ピンとこないのも当たり前。
前。

「リアリスさんは病気の為、学校に行ったことがないらしい。分からない事があれば助ける事」

完結にそう述べる。

男口調が、どこことなく知人を思い出させた。

リリイは女教師に促され、生徒に軽く会釈した。

「リアリス・スノー・ケファイです。えと。今まで養生していた先の養母と二人で過ごししてきたため、本名よりも、リリイと呼ばれる方が馴れているので、そちらで呼んでください」

嘘ではない。

リリイが優雅に一礼すると、教室のあちこちから話し声が聞こえる。今までこんな大衆の目の前に立ったことなど無いせいか、内心落ち着かなかった。

指示されたのは、正面の列。一番後ろの端だった。

リリイが座ると、隣に座っていた娘が握手を求めてくる。

桃色のパーマがかかった髪に、青色の瞳。

白く滑らかな肌はその子があまり外へ出ないことを物語っていた。

「私は、アンネ・クールエスト。宜しく」

「よろしく」

握手を返す。

すると、今度は階段を挟んだ左の列の女子生徒が、小さく手を振っていた。

シヨートの黒髪に、青い目。

運動でもしているのだろう。

肌が色濃く日焼けしていた。

「彼女はトルチェ・クレパウス。武芸が得意なの」

アンネが説明してくれる。

リリイは手を振り替えた。

「それでは、今日の授業を始めます」

そして、授業という名の勉強が始まった。

第二部 序章（後書き）

色々あつて、冬休みも4日とない自分ですが、ちょっとだけ進めておきます。

面倒な理由は前話の後書きを書き直したので、見てください。
それでは、皆さんよいお年をお迎えください。

第一楽章 昼食

休み時間になると、リリイは質問攻めになった。

今まで失踪していたケファイ家の長女と言えは有名らしく、好奇心をそそるものがあるのだろう。

リリイは当たり前障りのない答えを出した。

すぐに授業に入り、次の休み時間も、その次も。

休み時間という休みは、質問され続けて、昼休みにリリイは教室から逃げ出した。

このままでは身が持たない。

そもそも話すのはあまり好きではない。

もくもくと仕事をする方がリリイは好きなのだ。

そういえば、昼食はどうすればよいのだろう。

リリイは不思議になった。

リリイは何も持ってきていない。

食べるものがない。

仕方ないか。

リリイは窓の外を見ると、広い中庭が見えた。

青々と茂る森のような中庭。

入ったら迷子になりそうだ。

けれど、リリイの足は自然と中庭に向いた。

中庭は本格的な森の形状になっており、小川まで流れている。

中庭は、どこかライラの森を思わせた。

進んで行くと、ある木が目にとまる。

その一カ所だけが、まるで結界でも張ったかのように、円を描いていた。

一本の木が、円の中央に立っている。

太い幹に蔓が巻かれており、木は枝を伸ばして青々とした葉よりも、淡いピンクの花を咲かせていた。

花びらは5枚。

細長いハート型をしており、風が吹くに伴って花びらが舞った。その神秘的な光景に、リリイは感嘆の息をつく。

リリイは思わず木に触れた。

優しい匂いと気持ち。

心が洗われるようだった。

「桜って言う、何千年も昔にあった木なんだ」

リリイは声に振り向く。

緑色の髪 of 青年が、そこにはいた。

「カイト！」

カイト・クルト。

リリイを育てたシエラ・クルトの息子だ。

カイトはリリイの頭をくしゃりと撫でた。

「どうだった。ケファイ家のことで何か言われはしなかったか」

「大丈夫。つと、言うか。何か可笑しいね」

「何が」

「だって、カイトってば、私が記憶喪失だった時と凄い口調が違う」

カイトは罰が悪そうにリリイをにらんだ。

リリイが記憶を取り戻したのはつい最近の事だ。

たった数日の間だが、カイトの口調すら違っていた。

「〜だよ」だとか、優しくて。

リリイの記憶にあるカイトと全く違った。

「うるさい。記憶無いからって、優しくしたただけだ」

「うん。優しいのは変わらないね」

にっこり笑顔でカイトに微笑むと、カイトの頬が紅潮した。

顔を見られないようにするためか、カイトはそっぽを向いた。

「それよりも、俺たちが白翼だって事は気付かれるなよ。白翼のメ

ンバーは本人達以外知らないんだからな」

「はいはい」

「……分かってないだろ」

「いやいや。分かってますとも」

カイトは深い溜め息をついた。

そして、リリイの手元を見ると、あるはずの物が無いことに気付いたようだ。

「杖は？」

リリイは両手をひらひらと振った。

「家に置いてきた。だって、聞いたら今は杖よりも皆、宝石を媒介にして魔法を使うらしいじゃない。あんな身長丈の杖もって来たら目立つちゃう」

「だけど、お前の場合は宝石よりも杖が専売特許だろ」

「宝石でも出来ない訳じゃない。実力を隠すなら、杖よりも宝石だね」

そう言つて、リリイは青い宝石のついたブレスレットを、カイトに見せた。

カイトは気まずそうに目をそらす。

「リリイは俺よりも魔法出来るもんな」

「ほら、すねないすねない。そう言えば、私の昼食ってどうしたら良いの？」

カイトは気付いたように、リリイに弁当を見せた。

「一緒に食べれば良いと思つてな。ここで食べよう」

「うん、いいね」

リリイは笑つて弁当を広げることにした。

第一章 昼食（後書き）

あけましておめでとございます。

今年もよろしく願います。

昨日は元旦祭とかで更新できませんでした。

今日はもう一話ぐらいは更新します。

第二楽章 生徒会長

昼食が終わって教室に戻ると、アンネとトルチェがいた。

「ご飯食べた？」

「うん」

リリイは自分の席に座る。

トルチェが肘をついて話しかけてきた。

「リリイって、どのくらいの魔法使える？」

「ちよつとぐらいだよ」

アンネは興味無さげに相づちを打っていたが、トルチェは違った。顔を輝かせ、何やら納得したように頷いている。

「リリイ。私と魔法と剣で勝負しないか」

いきなりの挑戦状に、リリイは目を丸くする。

「いったいリリイが何をしたのだろうか。」

しかも、さつきカイトから釘を刺されたばかりなのに。

本気の勝負は絶対に出来ない。

「また始まった」

アンネがあきれたように呟いた。

「どうやら、よくあることらしい。」

「……何で？」

リリイの問いに、トルチェは慌てた。

「リリイが嫌いだとかではなくて」

「要するに、トルチェは闘うことが好きなのよ。強そうな奴見つけ
ては勝負を挑むの」

アンネが途中から説明してくれる。
なるほど。

でも、闘つとなると、相手の実力にもよるが、手加減できない場合
がある。

カイトにも怒られそうだな。

「やらない。興味ない」

リリイがそう言うと、アンネはやっぱりとても言いたげな顔をする。

「ほら、トルチェ。ああ言っているんだから」

「興味ないだと……？」

アンネを遮った言葉に、怒気が含まれる。

トルチェから異様な雰囲気が始めた。

「闘うことに、興味がないだと？」

「うん。だって、無意味な戦いをして、何の意味があるの？ 相手が強いかが強いかなんて、どうでも良いと思う。大切なのは」

「もう、我慢ならん！ 決闘だー！」

トルチェは、持っていた小型ナイフの刃先を、リリイに向けた。

リリイもアンネも呆れ返る。

「けっ……とう……」

「ばっ！ トルチェ、あんた何を考えてるの。決闘なんて」

「私は本気だ。この学校では決闘宣言すると、生徒会に申し出て一週間後に行くことが出来る。リアリス・スノー・ケフィ。私と勝負だ！」

ふんぞり返るトルチェにリリイ達は何も言えなくなった。

in 生徒会室

「駄目だ」

そう言ったのは、銀髪の青年だった。

背は高く、瞳は鋭い。

眼鏡をかけており、威風堂々としたその姿は、生徒会長と呼ぶのにふさわしい。

3年ガルシエーラ・ダルク。生徒会長だ。

「なぜですか！？」

トルチェが机を叩いて、抗議した。

一方、ガルシエーラは冷たい眼光で、トルチェをにらみ返す。

「リアリス・スノー・ケフィの戦闘行為は禁じる。本人が一番分か

っているはずだ」

「仰るとおりです」

リリイはホツとした。

戦闘行為が禁じられていることは知らなかったが、決闘なんてしなくてすむのはありがたい。

「あれ、会長。副会長は？」

アンネもホツとした物言いだった。

ガルシエーラは、肩をすくめる。

「隣の部屋だ。丁度良い。リアリス君は隣の部屋へ行きたまえ。紹介しよう」

ガルシエーラは立ち上がると、生徒会長の机の左隣にある部屋の扉を開いた。

「アンネ君達は退室してくれないか」

「どういっ……」

「分かりました」

アンネは手でトルチエを制した。

そのままガルシエーラを見据える。

何かを探っているようにも見えた。

「アンネ！」

「トルチエ。ここで騒げば処分を受けるから。失礼します」

アンネは丁寧に一礼して、トルチエを引きずる形で出て行った。

リリイは固まっていたが、ガルシエーラの手招きで部屋へ案内される。

部屋は薄暗かった。

ガルシエーラは早く入れとばかりに、リリイの背を押す。

リリイは反動で部屋に入った。

「かいちよ……」

ボタン！

扉の閉まる音。

視界から光が消える。

リリイは闇の恐怖に驚いた。

「開けてください！会長！？」

なぜ、閉じ込められるのかが理解できない。

リリイは扉を何度も叩いたが、扉は外から鍵がかけられていた。

刹那

殺気を感じた。

リリイは反射的に振り返る。

何かが部屋にいた。

リリイは、ポケットから宝石を取り出す。

気配は立ち上がり、はつきりと殺気で相手の姿を感じ取った。

床のきしむ音。

音からして、男だろうか。

リリイは宝石を強く握った。

第三楽章 生徒会

「誰」

リリイは強気に問う。

しかし、相手は答えなかった。

ようやく目が慣れてきて、相手が男だと言っことは分かる。

何かを持っていた。

男はそれを構えた。

剣を持っているのか。

リリイは睨みつけた。

「盾」

リリイが唱えると同時に、男は剣を振り上げた。

ギイーン

耳障りな音が響く。

男とリリイの目があった。

リリイは盾を解除して横に飛び、男と距離をとる。

「こんな事をして、何の意味があるの？ 戦闘行為は禁じられているはずでしょ」

苦虫を噛み潰したように顔をゆがめる。

男は素早い身のこなしでリリイに詰め寄った。

仕方ないと、リリイは目を閉じた。

「ブリザード フェザー
氷羽」

攻撃魔法。

リリイの体に何重もの鎖につながれたような気分になった。

水蒸気を元に氷の羽が構築される、

「放て！」

リリイの合図と共に、氷の羽は男を襲った。

しかし、男は一瞬でなぎ払う。

リリイは後ずさる。

「ファイヤピラー
炎柱」

立て続けに魔法を唱えるが、宝石が音を立てて壊れた。魔法は不始末の末に消える。他の宝石を使おうとするが、男がリリイの腕を捕らえた。リリイは男に押し倒された。やばい。

「盾！」

リリイが叫ぶと、盾が形成され、男を吹き飛ばした。体中がきしむ。

とっさにブレスレットについた宝石が媒介の役目を果たしたようだ。ブレスレットが粉々に砕けた。

何度も詠唱破棄をしたせいかわ、闇で見えにくく、集中も出来ない。相手も誰か分からないのだ。

完全にリリイはパニックになっていた。

いつも使っている杖も手元がない。

リリイは、自分の魔力を宝石だけでこれ以上制御するのは難しいと思った。

「答えて。貴方が誰なのか。じゃないと、本気を出すからはったりをきかせる。」

しかし、男は相変わらず殺気を出して、リリイに近づいた。

リリイは新しい宝石を出そうとするが、ポケットに入れていた宝石が無いことに気付いた。

どうして。

いつ落としたのか。

リリイは舌打ちをして男の攻撃を避けようとした。

「本気を出すんじゃないのか？」

男はリリイの腕を掴むと、リリイを抱き締める。

リリイは聞き覚えのある声に驚いた。

「カイト……ト……？」

カイトは溜め息をついて、剣を捨てた。

カイトが剣を捨てるのを終了だと告げるように、部屋に明かりがついた。

「これで満足か。ガルシエーラ」

扉の方にはガルシエーラが立っていた。

「リアリス君は本気を出していないように見えたが？」

「当たり前だ。リアイスの専売特許は杖だからな」

「どうして持っていない」

「学校で本気を出すわけにはいかないからだ。本気を出さなくても、あれだけの高レベルな魔法を詠唱破棄で、しかも連続だぞ。宝石が壊れるのも当然だ」

二人の会話にリアイスはようやくくことを理解する。

「私を試したの!？」

「君がどれほどの能力を持っているか、知りたかった。そうそう。」

これは返しておくよ」

ガルシエーラはリアイスの手に3個宝石を乗せた。

「いつの間に……」

「君がこの部屋に入るときだ」

ガルシエーラよりも先に部屋へ入り、背中を押されたことを思い出す。

あの時に盗られたのか。

3人は一度生徒会室へ戻った。

ガルシエーラが椅子に座る。

「紹介しよう。彼が副会長のカイト・クルトだ」

「そう言うことだ。リアイス。ガルシエーラにだけは俺たちが白翼だつて事は知っているから」

「待って！」

混乱した。

何が何なのか、リアイスには分からない。

「順を追って説明して」

「簡単な話だ。私が会長になった後、入学してきたカイトを副会長

に仕立て上げた。彼は中学校時代からの友人でね。白翼だと言うことは知っていた。生徒会に入れば、様々な情報操作も可能だ。白翼だと言うことがばれそうになっても、生徒会が協力体制をしけば、事実をうやむやにも出来る。そして、君が来た。カイトから君も白翼だと言うことは聞かされてね。私は見た物しか信じない主義だから、試させてもらった」

ガルシエーラがそう説明してくれる。

リリイも何となくだが、言いたいことは分かった。

「私に、生徒会へ入れと？」

「そう言うことだ」

冗談じゃない。

そんな得体の知れないところへ入ってたまるか。

リリイはガルシエーラとカイトを睨みつけた。

「お断りします」

「残念ながら、君に拒否権は無い」

ガルシエーラの物言いに、リリイは腹が立った。

しかし、カイトの次の一言で、リリイは納得してしまう。

「女王陛下からの命令でもあるしな。面倒ごとが嫌いなのは分かるけど、諦めてくれ」

退路はすでに、無くなっていた。

第三楽章 生徒会（後書き）

1 / 4 に寮へ帰りますので、此処までです。
春休みまでお楽しみに

第四章 諦め

リリイはうつ伏せになって、机に座っていた。ありえない。本当に、ありえない。

面倒ごとが嫌いなリリイにとって、今の状況は激しく最悪だった。生徒会がどういふところかは分らない。

しかし、とてつもなく面倒なものに巻き込まれている事は、直感で分る。

「家に帰りたい……」

「そりゃまたどうして」

「面倒ごとは嫌い……」

横を見ると、トルチェとアンネがいた。

トルチェは腕を組み、アンネは控え気味に手を振っている。

「難さってまた一難。」

「一体、何があつたのかな？」

怖い。

雰囲気怖い。

何か化け物が見えるよ!?

リリイは押しに負けて、生徒会に入った事を教えた。

トルチェは驚き、アンネは納得していた。

「ケフィ家の権力を使う気かしらね」

「それは無いと思う」

アンネの考えを、リリイは否定した。

「私はもう、ケフィ家から絶縁されているのと変わらないもの。両親とも最後に会ったのは10年以上前……」

リリイは肩をすくめた。

「私がこうしてケフィ家を名乗っているのは、兄様からの支持だよ。兄様はそれだけの力があるし」

「色々複雑なのね」

アンネが興味深そうに言った。
そんな複雑でも無い気がするが。

リリイは時計を見た。

6時限目も終了し、そろそろ帰らないと、夕ご飯が遅れるだろう。

「リリイ、帰るぞ」

タイミング良く現れたのはカイトだった。

トルチエとアンネが驚いた顔をする。

「カイト先輩と知り合い？」

「まあ、色々」

適当に流して、リリイはかばんを持ち、教室を出た。

カイトと2人で校門まで歩く。

「ごめん。こんな事になって」

「謝っても、どうにもならないでしょう」

カイトの謝罪を、リリイはすっぱりと断った。

しばらく2人は無言で歩いて。

重たい沈黙が降りていた。

リリイは別に怒っているわけではない（確かに迷惑はしているが）。

カイトからしてみれば、後ろめたい事なのだろう。

しかし、昔に比べたらまだましなものだと思う。

リリイの記憶になるカイトとシエラのする事はほとんど厄介ことば

かりだったのだから。

白翼であるが為に、さまざまな事に巻き込まれたものだ。

「巨大バジリスクに追いかけられた事や、七色の卵を探すとか。そ

んな無茶なコトに比べたら全然まし」

リリイの言葉は、カイトの古傷をえぐった。

「慣れすぎて困るぐらい」

さすがにコレは止めだった。

カイトは完全に項垂れる。

それを見ているのも面白い気がするが。

「明日から、杖を持っていくね」

リリーの宣言に、カイトは驚いた。

「どうして」

別段驚くことではない。

リリーは生徒会室でカイトと戦ったことを思いだした。

ただの宝石では、リリーの本気が出せない。

「とつさに力が必要になれば、杖がなかったら大変でしょう」

「それもそうだが……」

カイトは渋る。

リリーに力を使って欲しくないのが本音なのだろう。

生徒会に入れたくせに。

リリーはそんなカイトを黙殺した。

第四章 締め（後書き）

寮のパソコン出来る時間が20分程度。

部活で夜は出来ないの、朝にちよつとだけやっています。

学校の準備もあるので1週間に1、2度くらいしかしていないので、遅筆です。

長期休み以外はちよつとしか書けないので、ご了承ください。

次の長期間休みは3月26日～4月3日くらいまで。

次話もお楽しみに！

第五章 嵐の予感

其処は、リリイのよく知るライラの森だった。夜も深くなった頃、リリイは険しい面持ちで、箒ほうきに乗っていた。強くなる風が、リリイの炎髪をなびかせる。

目の前にいる人物は、不適に笑っていた。

銀色の長髪を一つに束ね、その瞳の色は魔物を示すかのような赤。その頬には、リリイの腕にあるような数字が刻まれていた。

青年はウツトリとした表情を浮かべ、リリイを見ている。

「どうして……どうしてお前がここに」

リリイは顔を歪めていた。

この青年がここにいる事が信じられなくて。

そう。確かに、リリイはこの青年を知っていた。

青年は艶美に唇を歪ませる。

「さあ。終焉の始まりだ」

明け方。

リリイはベッドが壊れるかと思うくらいの勢いで飛び起きた。息が乱れ、髪はぼさぼさだ。

「なんなの……あれは」

あまりに強烈で鮮明な夢に、リリイは顔を歪ませる。

「あいつは、死んだはずなのに……」

その呟きはリリイ以外に聞こえることなく消えてゆく。

ひゅうつと、風が吹いた。

見れば窓が開いている。

昨日は閉めて寝たはずだ。

リリイの記憶にもはつきりと残っている。

リリイは窓を閉めようと近づいた。

不意に、窓を閉めようとした手が止まる。

誰かに見られているような気がした。
外から？

違う。

リリイは振り返り、今まで居たベッドの方を向く。

其処には、何も無い。

しかし、確かに何かの気配がしたのだ。

リリイは窓を閉めると、注意深く部屋の中を見回す。

結局、気のせいだけで終わった。

リリイは準備を終わらせて1階に下りると、すでにカイトが起きていた。

並べられた朝食。

ハムにパンにスープに……シエラの息子とは思えないほどの料理の腕前だった。

(そういえば、シエラって家事全般駄目だったな)
昔のことを思い出しながら椅子に座ると、最後の一品らしい料理を持ってカイトが出てきた。

「おはよう、カイト」

リリイがそう言つと、カイトは不思議そうに首を傾げた。

「……何かあつたか？」

「え？」

「顔色が悪い。もしかして風邪でも」

「あ、ああ……違うの。ちよつと嫌な夢を見ただけ」

小さく手を振って、何でもない風に見せる。

あまり自分では何でもないのだが。

そんなに顔に出ているのだろうか。

リリイは思わず自分の頬を撫でる。

「何もないなら良いけど、何かあればすぐに言えよ」

「うん、ありがとう」

前にシエラの夢を見て、狂乱してしまったことがある。

それを心配しているのだろう。
リリイとカイトは朝食を取り、いつも通りの朝を迎えた。
いつも通り。

何も変わらない朝。

このまま、平和であればいい。

刹那に、そう願ってしまう。

「君の思う未来は来ない」

青年は遙か彼方にいる娘にそう答えた。

その声が聞こえるとは思わない。

しかし、そう言いたかった。

「君は神々に愛される存在。この世でただ一人の」

いや。これ以上は言ってはいけないと、青年は首を振る。

それは、これから彼女が知っていかなければいけないのだから。

全ては終焉へと向かう。

それは、止められやしないのだから。

「僕は君の為に、終焉を始めよう」

君が絶望を感じる前に。

全てを失い、本来の終焉を迎える前に。

「だから、教えてよ。僕の」

闇の中、青年は呟いた。

歴史が繰り返す前に。

第五楽章 嵐の予感（後書き）

お久しぶりです。あと四日ほどしかありませんが、スピードアップして夜から、明け方にかけてアップしていこうと思います。

第六章 追憶

聞こえるのは悲鳴。

啞然と見るシエラの瞳は、恐怖に歪んでいた。

見えるのは囲む炎よりも赤い鮮血。

私は笑っていた。

歪んでいた。

心が壊れていた。

人の形をした化け物。

私は笑っていた。

狂っていたのだ。

全てを壊すためにつくられた。

全てを造るために育てられた。

愛情など無かった。

ただ、シエラやカイトに出会うまでは。

「リアリス・スノー・ケファイ！」

大音量で名を呼ばれ、思わずリリイはハツとした。

見れば歴史教師がこめかみをふるわせ、握りしめたチョークを握力だけで破壊している。

「転校生だからと言って俺は容赦せんぞ。10年前のタロット事件について言ってみる」

ザワリと教室が揺れた。

トルチエの眼光が鋭く光る。

リリイは立ち上がるうとするトルチエを手で制した。

質問を投げかけた当の本人は何も知らないようだ。

教室が揺れていることに、不思議そうだ。

10年前のタロット事件。

それは、リリイにとって、忘れたくとも忘れることの出来ない事件

だ。

なんたつて、誘拐されたのは、リリイ本人なのだから。

「10年前、数十名の子供が行方不明になりました。首謀者、仲間
は不明。郊外で爆発が起き、調べればそこには一つの認可されてい
ない研究所と50名を超える死者を出していたようです」

すらすらと、情報を述べてゆく。

まるで手元に台本があるかのように。

もつとも、リリイに台本など、必要ないのだが。

「生存者は数名。研究員と思われるものはおらず、被験者と思われ
る子供数名だけ」

研究員がいない訳を、リリイは知っていた。

夢の内容を思い出す。

気持ち悪い。頭の中がふらふらと揺れた。

「研究所爆発の原因は救出に向かった白翼のものとされるが、詳
細は分からない」

おぞましい研究。

人を超えるものを作り出す研究。

生き残った被験者でも、その幻にとりつかれて、暴走したものもい
る。

迫害され、旅に出たものもいる。

5人にも満たない生き残り。

リリイは、一人一人の顔を知っていた。

「以上ですが、何か問題でも？」

あまりにすらすらと述べたためか、教師は呆然としていた。

リリイの言葉で目が覚めたようで、咳払いをして授業を進めた。

リリイは心配げなアンネに微笑んだ。

大丈夫。もう、過ぎた過去なのだから。

昼休み。

リリイは一人でいた。

トルチエはどうやら追試のことで呼ばれたらしく、アンネは付き添いだ。

入学早々から追試というのも複雑だが、リリイは一人で昼食を摂ることにした。

中庭の広い森に入る。

木々がざわめき、風邪の精霊が笑っているのが聞こえた。

町よりもこういった自然にあふれたところの方が、精霊はいるものだ。

好奇心をそそられ、奥まで行くと結界のようなものがあつた。入っていけないらしい。

関係者以外立ち入り禁止と、警戒に書かれていた。

面白くない。

引き返そうとリリイは振り向いたとき、一陣の風が吹いた。

驚いたような、助けを求めようような精霊達の声。

リリイは奥とは逆の方向の空を見上げた。

「まさか……」

そんなわけがないと思う。

しかし、現実にはあり得ないことではない。

『リリイ、すぐに来てくれ！』

カイトの風に乗せた言霊が届く前に、リリイは走り出していた。

第七章 魔物の襲来

『g a a a a a a a a a a a a a a a a!』

獣のような咆哮があがる。

学園の外に、巨大な闇の穴が出現し、魔物が現れた。

闇の穴とは、魔物の出現するためのゲートのこと。

闇の穴が開けば、間違いなく魔物が出現すると思って良い。

「そんな……まさか」

しかし、王都での出現はまずあり得ない。

結界が張ってあるからだ。

闇の穴が開かないように、神々の庇護があるはずなのだ。

その出現は誰も予知していなかった。

カイトが先頭に立ち、上級生を中心に闘っている。

さすが王宮を目指す生徒達。

少しくらいでは物怖じしていないようだ。

「フライ飛べ」

リリイは杖に腰をかけ、魔法を唱える。

杖はリリイごと浮くと、リリイはカイトの所までとんだ。

「リリイ！」

「カイト、戦況は？」

リリイが来たと分かると、カイトはいったん後方へ下がった。

「数はおよそ50。前衛、後衛で陣形を組んでいるらしくてな。誰

か指揮しているようにしか」

「でも、私たち二人でも勝てない相手ではないでしょ？」

リリイの言葉に、カイトは一瞬呆れたように顔を歪ませた。

カイトの次の言葉を待たないうちに、リリイは杖を打ち鳴らした。

「生徒は非難シェルターに全員待機。あと3分以内に速やかに遂行

せよ」

「リリイ！勝手に……」

「魔物は、生徒が行う演習じゃない」

カイトの言葉をきっぱりと切り捨てる。

危険性は、カイトも十分承知のハズだ。

「死人が出る前に、私たち二人が片付ければ良い」

「リリイ！」

カイトは首を振った。

「お前が闘う必要はない。その力を使う必要なんて無いんだ」

ただの人として生きて欲しい。

ただの女の子として生きて欲しい。

誰もが、リリイにそう望んでくれた。

「……私は、化け物なのに？」

自分自身が許せない。

ここに生きていることを。

存在していることを。

生きている意味が欲しかった。

生きている理由が欲しかった。

シエラを失った今、全てが消滅して、リリイの中には化け物の力と

無だけが残った。

今でなお、彷徨い歩いているようなものだ。

「大丈夫。私は、前に出ないから」

「……分かった」

カイトはこうしている時間も惜しいと思ったのだろう。

剣を抜き、非難シエルターへ向かう生徒の逆方向へと向かった。

リリイはその背が見えなくなると、もう一度飛び、屋上へ向かった。

非難シエルターからは、リリイを目視することが出来ないだろう。

よって、これから魔法を使うのがリリイだと知られることはまず無い。

魔物の群れは学園のすぐ側まで近づいていた。

リリイは杖を構えてまぶたを閉じる。

必要なのは魔力と媒介。そして、願い。

「 輝くは金色の刃 空から降りし万の矢よ
幾重の雨となりて 我らに勝利をもたらせ
彼の者の攻撃は我には届かない
けれども我の刃は彼の者に届く
行け 金色の矢よ

まぶたを開く。

黒翼でも隊長レベルしか使えない高等魔法。

リリイはこれを9歳で使えた。

膨大なる魔力。

一族の者でさえ恐れたリリイの力。

「 ゴールデンアロウ
黄金の矢」

突如、空から金色の矢が魔物の群れに降り注いだ。

第八楽章 生き残り

後衛陣へ矢は降り注いだ。
魔物の悲鳴。

矢が命中した魔物から灰へと変り、消滅してゆく。

前衛はカイトが闘っていた。

続いてリリイは呪文を唱え始めた。

「 求めるは 強き者

成すのは 我が刃

彼の者に 祝福を

彼の者に 勝利を」

杖の先が赤く光り出した。

補助系魔法。

いくらカイトが龍族で白翼とはいえ、長期戦は疲れるはずだ。

「 ウィクトリー
センター
勝利の剣」

その光はカイトの剣に移った。

一瞬カイトの動きが止まった様に見えたが、すぐに敵陣へ向かい出す。

更に援護しようとしてリリイは杖を構えた。

「おっと」

「え？」

後ろからした声に、リリイは振り向こうとしたが、口を手で塞がれた。

強い力で押さえつけられる。

あまりに急な衝撃に、リリイは杖を手放した。

乾いた杖の転がる音が屋上に響く。

「誰かと思えばXVやないか。10年ぶりなのは嬉しいけど。此処で邪魔をしゃんといてや」

床に押さえつけられ、相手の顔は見えない。

しかし、リリイのことをナンバーで呼ぶ者は、数えるほどしかない。

10年。

更に、その言葉で、かつての同じ被験者だと言うことが分かる。

「久し振りに再会したはええケド、あらま。敵さんになってたなんてな」

口から手がはずれた拍子にリリイは急ぎ込んだ。

「まあ、今回は様子見やったし。あんな屑魔物どうでもええわ」
その声と口調には聞き覚えがある。

「0……！」

リリイは首をひねり、相手を睨み付けた。

黒髪の短髪に、本当に開けているのかと思うほど細い目。

リリイを押さえつける左手の甲に0という刻印が刻まれている。

「おおきに。XV、久しぶりやなあ」

ゼロの顔が近づき、その手がリリイの首筋を撫でる。

「10年ぶり。まさか、人間側にいるとはなあ」

「きつさま……！」

リリイは身をよじるが、思ったよりも強い力に抗えない。

「思ったよりもええ収穫や。まさかXVがいるなんて」

「ゼ」

「今は、ゼオンと呼んでな。お前さんもXVって呼ばれたく無いやろ」

そう言つて、ゼオンはリリイの首筋に口づけをする。

羞恥と怒りにリリイは目を見開いた。

「シルバーチェイン
銀の鎖！」

リリイが叫ぶと、リリイのいる地面が光り、魔法円が現れた。

魔法発動。しかも、媒介をなしに。

ゼオンは驚いて飛び退いた。

そして、今までゼオンのいた場所に銀の鎖が降りかかる。

標的を失った鎖は消滅した。

刹那

リリイの体を激痛が襲った。

脳が直に揺れるような錯覚。

リリイは顔を歪ませながらも、ゼオンを睨みつけた。

「無茶をするなあ。いくら巨大な魔力を持っていても、媒介が無ければその負担は大きいはずや」

かつての被験者。リリイと同じ、タロット事件の生き残り。

しかし、それ以上意識を保ってられないのは分かっていた。

逃げなければいけないのに、体が動かない。

ゼオンの近づく足音が近くに聞こえた。

「リリイ！」

リリイを呼ぶ声。

愛おしい、リリイを闇から引き上げてくれた声。

けれども、リリイが意識を保っていたのは、そこまでだった。

第九楽章 闇の中

カイトが魔物を全滅させると、剣の光も消える。

おそらくリリイが補助魔法をかけてくれたのだろう。

カイトは学園の方を振り返る。

すると、屋上の方で、銀の鎖が放たれたのが見えた。

「リリイ！」

カイトは嫌な予感がした。

剣を強く握りしめる。

「^{△フメント}移動」

景色は一気に移り変わり、屋上へと飛んだ。

そこには気を失ったリリイと見知らぬ青年がいた。

リリイの顔は青く、どうやら杖なしに魔法を使っただけらしい。

反動で、体に衝撃を喰らったのだ。

「てめえ……」

カイトは剣を構えた。

すると青年はひらひらと手を振る。

「おお。龍族じゃねえか。しかも、純血種！今回はとことんついて

るっ

青年は余裕の笑みで後ずさる。

「けど、今回は引かせてもらっただけ。XVにも、また会いに来る

って言うといいてや」

そう言うと、青年は屋上から飛び降りた。

カイトは慌てて下を見ると、青年は落下中に黒い光に包まれて消え

た。

どうやら、移動魔法ではない魔法で移動したらしい。

カイトはすぐにリリイの側へと駆け寄った。

リリイは多量の魔力を失い、気を失っているようだ。

外傷が無いところを見ると、魔法の反動が大きかったようだ。

「糞っ」

カイトはリリイを抱き締めた。

護りたい者はいつも護れなくて。

カイトは何度も手放した。

リリイだけは。

この手の内にあるリリイだけは。

護りたい。これからも、ずっと。

悪雲が迫ってきていることを、カイトはうすうす感じていた。

リリイは深い闇の中にいた。

「化け物」

「生きているだけで不幸を」

「あの魔法一族の娘」

「巨大な魔力」

「XV……悪魔の意味を持つ者」

「不完全な存在」

「世界を滅ぼせる力」

多くの言葉が、闇の中に響いていた。

「うるさい……黙れ！」

リリイは一喝しても、声は止まらない。

「生きてはならない存在」

「龍族の血を」

「人智を越えた力を」

「神の力」

魔法ではない力。

会ってはならぬ神の力。

リリイの中に潜む 闇。

「私は……私は……！」

リリイは顔を覆った。

人であつても良いと、幸せに生きなさいと。

シエラはそう言った。

けれども、シエラはもういない。

護ってくれる人も、護るべき人もいない。

手の平からこぼれ落ちるかのように消えてしまった。

リリーのせいだ。

最期の一時でさえも、奪われた。

リリーの力は10年前の実験によって、目覚めかけた。

封印は壊れかかっているのは自分でも分かる。

「人に、復讐を！」

「やめて!!!」

リリーは蹲った。

もう、誰も傷つけたくはなかった。

もう、誰にも傷ついて欲しくはないのだ。

「僕を、殺したのに？」

銀色の少年が、リリーにそう言った。

かつての仲間。同じ実験体。

「ア……ああ……」

消えてしまいたくなかった。

完全に、終止符を。

完全に、絶望を。

「世界は、終焉を迎える」

女の声が、頭の中に響いた。

「もうすぐ、終わりを告げる鐘が鳴る」

女はリリーの目をふさいだ。

「世界は、貴女の目覚めを待っている」

優しい声は、シエラの声でもなければ、自分の声ですらない。

「今はただ、眠りなさい。貴女が唄を紡ぎ出すために」

闇は晴れ、リリーは光の下へと、戻った。

第十楽章 タロット事件

リリイが起きると、日付はすでに変わっていた。

窓の外は早朝を示している。

起きてみれば自室のベッド。

リリイは上半身を起こした。

ベッドの近くには杖が置いてある。

あの後どうなった？

リリイは首を傾げる。

「2日くらい眠っていたんだ」

いつの間にそこにいたのか。

カイトは窓の近くの壁にもたれかかっていた。

「あの後、どうなったの？」

「魔物は消えて、あの男も消えた。リリイを除いてな」

カイトはリリイに近づくと、乱暴な手つきでリリイの肩をつかんだ。

「痛い……」

「あの男は何だ。知り合いか？」

カイトは訝しげな視線を送っている。

もしかして、仲間とでも思われたのだろうか。

いや。その可能性は極めて低かった。

何故なら、リリイが魔物を嫌いなことくらい知っているはず。

実家では化け物呼ばわりされていたことも、カイトは知っているのだ。

「それは……」

しかし、リリイは口籠もる。

あの男とは、おそらくゼオンの事だ。

リリイにとって、タロット事件の被験者はタブー区域だった為に、

カイトに詳しいことは話していない。

それ処か、リリイが彼等にとってどういう存在かさえもシエラ以外

に知るものはいないだろう。

「手の甲に、ナンバーがあった。……もしかして、タロット事件の」
「そう……だよ」

リリイは絞り出す様に答えた。
身体が震える。

「あいつは被験者の中で、0ゼロと呼ばれていたの。タロットカードに置き換えたその位置は愚者。タロット事件の中で、もっとも人間を憎んだ者。」

リリイの言葉が理解出来ないらしく、カイトは首をひねった。

リリイは自嘲気味に笑いながら、カイトを見上げる。

もう、一度出たものは止まらなかった。

「被験者はナンバーズと呼ばれて、生体媒介溶液の中で生活する。研究者達は、ナンバーズ達が起きているなんて知りもしなかった。

私達は、ただ、死の恐怖に怯えて毎日を過ごす日々。被験者には選ばれる子供は、タロットに置き換えられたナンバーを刻まれ、そのナンバーに相応しい実験動物となる。人を、魔物を越える人間を創りだす恐ろしい実験。おかしいでしょ？けど、完成したのは、たったの5人。いえ、4人よ」

カイトは、驚きに目をむいた。

リリイは目尻に涙を浮かべて、目を細める。

シエラは知っていた。

XV 悪魔（リリイのこと）に相応しい力を入れる為の材料として、また、白翼の潜入捜査で、リリイの目の前にまで突き出されたのだから。

「？0 愚者、？IX 隠者、？XV……悪魔、？XX 審判、？XXI 世界。けど、世界だった人は、その実験後にすぐ姿を消した。審判は精神を病んで記憶を失い、力を暴走させたから処刑した」
患者や隠者はどこにいるのか分からなかった。

しかし、少なくとも、患者は人間を憎み、復讐しようとしているのだ。

かつてのリリイもそうだった。

全ての人間が信じられなくなった。

全ての人間を殺したかった。

復讐は悲しいことだと、シエラが教えてくれた。

「カイト。私達はね、化け物なんだよ。あいつのことだってそう。

魔物を率いて学園を襲ったのはあいつ。何の目的かは知らないけど、人間が魔物を操ることなんか出来ないもの」

「リリイ……」

カイトはリリイをそっと抱き締める。

かつて、シエラにも同じ話をしたことがあった。

自分は化け物だと。そう告白した。

「大丈夫だ。お前は、ちゃんと進むうとしている。化け物なんかじゃない」

シエラが言ったのと、同じ事をカイトは言った。

少しの驚きに目を見張り、リリイはカイトの胸に顔を埋めた。

カイトを強い力で抱き締め、10年前の様に。

シエラが拒絶しなかった時と同じように、リリイは泣いた。

第十楽章 タロット事件（後書き）

パソコンがバグってインターネット出来なかったので……申し訳ないです。更新するのが遅れました。

明日からまた寮の方へ帰ります。せっかく良いところなのに……！

みてみん に、リリーのイラストのせました 暇ある方はどうぞ見て下さいな。

第十一楽章 初対面

この国の女王マール・グランディセ・マリーラは、執務室からバルコニーへと出た。

空を見上げて、いつもと変わらない。

緑色の髪を揺らしながら、紫色の瞳はどこか遠くを見ていた。

「マール。報告がある」

リリーの実兄であり、マールの夫、レグが紙束を持ってマールに声をかけた。

「どうした？」

呼びかけに答えないマールに、レグは眉をひそめる。

風がたなびいている。

それだけなのに、マールの胸には一抹の不安があった。

「風が震えている」

風の精霊『シルフ』とも渾名されるほどの美貌をもつ女王は、そう

呟いた。

実際に大気が震えている訳ではないだろう。

「レグ。すぐに支度して」

「マール？でも、報告が……」

「嫌な予感がするの。貴方リリーの妹の所へ行くわ」

マールは無言を言わず、歩き出す。

「どうしたんだ急に……」

レグの呟きなど聞こえやしない。

マールの頭の中には、かつての仲間と、タロット事件で【監視者】

へとなった者を思い出す。

「世界の、魔法の終焉。ラピス。シエラ。何を考えているの……？」

「リリー……」

泣きはらした顔を上げ、カイトの優しげな瞳に、リリイは心を奪われる。

頭を撫でてくれるカイトの手つきが止まった。ゆっくりとリリイを引き寄せ、リリイの唇に、カイトのそれが重なった。

泣きはらして頭が回転していなかった為か、事が起きるまで、リリイは何も出来なかった。

しかし、事態はそれどころではない。

自然と意識も覚醒してくる。

「っ！」

声にならない叫び。

刹那、リリイはカイトを突き飛ばしていた。

耳まで真っ赤にさせ、事態を把握しようとする。

「リリイ」

「こっち来ないで！」

考えれば考えるほど混乱していく。

カイトの行動が何を指しているのか。

分かってはいるものの、リリイは今までカイトをそう言う目で見ただことはない（記憶喪失の時はカウント無し）。

「リリイ」

カイトはリリイの言葉を見捨ててリリイを抱き締めた。

リリイは離れようとするが、思ったよりも強い力で突き放すことが出来ない。

「護るから。絶対に。母さんが死んだ時みたいに、護れないままの別れは嫌だから」

その言葉に、リリイはカイトの顔を見る。

辛そうな顔をしていた。

そうだ。カイトは、たった一人の肉親を殺されたのだ。

「あ……」

何も考えられなくなる。

ただ、目の前にいるのはカイトだと言うこと。

「リリイは鈍感だから何も知らなかったと思うけど、俺は、ずっと

」

「ずっと、なんだ？」

「……！」

いきなり現れた第三者の声に、リリイとカイトは驚きに振り返った。そこには、異常なまでの嫉妬の炎をたぎらせたリリイの兄、レグがいた。

「に、兄様……？」

「レグ様……」

「カイト。俺の妹に何をやらかす気だ？」

その様はイフリートとも、サラマンダーとも言って良かった。カイトの額に汗がにじむ。

羞恥からか、リリイはカイトを突き飛ばした。

「あーあ。せつかく良いところなのに。駄目じゃないレグ」
魔法陣が壁に現れ、一人の女が姿を現す。

緑色の長髪の女は、リリイにとっては初対面だが、誰かぐらいは分か
かった。

「女王、陛下……！」

レグと結婚したというマリーラ王国の実権を握る者。

「壁からお邪魔します。初めましてかしら。リリイちゃん？」
流れる所作から既に常人ではない優雅な動き。

リリイは呆然とするしかなかった。

第十一章 初対面（後書き）

日頃の感謝を込めて。アクセス累計PV数6、654。有り難うございます。

次に投稿するのは夏休みあたりだと思って下さい。

8月の初旬からあれば2週間くらい。なければ1週間くらいの休みです。

ちよくちよく書く気ですが、時間があれば……でわ！

第十二楽章 伝えたいこと

目の前にいる人物は、リリイが生涯直接声を交わすことの出来ないはずの相手だった。

「レグ、カイト。一旦外に出て。私、リリイと話をするために来たの」

女王、マールラの言葉に、レグは啞然とした。

「マールラ。いくら俺の妹とは言っても、一対一で何かをするのは」

「相手は白翼。私の部下よ？」

「部下は部下でも、新米だ。記憶も戻ったばかりで、行動力の方もまだ……」

「レグ」

すうっと、マールラが目が細まった。

浮かべる微笑は美しく、『シルフ』の渾名にふさわしい。

女のリリイでさえも、うっかり魅入ってしまった。

「リリイは私の義妹でもあるのよ。それに、貴方は自分の妹が信じられないの？」

「そう言う訳じゃあないが」

「なら、決定ね。ほら。早く外に出る」

マールラは野良犬でも追い払うように手を振る。

レグは項垂れていたが、リリイと同じように呆然としていたカイトの首根っこを捕まえると、おとなしく部屋の外へと出て行った。

マールラは見送った後、ポケットから宝石を取り出す。

「バリアー 結界」

マールラが唱えると、部屋の外には聞こえないよう、入ってこられないように結界が出来た。

リリイは少し驚く。

マールラは椅子に座ると、リリイに微笑んだ。

「女王が魔法を使えるなんて、不思議だと思う？」

「……はい」

リリイは思ったことを口にした。

女王は守られるだけの存在だと思っていた。

戦うことの出来ない、知識に溢れ、兵士に守られる。

そんなイメージがある。

マーラの容姿からしてみても、そう思ってしまう。

「けど、私は剣も使えるし、魔法も使えるわ。……そうしなければ、自分の身は守れなかったから」

「え？」

リリイは思わず聞き返してしまう。

「少し、話をしましょうか。……即位する前、私はただの街娘だった。15歳の頃よ」

マーラは両親を知らなかった。

育て親も、ただ預かっているだけだと言って、本当の親を教えてくださいなかつた。

「育ててくれたのが、シエラ・クルト。カイトの母親だった」

龍族は人間の何倍もの長さを生きる。

シエラがマーラを育てていても、年齢的には何の不自然もない。

「内乱が起きて、王と王妃が死んだ。それから、私を迎えに来たのは、私腹を肥やす大臣の私兵だったわ」

マーラの瞳が暗く沈んだ。

「私は貴女と同じように、魔法を習っていたわ。それから、シエラの夫・グノンからは剣を」

大切に育ててくれたと、切なげにマーラは笑った。

私兵が来た時、何が起こったのかは容易に予想が付く。

「シエラとグノンが応戦した？」

リリイの問いに、マーラは頷く。

「そう。そこにレグと出会って。今の仲間達と内乱を鎮めた」

リリイの隣へ座りなおし、マーラはリリイの手を握った。

「ごめんなさい。リリイが狙われ、シエラが死んだのは私が甘かつ

たせいだわ」

処分しそこなつた大臣の反逆。

マーラがシエラを大切にしていること。

マーラがリリイを守っていることは、既に周知のことだったらしい。

「まさか、その為にわざわざ……」

思わず息を呑んだ。

会ったこともないはずなのに。

記憶が戻ったことを知って、わざわざ来てくれたのだ。

「ありがとうございます」

リリイはマーラの手を握り返した。

第十二楽章 伝えたいこと（後書き）

ようやっと書けましたー。部活やら、寮のパソコンが壊れるやらで、苦難の道のりでしたが、ようやくです。

第十三楽章 任務

マールラの辛そうな顔を見て、一目で分かった。

シエラを大切にしてくれていた。

リリイを気にかけてくれていた。

それだけで、感謝の言葉が溢れた。

「陛下がそこまで心を砕いて下さって、ありがとうございます」

リリイがそう言うと、マールラは静かに微笑んだ。

けれども、もう一度目を伏せる。

「もう一つ、伝えなければならぬことがあるの」

マールラはリリイから離れて、右手を3度振った。

するとつけていた指輪から光が放たれ、写真のようなものが写し出された。

そこに写っていたのは、銀髪の青年。

その青年を見た瞬間に、リリイは目を見開いた。

「そんな……こいつが、生きているはずない！」

思わずリリイは叫んだ。

笑みを浮かべながら、佇む青年。

「こいつは……XXは、私が殺したはずなのに！」

マールラの目が細められ、リリイはハツとして手で口を覆った。

「報告は、シエラから聞いているから安心して」

静かにそう告げるマールラの声色が変わっていた。

圧力をかけている訳でもないのに、逆らえない。

リリイは、息を呑んだ。

「彼はXX 審判。 エルフ族異端児、本名ドルフ・クレオス。彼は今、ナンバーズを集めているわ」

「生き残ったのは、たった5人の筈じゃ」

「そう。ナンバーズを集めて何をするのか。答えは一つしかないわ」
かつてリリイもそうだった。

許せなくて。悲しくて。

こんな力なんていらなかった。

こんな事を知りたくもなかった。

「……全ての、終焉？」

夢の中でそう言った彼の言葉を思い出す。

マールは頷いて映像を消す。

「隠者や世界はどうか分からない。先日の報告を聞く限り、愚者はあちらについたようね」

「止めなきや！」

リリイは立ち上がるうとしたが、マールが目線だけで制した。

「どうやって？」

低い声。

リリイは言葉につまった。

どうやって止めるのか。

話して分かる相手ではない。

ナンバーズは基本的に人間を恨んだのだから。

「審判はこれ以来確認されてないわ。愚者の方も行方は分からない。

これ以上、王都を危険にさらす訳にもいかない。言いたいことは分かる？」

「……出ていって。死ねってこと、ですか」

「違うわ。むしろ、この件に関して、貴女には前線に出て欲しい。

補佐にはカイトを付けるから」

カイトがいれば、リリイは道を間違うことはない。

そう判断しているようだ。

いや。シエラに育てられたからか。

リリイの事も分かるようだ。

「相手の目的は全ての人間への復讐。それを止めるには、貴女にもう一度……汚れてもらうかも知れない」

同じナンバーズを殺すと言うこと。
できるのか。

けれども、ナンバーズに太刀打ち出来るのは、同じナンバーズくらいなものだ。

「私が、決着を付けなきゃいけないことですね」

リリイは自嘲気味に笑った。

「分かりました。お引き受けします」

リリイは深く頭を下げた。

自分にできること。

やらなければならないことを、ようやく見つけた。

「事は起こるまではカイトにも話さないで。けど、無茶もしないで」

マールはようやく緩やかな優しい笑みを浮かべた。

リリイは瞼を閉じて、心に焼き付ける。

「御意に」

終焉なんて、迎えさせるものか。と。

第十三楽章 任務（後書き）

いつも見て下さる方。応援して下さい、ありがとうございます。

今日から夏休み。ちなみに、18日の午前中まで。その間はしっかり更新していきます。

第十四楽章 優しい嘘

部屋を出て下の階に行くと、カイトとレグが料理を作って待っていた。

「わあ！ おいしそう」

マールは両手を合せて喜んでいる。

カイトとレグは二人の姿を認めると、リリイの方へ走ってきた。レグがリリイの肩をつかむ。

「大丈夫か。マールに何もされてないよな？」

「ちよつとレグ……」

レグの第一声に、マールは半眼になる。

「まさか。さつき嫌ほど心配して反対してたのは、私の心配じゃなくて、リリイの心配？」

声が1オクターブ下がっていた。

レグは当たり前だというように頷く。

「リリイが何かしても、マールは回避して攻撃。なんて余裕たる？」

でも、リリイはそうじゃない。マールに攻撃されれば、反撃もできなйдらるうからな」

「レグ様……」

素直に事実を述べるレグに、理由を知っていたのか。

カイトも呆れているようだった。

「何の話をしたんだ？」

「あ、えつと……タロットナンバーズについて」

任務のことには触れないように何度も心の中で繰り返しながら、そう言った。

カイトはリリイの微妙な仕草に気付いたのか気付いてないのか。目を細めて「ふーん」と言う。

「っそれよりも。ご飯食べよ。お腹空いちゃった」

わざとらしいか。

そうは思ったが、カイトは深く追求することはしなかった。

「陛下とレグ様はどうされますか。朝食」

「用事は済んだことだし、帰るわ。また来るわね。リリイ」

「あ、はい。お待ちしています」

リリイは頭を下げると、マールは手を軽く振って何か呟き、消えた。おそらくは移動の魔法だろう。

「さてと」

マール達がいなくなったことを確認すると、カイトは大股でリリイに歩み寄った。

リリイは後ずさるが、カイトに腕をつかまれ、床に押し倒された。

「何を話したのか、教えてもらおうか」

にっこり笑って、恐いですよカイト。

リリイは顔を背ける。

教えられる訳がない。

タロットナンバーズを止めるなんて知ったら、カイトは激怒するだろう。

それどころか、マールに直訴状をだすかも知れない。

過保護なカイトのことだから、そうするに決まっている。

「えっと、ヒミツ！」

「言え」

見下ろしてくるカイトの視線が怖い。

「ホントに、この前の報告だけだから」

「本当に？」

「うん。本当に！」

リリイが必死で言うと、カイトはリリイの上から退けた。

リリイを立ち上がらせる。

「なら、飯食って学校行くか。言っておくけど、くれぐれも任務なんて受けるなよ」

「了解」

リリイは微笑んだ。

嘘をついた。

なんでも話してきたはずのカイトに。
罪悪感が胸に過ぎる。

リリイは拳を握った。

私のしなきゃいけないこと。

手を汚すなんて、きっとカイトは許さない。
カイトが代わりに申し出るだろう。

これはリリイのやり残した仕事。

決着は自分で付ける。

リリイは嘘を突き通すことに決めた。

第十五楽章 聖樹の結界

「リリイってば、大丈夫？」

学校に着いて早々、アンネがリリイに飛び付いてきた。

「うん。心配してくれてありがとう」

アンネの頭を撫でていると、トルチェが腕を組みながらそれを眺めていた。

「しかし、魔物に襲われたと言うが、どこにも怪我はないようだな
そう言うことになっているのか。」

魔物が学園を襲った日から次の日まで休校だったらしい。

白翼による調査が名目だが、実際はただの建前だろう。

まさかナンバーズが襲ってきたなどという訳にも行かない。

「カイトが助けてくれたから」

リリイが苦笑して答えると、リリイから身を離れたアンネが考え深く口許に人指し指を当てていた。

「あの事件、魔物の大量発生で、原因不明らしいよ。でも。怪しくない？調査だって2日で終わったし。本当にそうなら、もっとよく調べるんじゃないかな」

さすがアンネ。

鋭いところをついてくる。

「さあ？ 私は良く知らないから」

惚けてみる。

アンネも深く考えているように見えた。

「リリイも分かんないか」

副生徒会長と同棲し、王の妹ともなれば、何か知っているとも思っただろう。

ホントは当事者なだけどね！

「そう言えば、リリイは初日杖持ってなかったよな」

リリイのもつ身長ほどもある白い杖を指さしてトルチェは言った。

「うん。今は皆宝石で魔法使っているんでしょ？ だから、杖だと古いって言われるかなって」

リリーの言葉に、アンネは眼を丸くした。

「確かにそうだけど。でも、その杖は普通の杖じゃないと思うんだけど」

「そうなの？」

リリーは首を傾げる。

この杖はシエラからもらった物。

確かに宝石よりも魔法は使いやすいし、体への負担も少ない。

杖のことに關してはよく分からない。

「マリーラーの杖細工師ミチエルが作ったとされる雪の華^{スノーフラワー}。まさか君が持っていたとはな」

「「会長！」」

カイトとガルシエーラがいた。

「詳しいんですね。会長」

リリーが感心すると、ガルシエーラは眼鏡をくいつと上げた。

「なにせカイトが一週間も母親に……」

「だああああ！ 喋るなガル」

カイトはガルシエーラの口を塞ぎにかかるが、ガルシエーラはあっさりとそれをかわした。

「それよりも、リアリス君に頼みがあってきたのだが」

「頼み？」

リリーが首を傾げると、ガルシエーラは頷く。

「中庭に聖樹があるのだがね。3日前あたりから結界が張られて入れないのだよ。カイトにも破れないようだし、無理に結界を破ったら何が起こるのか分からないのでね。君に見てもらおうと思って聖樹。初日に見た、あの桜のことだろうか。」

そう言えば、魔物が来た日、言ってみたが入れなかった。

「いいですよ」

リリーはそう言って、杖を持ち、中庭へ向かった。

ガルシエーラやアンネ、トルチエまでついてきている。カイトはもちろんリリーの隣に並んで歩いている。奥へ進んでいると、やはり、結界が張ってあった。触れようとする、立ち入り禁止の表示が出てくる。リリーは杖をかざし、集中する。すると、魔法円が出てきた。

「アナライズ
解析」

リリーが呪文を唱えると、頭の中に情報が流れ込んでくる。…… 筈だった。

「なにも、ない……？」

浮かんでくるのは白い空間だけ。

何の情報さえない。

結界を張るだけの情報さえ見えない。

本当に此は、魔法なのか？

そう考えていると、ふと、何かが聞こえてきた。

どこか懐かしい唄。

なぜ、唄の情報が入っているのだろう。

「リリー！」

カイトの叫び声で、リリーの意識は冷まされる。

ひんやりとした、何かが体を引き寄せる感覚。

見れば、光の触手が結界の中へリリーを引きずり込もうとしていた。

「きゃあああああ！ カイト助けて！」

「リリー！！！」

カイトが手を伸ばす。

リリーも手を伸ばそうとしたが、手が届く前に、リリーは結界の中へ引きずり込まれていった。

第十五楽章 聖樹の結界（後書き）

作 「初めまして。作者の鈴木鈴です」

リ 「リリイです。フリートークなんて書いてる暇あるなら、続き書け！続きを！私はどうなるのよ」

作 「それは次回に」

リ 「明日書かないくせに何を言ってるんだか」

作 「痛いところを……それよりも、今回はリリイの自己紹介や。早うしいよ」

リ 「作者のくせに」

作 「なんか、うちのキャラって、みんな裏でやさぐれてない？」
リ 「気にしないの。さてと。」

リリイ・クルト。本名はリアリス・スノー・ケフィ。

性別は女。誕生日は12月15日。15歳。ってとこ？」

作 「得意な魔法は？」

リ 「何でもできるけど。得意なのは……本編でそのうち」

作 「リリイへの質問も待ってまゝす」

リ 「面倒なだけでしよう！」

作 「いや。ありきたりな質問しても、面白くないかなって」
リ 「貴女って人は……」

第十六楽章 審判者

光の触手に導かれた先には、桜の花びらが待っていた。
以前も思った通り、綺麗な聖樹。

リリイは起きあがり、辺りを見回した。

「別に何も」

聖樹の幹に触れた途端、何かの唄が聞こえた。

忘れるはずがないと、心のどこかで叫ぶ自分がいた。

けれど、聴いたこともない歌だ。

旋律が頭に浮かぶ。

どこか懐かしくて、けど、何故懐かしいのか思い出せない。
魔法の呪文に似た唄だと、思った。

「大丈夫 私は此処にいるよ

大丈夫 貴方が分かるから

大丈夫 目を覚まそう

大丈夫 もうすぐ夜明け」

どこで聴いたんだろう。

気付けば唄を口ずさんでいた。

すると、唐突に頭痛がした。

あまりの激痛に堪えられなくなり、その場に座り込む。

「なに……これ」

「まだ、その時じゃないから」

声が、降ってきた。

見上げると銀色のよく映えた長髪の青年が枝に座っていた。

「久し振りだね。X V いや、リリイさん？」

「X X……」

リリイは後ずさるうとしたが、その前に青年は飛び降りてリリイの

腕をつかんだ。

「ようやく話せるね」

「っお前は、私が殺したはず！」

リリイは杖を握ろうとしたが、青年が杖を蹴飛ばした。

「うん。確かに、僕は君に殺された。だからと言って、僕は君を憎んでいないよ」

「違う！　なんで、お前が生きているんだ！」

リリイがそう叫ぶと、青年は目を細めて笑った。

「よく考えてごらんよ。そう言う能力を得た仲間がいるだろう？」

そこでリリイはハツとする。

浮かんできたのは、事件以降会わない空色の髪をもつ娘。

「^{世界}XXIが何で」

「さあね。彼女は世界の調和の定めをもつ存在。僕が死んだら、調和に不都合があつたんじゃない？」

「なっ」

青年はリリイの首筋に顔を埋めた。

痛いほど抱き締められ、首筋に痛みを感じる。

「僕らは定めを持つ者。けど、君だけは違う。だって君は^{悪魔}XXVと違う定めを持つんだから」

「違う定め……って、やめてXX！」

リリイが抵抗しようとするが、青年の力は増すだけでびくともしない。

「僕はXXと呼ばれたくない。でも、クレオスも捨てたものだよ。

だから、^{フェイト}運命って呼んでよ」

フェイトの手がリリイの顔にのびた。

「君は、僕のモノにする。ナンバーズで、この世界を変えよう」
そして唇を重ねられる。

抵抗したが、そんなモノは無価値だった。

ものの数十秒後に、結界が強引に破られた。

フェイトは拘束を解き、リリイから離れる。

「リリイ！」

現れたのは、カイトだった。

「邪魔者が入ったね。さっき言ったのは本当だよ。君を憎んでいない。むしろ、感謝してるくらいだ」

「貴方のものになんて」

「考えてね。それが、君にとって一番なんだから」

そう言つて、フェイトは塵気楼のように消えていった。

「今は……」

カイトが慌ててリリイに駆け寄ってくる。

リリイは無言でカイトに抱きついた。

アンネ達の気配もしたが、今はフェイトのことで頭がいっぱいだった。

「どうした。何かされたのか」

カイトの呼びかけにも、リリイは答えることもできなかつた。

ただ、悔しかった。

そして、とてつもない不安があつた。

第十六楽章 審判者（後書き）

作 「やって参りましたこの時間！」

カ 「えつと、フリートークだっけ？」

作 「今回はカイト・クルトに来てもらったよ」

カ 「つて、誰に話しているんだ」

作 「気にしない気にしない」

カ 「何をするんだっけ？」

作 「さくつと自己紹介を」

カ 「カイト・クルト 男

高校一年 16歳

得意科目は剣術 体術 苦手科目は数学」

作 「で、リリイに片思い中つと」

カ 「何を！」

作 「まだ答えはもらっていないんでしょ？ しかも、リリイは告白忘れてるみたいだし」

カ 「それは……」（O.O.）

作 「そう落ち込むなって。次回はラブシーンはいつているんやから」

カ 「マジで？」

作 「うちの気分で変わる！」

カ 「てめえ！」

作 「ハリアイ 結界」

カ 「卑怯だぞ！宝石も杖も無しに！！」

作 「人智を越えてこそ作者となれるんや！」

カ 「ぜってー違うだろ！」

作 「滅びろ！ ダイクワールド 闇の世界」

カ 「ぎゃあああああああああ！！」

第十七楽章 さよなら

リリイはとてもではないが、話をできる状態じゃなかった。カイトから離れず、かといってカイトが話しかけると身を震わせる。早退して家に帰っても、自分の部屋に引きこもって出て行くことしなかった。

タオルケットを頭まで被り込み、自身を抱き締めても、ふるえは止まらない。

（ 世界を変えよう ）

フェイトの言葉が耳から離れない。心の中で応じる自分がいた。

理性では、拒否しようとしている。

「違う。私は、違う！」

外は暗く、雨まで降っていた。

光に反射して写る自分の姿が、恐ろしい化け物に見えた。

首筋に浮かぶ痣のような跡。

フェイトに付けられたのだろう。

けれどもそれがリリイの本質を告げているような気がした。

逃げることはできない。

ナンバーズの定め。

ナンバーズのやろうとしていることこそ、リリイの定めそのものだ。

「リリイ」

ノックと共に、カイトの声がして、リリイはビクリと扉の方を見た。

「入るぞ」

ゆっくりと扉が開き、ランプを持ったカイトが入ってきた。

カイトはランプを机の上に置き、リリイの方へ歩み寄った。

ビクリと震えるリリイに構わず、カイトはリリイを抱き寄せた。

ふわりと香るカイトの匂いに安心する。

「今日、あつた奴もナンバーズか？」

カイトの言葉に、リリイは頷いた。

そうか。カイトはリリイの頭を撫でる。

「何かされたのか？」

カイトの言葉にリリイは顔を上げた。

被っていたタオルケットが滑り落ちる。

薄明かりの中で見るカイトは、心配そうなまなざしをリリイに向けていた。

その視線はリリイの首筋に向き、驚きに目を見開く。

「それは……」

痣を見られて、リリイは慌てて隠した。

「なんでも、ないの。ちよっと変な痣を付けられちゃって」

悔しそうな顔をするカイトに、リリイは言った。

けれどもカイトは唇を噛み、まるでリリイが何も分かっているかのように訴えている。

「こうすればできるんだ」

リリイはベッドに押し倒され、カイトの顔がリリイの首筋に沈む。

「カイ　っ」

痛みを感じてカイトを突き飛ばそうとするが、両手がふさがれて逃げられない。

そのままカイトの唇が首筋をつたい、耳たぶを甘く噛んだ。

ゾクリと背筋が震える感覚。

「止めて、カイト！」

リリイは手を握りしめた。

「絶対に、ナンバーズにリリイは渡さない」

そう呟いて、カイトはリリイから身を離れた。

真上からリリイを見下ろし、リリイの頬を撫でた。

「俺は、リリイを……好きだから」

金縛りにあつたかのように、リリイはカイトから目を離せなくなる。

カイトの顔が迫ってきてても、何も抵抗することはできなかつた。

唇が重なり、リリイはカイトの背に手を回す。

リリイはどなのか。

答える代わりに、リリイはカイトを強く抱き締めた。大切だった。何度も、リリイを助けてくれたためもり。それは、ナンバーズやフェイトになど並ばないほど強い思いと切なる願いだった。

（リリイ）

思い出した声に、リリイはハツとした。

（必ず、君を手に入れるから）

そう言ったフェイトの言葉が反響する。

それは、何を意味するのか。

急に、リリイの腕の力が弱まった。

そして、気付いた時には、カイトを突き飛ばしていた。

「リリイ……」

それを拒絶だと捕らえたらしい。

リリイは杖を持ち、窓辺に寄った。

カイトは、急に変わったリリイの様子に、不思議そうだ。

駄目だ。カイトと、一緒にいてはいけない。

リリイは、気付いてしまった思いにストップをかけた。

これ以上一緒にいれば、彼を巻き込んでしまう。彼は、殺されてしまう。

そして、ナンバーズのことは、リリイが決着を付けなければいけないのだ。

「ごめん。……大好きだよ」

リリイは杖を打ち鳴らす。

「飛べ」

杖が浮かび、リリイは飛び乗った。

「リリイ！」

カイトの呼び止めにも聞かず、リリイは飛び出した。

雨が容赦なくリリイを打つ。

けれども、リリイは立ち止まらなかった。

リリーの姿はそのまま暗い夜へ消えていった。

第十七楽章 さよなら（後書き）

作 「はい。今回は二人の母親、シエラさんです！」
シ 「はじめまして。シエラ・クルトです」
作 「プロフィールをどうぞ」
シ 「シエラ・クルト 女 年齢はヒミツ
魔女として医療の技術が高い
夫 グノン 子供 カイト リリイ」
作 「今回はいかがでした？」
シ 「リリイとようやく両思いになれて良かったです」
作 「でも、リリイ家出しましたね」
シ 「心配だわ。怪我でもしなければいいのだけれど」
作 「え、そこ？ ナンバーズに入る心配とかは？」
シ 「そうなったらそうなったで、おもしろそう」
作 「あんたって人は……」
シ 「私の出番は、とりあえず終わっているもの」
作 「え……？」
シ 「へ……？」
作 「うち、一度でもそんなこと言った？」
シ 「だって死んでいるのよ？」
作 「そんなん、作者権限で……」
シ 「自然の理ぐらい守りなさいよ」
作 「作者にそんなモノはない！」
シ 「あなたは……いい加減にしなさい！」
作 （ギクツ）
シ 「ブラックワールド
闇の世界」
作 「それうちの業なの「恥を知りなさい！」わあああああ！」

第十八楽章 隠者

深い闇の中にいた。

リリイはどこにいるのか、自分でさえ分からない。とりあえず、雨が止むまでまとう。

そう思つて、洞窟の中へ入った。

洞窟の中は薄暗く、雨に濡れていたせいか体が冷え切っていた。リリイは杖を打ち鳴らし、魔法を使う。

「ファイヤーランテ
火の灯」

リリイが呟くと同時に、火が灯った。

リリイは壁に杖を立てかけ、火の前にあたる。これからどうしよう。

火を見つめながら、リリイは考えた。

ナンバーズを一人で止める。

王都に……カイトに危険が及ぶ前に。

けれどもナンバーズの潜伏先が分からない。

いや。リリイを欲している奴等のことだ。

きつと、リリイに接触してくるはず。

リリイなら殺されることはまずない。

奴等はリリイを利用しようとしているのだから。

カイトがいれば、奴等はカイトを殺そうとするだろうけど。

けれども、リリイには理解出来ないことがあった。

よくよく考えてみれば、何故、フェイトは生き返ったのか？

「せかい
XXIが生き返らしたのか。

違う。彼女はそんな力を持ってはいない。

彼女の力は異次元空間とこの世界をつなげること。

あの世とこの世の境目の空間を支配する力を持つ。

フェイトの魂だけなら復活出来るだろう。

けれど、死んだ体まで生き返らすことはできない。

「じゃあ、一体誰が……?」

思い当たる人物はいない。

まず、人間がそんなことできるのか?

「禁術なら、いけないこともないけど……」

禁術。

太古の昔人々が使用していた、人間を蘇らせる闇魔法。

しかし、対価が大きすぎ、術構成も複雑な為禁止され、今では失われた魔法だ。

誰かが、復活させたのか。

そうだとしても、フェイトのXXIにあつたという発言は気になる。

確実にXXIが関わっているには違いない。

「フェイトよりも先に調べてみるか」

「うん。良い線いっていると思うよ?」

急に現れた声に、リリイは驚く。

振り返ると、真っ黒なローブを被り、杖とカンテラを持った娘がいた。

その姿に見覚えがある。

いや。タロットカードから出てきたような格好の娘は、ニッコリと笑ってフードを取った。

桃色のパーマがかかった髪に、青色の瞳。

それは、アンネ・クールエストだった。

「昼間振り。リリイちゃん」

「アンネ! どうして」

リリイが驚いていると、アンネはリリイに近づいた。

「リリイってば、同じナンバーズのこと忘れちゃったの?」

「……………え?」

目が点になった。

ちよつと待てよ。

今、こいつなんて言った?

ナンバーズ? いやいや。アンネが? 有り得ない。

「そんな気配一度も……」

「私はIXだよ？いつも分からないようにするのが仕事じゃん」

……頭が痛くなってきた。

「アンネは、気付いてたの？」

リリイが聞くと、アンネはえっへんと威張る。

「当たり前。ま、XXI以外は、私のこと知らないみたいだけど」

リリイは頭をおさえた。

すると、アンネはリリイの頭を軽く二回叩く。

「ま、リリイってばモテモテで大変みたいだから、見かねた私が助

けに来たって訳」

えらそうに……

「戦えはしないけど、XXIの所へは連れて行ってあげる」

「え？」

リリイが顔を上げると、アンネは口許で人差し指を立てた。

「XXIも、リリイに会いたがつてるし。リリイも会いたいでしょ」

「でも、なんで……」

「ナンバーズの定めは、人の幸せの為に創られたモノ。けど、それを利用して人間がいる。実際、ナンバーズは其奴に踊らされるだけなんだもん。そんなの、許せない」

可愛く言っているが、声のトーンは極めて低い。

アンネはリリイに手を差しのべる。

「行こう？フェイト達が此処を嗅ぎ付ける前に」

「うん」

リリイはその手を取る。

しかし、まだ疑問は残っていた。

ナンバーズの定めとは違う定め。

それがなんなのか、分からない。

リリイは、とてつもない闇の中にいるような気がした。

第十八楽章 隠者（後書き）

作 「えと、何でか森の中。今回のゲストは……」
ア 「アンネ・クルーエストです 女の子 15歳
ぴっちぴっちの高校生 誕生日は8月15日」
作 「え、いや。あの……そこまでサービスしなくても」
ア 「あんたがサービスしなさすぎなの！」
作 「あ、もうすぐ誕生日だから、先に言っとくわ。おめでとう」
ア 「何よ！その心がこもってない言葉は！」
作 「いや、籠もってる。ずげえ籠もってるから」
ア 「プレゼントくらい用意してよ！」
作 「（面倒くせ……）はいはい。好きなローブでもどうぞ」
ア 「別に好きじゃないし。登場で、アピールしたいから来てただけだし」
作 「あ、いらない？」
ア 「せっかくもらったんだから、もらっよ！」
作 「いや、アンネは弄り甲斐があるね」
ア 「って、あんたは……永久に森で迷ってる！」
作 「あゝ置いてかないで！」

第十九楽章 闇の覇者

リリイがアンネに案内されている頃、フェイトは王都はずれのバルト領にいた。

そこに建てられている豪邸の中で、ある一室にはいる。

そこは、いくつものベールが飾られた部屋で、一番奥に座る女の顔も見えない。

「リリイの様子を、見て参りました」

頭を垂れながら、フェイトは報告した。

女は薄く笑いながら、フェイトを見下ろす。

「そう。よかったわね。連れて帰らなかったの？」

「はい。けれど、いつか必ず」

女の蒼瞳は細められ、狂気に狂っていた。

「ああ。早くこの国とあの娘を滅茶苦茶にして。絶望を味あわせて、犯して、壊して」

女は喘ぐようにそう言った。

そして立ち上がると、フェイトの所まで歩み寄り、扇でフェイトの顔を上げさせた。

「貴方を禁術で蘇らせたのは、私の人生を壊したこの国に……」

「僕は、彼女さえ手に入れられれば、他はどうなっても良いです」

フェイトの答えに満足したのか、女は高笑いを上げ、口端をつり上げた。

「では、貴方の故郷を滅ぼしなさい。名は捨てたのでしょうか？故郷を滅ぼしたら、それを忠誠と認めてあげる」

最低な女。

フェイトの中では憎悪が生まれていた。

けれども、その憎悪は静かに消えてゆく。

此処にいるフェイトはすでに死んでいるのだから。

彼女の憐れな操り人形。

そう。今だけは。

「貴女の、望み通りに」

一番憐れなのは、この女かも知れない。

フェイトはもう一度深く頭を垂れて退出した。

早く。早く。

フェイトは急ぎ足に女のいる部屋から離れる。

屋敷の外に出て、人気のないところまで歩くと、ようやく、フェイトは立ち止まった。

「ゼオン。いるか？」

「ああ。いるけど」

木の陰からゼオンが現れた。

フェイトはゼオンを振り返り、微笑む。

「聞いてた？」

「もちろんや」

「じゃあ、あの女の望み通りに」

フェイトの指示に、ゼオンは頷いた。

「フェイト。分かっていると思うんやけど」

「ああ。あの女とは、利害が一致しているから一緒にいるでしょ？
分かっているよ。僕だって、リリイさえ手にいられれば、あの女は
用済みなもの」

その用済みがどういう意味なのか、フェイトは分かっているようだ。

「分かっているんならええ。ほな、行こか」

二人は闇の中に姿を消した。

同時刻。

フェイトが出て行ってから、女は薄く笑った。

「あの子は、私に操られているフリをしていると思っているけど、
大間違いよ」

咳く言葉は呪詛のよう。

「あの子は扱いやすい。こうも思った通りに手の平で踊ってくれる

なんてね」

女は扇を開き、窓辺に寄った。

深い森が続き、その向こうに王都が見える。

「勝つのは私一人。リアリス。お前にも、私は負けたりしない」
広い屋敷に一人きり。

何年もそうしてきた。

すべては、自分を追いやった娘に復讐する為。

女は薄く笑った。

「もうすぐ。もうすぐよ。この国が、世界が終わる」

女は扇を閉じると、側にあつた椅子に腰掛けた。

「私を追放したこの国に、終焉を」

女の高飛車な笑い声が、屋敷中に木霊していった。

第十九楽章 闇の覇者（後書き）

作 「今回は、二人のゲストをお迎えしています」

ゼ 「ゼオン 年は忘れた 男」

タロットナンバーズで、0・愚者の位置についているんや」

フェ 「フェイト 18歳くらいかな？ 男」

タロットナンバーズで、XX・運命の位置にいるよ」

作 「今作では悪役やけど、おつかれさん」

ゼ 「どもどもmm」

フェ 「ナンバーズの定めについて説明した方が良い？」

作 「うーん。本編でそのうち言うわ」

フェ 「うん。わかった」

ゼ 「もつとガツンと活躍したいわあ」

作 「十分暴れてると思うけどなあ」

フェ 「女って誰？って、皆思ってると思うんだけど」

作 「それも追々……。ここで言うてもうたら、面白いやろ」

ゼ 「それもそうだよなあ」

作 「ところで、フェイトはリリイのどついう所が好きなん？」

ゼ 「あ、聞いてみたいかも」

フェ 「殺された時の、あの切なそうな顔が堪らなくて」

作 「こいつMか……」

ゼ 「マジ引くわあ〜」

フェ 「ポリポリf^^^*」

作 「照れんな！」

第二十楽章 狭間の世界

「ねえ、何故、アンネは正体を隠していたの？」

リリイがそう問うと、アンネは暗い顔になる。

しかし、すぐに笑った。

「ナンバーズだって公に知られて守られるのは、リリイが王の妹だからだよ。少なくとも、私には守護がない。貴族でも何でもない。平民の子供なんだから。しかも、両親は私が連れ去られる時に殺されたし。だから、世話になってるトルチェにだって打ち明けられないよ」

その告白は、リリイを突き落とすようだった。

王の レグの妹だから守られる。

実験動物と知られていても、陰では言う者はいたとしても、表だって言うことはない。

それは、王の庇護下にあるから。

リリイ自身の力ではない。

「気にしないで。……そうとしか言えないけど、私は、今の生活で十分なの。それに、隠者として付けられた力は、隠れること。完全に気配を消すことだけ。無害に等しい能力だから。リリイみたいな力とは違う。だから、気にしなくて良いの」

「私の……力？」

魔法の増幅？

違う。そんなモノではない。

魔力が巨大なのは元々だ。

それを幼い頃は封印されていた。

けれども、ナンバーズ事件で、封印は解けた。

ふと、思う。ナンバーズで手に入れた力を、リリイは知らない。

リリイは、何の力を手に入れた？

「リリイが考えていること、多分この先に行つた所で説明してくれ

る人がいるよ」

アンネは緩く笑った。

暗い森の中を進んでゆくと、急に雨が止み、視界が開けた。

「此処は……」

アネモネの花びらが舞っていた。

どこまでも蒼い空が見え、花畑が広がっていた。

明るく開けたそこは、いつか来た、世界の狭間だった。

「リリイ」

呼ぶ声がして、リリイは目を見張る。

きらめく緑色の髪の女性がいた。

涙がこぼれた。

大好きで、ずっと、一緒にいたくて。

ありがとう、と告げた女。^{ひと}

お母さんと呼んだ女。

さよならを告げて、二度と会えないと思っていた女。

「シエラ……！」

リリイは走り出して、シエラに抱きついた。

「母さん……母さん！」

シエラは優しくリリイの頭を撫でる。

「うん。リリイが心配だから、少し残ってたの」

可愛らしく笑うシエラは変わっていない。

リリイは顔をくしゃくしゃにして笑った。

「カイトと一緒に、心配性なんだから……！」

「うん」

二度目の再会を喜んでいると、森の奥から女が現れた。

その女を見て、リリイの顔色は変わる。

ラピスラズリのような藍色の髪と瞳。

白い病人のような肌に細い腕。

純白のドレスを着た女は、静かに笑っていた。

「世界……」

「久し振りね。XVいえ。リリイ」

女は微笑みながらリリイに近づいた。

「自己紹介をさせて。私の本当の名はラピス。この狭間の管理者で、不老不死を約束されたもの」

ラピスの言葉に、リリイは驚いた。

なりたくてなつた訳ではない。

よく見れば、ラピスは十年前と何一つ変わっていないかった。

対価。

そんな言葉が頭に浮かぶ。

力を手に入れた対価。

フェイトの記憶のように。

リリイの魔力の封印のように。

ラピスは、対価を払うことで力を手に入れたのだ。

「教えましょう。貴女の問いに。貴女の力を。予知していた世界の終焉を」

神秘的な声でそうラピスは告げた。

第二十一楽章 覚醒

「リリイ。ナンバーズ事件で、実はリリイにだけ力が宿らなかった」
ラピスの話す言葉は、信じがたいものだった。

「力が……でも、あの時封印はなくなつたでしょ？」

震える声で、リリイは言った。

それにラピスは頷く。

「そう。でも、あの事件以来貴女は特別な力を使った？」

リリイは考える。

魔法を覚えるのに必死だった。

幸せをつかむのに必死だった。

思えば、魔法以外の力など使ったこともない。

いや。シエラが死んだ時だ。

あの時、男達を殺した力。

ただ、光っただけで、何が起きたのかは分からなかったが。

では、リリイは何を手に入れた？

「私は、出会った時から知っていた。だから、私の血が本来の力を
暴走させるのではと懸念したけれど、その逆。あの事件は魔力封印
の代わりにその力を封印したの」

シエラが悲しげに行った。

本来の力？

リリイは眉をひそめる。

そんなモノは知らない。

シエラの口からだって一度も聞いたことはない。

「封印解除は感情の高ぶりか……貴女がある言葉を呟くこと」

ゾクリと背筋が凍った。

あまりの恐怖にリリイは自身を抱き締める。

本能が、呟けと微笑んでいる。

理性がその言葉を呟くことを拒否している。

何故、こんなに怯える必要がある？

何故、こんなにも恐いのか。

シエラはリリーの顔を覗き込んだ。

「その言葉を、貴女は知っている。貴女は何度も、その言葉を聞いているのだから」

何を言いたいのか。

何度も聞いたコトバ。

そんな言葉あつたのだろうか。

記憶を探るが見つからない。

何か。何か無いのか。

カイトの顔を思い出す。

優しくて、リリーを大切に思ってくれた男の子。

リリーにとつても、かけがえのない人。

何度も、囁いてくれたコトバ。

「……リ、リイ？」

リリーの呟きに、一気に風が吹き抜けた。

体の中にあつた枷の外れる音がする。

視界が開けた気がした。

今まで見ていたものは何だったのだろうかと思いたくなるような開放感。

風の精霊の声が聞こえる。

リリーの頬を優しく撫でてゆく。

大地が喜んでいた。

木々が歌っていた。

光が笑っていた。

水が踊っていた。

精霊達の声が聞こえる。

これは……。

「覚醒、おめでとございます。精霊王」

シエラが膝をつき、頭を垂れていた。

「母さん？」

「我が名はシエラ・クルト。白龍族の最後の一人。貴女の目覚めを、お待ちしておりました」

他人行儀な口調。

それが当然かのような口振りだ。

「XVの逆位置。覚醒。ようやく、本来の意味を成したわね」

ラピスがほっとしたように言った。

「ど、どどどどという事？」

リリイは状況が読み込めない。

そんなリリイに、アンネは微笑んだ。

「シエラさんは龍族。龍は精霊王の御遣いとされていたからね」

「今までのご無礼、お許し下さい」

ぞぞっと、何かがい上がってくる。

「母さん。いつも通りで良いから！ それよりも、精霊王って」

「考えるよりも遠い昔。この地には精霊王があらせられました」

シエラは諭すようにリリイに言った。

精霊王は神の娘。

大地を育み、命を愛で、風を送り、水を与え、火で温め、世界を守っていた。

しかし、魔物の出現によってその命を奪われる。

精霊王は人間に魔力を与え、対抗するすべを与えた。

龍族は哀しみ、精霊王の転生を願った。

精霊王は、優しく微笑むと、次は人として生まれたいと願って息絶えたという。

「けれども、精霊王の力は消えることはない。それを憂いた神は、精霊王に封印をかけました。龍族には、精霊王が現れし時、その名を教えるようお願いされておりましたので」
それが封印の鍵だと想像に難くない。

「私が、精霊王……」

リリイは手の平を見つめた。

そんなもの、誰が信じられるというのだろう。けれども、証拠が一つ。この身のうちにある。

納得いった。何故、化け物級の魔力を持って生まれたのか。媒介無しでも、魔法を使って死ななかったのか。

「私は……」

ニンゲンデスラナカタ

ドオン

激しい揺れが、地面を揺らす。

「何！？コレは！」

アンネは驚いたように悲鳴を上げた。

ラピスが手を振ると映像が現れる。

そこには、森が劫火に包まれる様子と、フェイトの笑っている顔があった。

「エルフの村が、襲われたみたいね……」

「行かなきゃ」

「リリイ！！」

シエラが心配そうにリリイの腕をつかむ。

リリイは振り返った。

「大丈夫。私の仕事をするだけだから」

リリイはシエラを振り払ってかけだした。

道案内は精霊達がしてくれる。

元の世界へと戻るゲートを、リリイは潜った。

リリイは気付いていなかった。

自分の頬に、ひとすじの雫が流れていたことを。

第二十二章 宿敵

リリイは杖に乗って空を飛んでいた。

魔法は使っていない。

風の精霊達が味方してくれる。

空は暗かった。

夜かと思っていたが違う。

悪気が空を包んでいるのだ。

其処は、リリイのよく知るライラの森だった。

先程の場所とは違う。

おそらく、フェイトが魔法で此処まで来たのだろう。

強くなる風が、リリイの炎髪をなびかせる。

デジャブ
既視感。

以前にも、同じ夢を見た。

あれは、予知夢だったのか。

目の前にいる人物は、不適に笑っていた。

銀色の長髪を一つに束ね、その瞳の色は魔物を示すかのような赤。

その頬には、リリイの腕にあるような数字が刻まれていた。

フェイトはウツトリとした表情を浮かべ、リリイを見ている。

「どうして……どうして」

リリイは顔を歪めていた。

フェイトは艶美に唇を歪ませる。

「さあ。終焉の始まりだ」

闇に包まれる。

リリイは杖で闇を振り払った。

この世界における精霊達が味方する。

何も恐くはない。

フェイトは剣を取り出した。

途端に木々から蔓が生え、フェイトの体に巻き付いて足止めをする。

「覚醒したんだね。精霊王！なら、分かるはずだ。僕の、僕の！」
フェイトは剣を振り回し、闇を膨張させる。
蔓が腐って崩れた。

人間ではない。

分かってた。分かってたことだ。

目の前にいるフェイトは、闇に喰われていた。

以前見た時よりも酷い。

漂う血臭。返り血。

何人の人間を殺したのだろう。

「今、故郷を消滅してきたんだ！」

狂ったように笑うフェイトに、リリイは驚くこともできない。

彼は、以前リリイが殺した時のように、壊れてしまったのだろう。

「記憶は、蘇るついでに戻ったからね。楽に見つけられたよ」

「貴女を蘇らせたのは誰？」

リリイの問いに、フェイトは首を傾げた。

「あれ。世界って君は言ってる」

「ラピスが、そんなことできるはずがないわ」

フェイトは笑っていた。

「ああ、ばれちゃった。いいよ。教えてあげても。その代わりに」

フェイトは、真下を見下ろした。

「君の大切なモノ。殺さしてね？」

一瞬で、フェイトが消えた。

辺りを見回すが、気配すらしない。

「何処に……」

君の大切なモノ。

リリイはハッとした。

大切なもの。リリイと意思を通じ合わせた者。

「カイト……！」

リリイは急降下した。

「風よ！もっと、もっと早く……！」

風はリリイに答えてくれる。

誰よりも早く。

魔法よりも早く。

すぐに家につけた。

そう。灼熱の炎に包まれた家に。

「っカイト！」

リリイは入ろうとしたが、行く手をフェイトが阻んでいた。

「君から全てを奪う。そして、二人でこの世界を変えよう。君を、

僕らを拒絶したこの運命を」

「ふざけるな！」

リリイは杖を打ち鳴らす。

光があふれ出した。

「運命は、自分で切り開くもの。誰かに願うものではない！」

精霊達がリリイの声に答えてくれる。

雨が降り、家の炎を消しにかかる。

火の精霊が、炎を抑えてくれる。

失わないと決めた。

化け物でも良い。

この任務が終われば、一人静かに暮らそう。

誰も来ない森の奥深くで、ただ一人。

「決着を付けようフェイト。再び死を与えてあげる」

リリイの目が濁った。

蒼い瞳ではなく、闇のような黒に。

「ああ。僕も、コレで終わりにしよう」

フェイトは目を細めて、両手を広げた。

闇が広がる。

あまりの濃さに、足が震えた。

杖を握りしめて踏ん張る。

アンデットと精霊王の戦いが始まった。

第二十三楽章 決戦

「木々よ！」

リリイは木々で闇を追い払う。

けれども、木々は闇と相殺して散ってゆく。

内心謝りながらも、リリイはフェイトに確実に近づいていた。

「積極的だね」

フェイトはそう言いながら、マリオネットの糸を操るように指先を動かす。

すると際限なく頭上の闇から具現化した闇がリリイを遅う。

リリイは空を飛びながら、それをかわした。

子供の時はそんなにも強くなかった力。

「子供の時と今は違う、か……」

憎々しげにリリイは呟いて杖を振った。

風が吹き、途端に闇を一気に振り払う。

フェイトに近づき、魔法を使おうと口を開きかけた時、フェイトは

逆に詰め寄ってきた。

思わぬ反撃にリリイは唱える呪文を変える。

「イリュージョン
幻影」

リリイは幻影を身代わりにして、フェイトの攻撃をかわした。

フェイトの小さな舌打ち。

「君は、どうして闘うの？この国は、僕らを見捨てたのに」

国は何もしてくれなかった。

残酷なことをした。

なのに、謝罪一つさえなかった。

まるで、自分達に非はないとでも言いたげに。

「女王は、謝ってくれたわ」

「今更だよ」

一瞬の戸惑い。

それが隙をついた。

「女王はなんて言った？僕を殺せなんて言ったんじゃないの？」

ビクリとリリイの肩が震えた。

闇がリリイの手足を絡め取る。

「君は分からない？君は利用されているんだよ」

闇の触手がリリイの首に届く。

フェイトは自嘲的に笑うと、リリイの頬を撫でた。

「女王が君を精霊王だと知れば、どうするだろうね」

また、モルモット実験体に逆戻り？

背筋が凍った。

思い出してしまふ。

沢山の悲鳴。

沢山の嘆き。

沢山の、願い。

生きたい。ただ、それだけなのに。

ここから出ることは、許されない。

躰が震えた。

手から杖がこぼれ落ちる。

「ねえ。この世界をナンバーズで変えよう。誰もがチャンスに巡り

会える世界に」

甘い誘惑。

躰の力が少しずつ抜けていった。

このままでは戻れなくなる。

墮落してゆく意識。

分かってはいても、抗えない。

「リリイ。僕と一緒に来て。そして、僕に」

「リリイ！」

自分を呼ぶ声に、リリイは目を開いた。

そう。諦めてはいけない。

まだ、何も終わってはいない！

「風よ!!」

風がフェイトごと闇を追い払う。躰が落下していくのが分かった。

けれども、大丈夫だと信じていた。

空を切り裂くような風の唸りが聞こえ、安定感が身を包む。

気付けば、漆黒の龍の背に乗っていた。

「カイト、無事だったんだね」

リリイがそう呼びかければ、カイトは頭を擡げて、リリイを見る。

「当たり前だ。あんな炎で死んで堪るか」

カイトはそう言うと、口にくわえていた物をリリイに渡した。

それは、先程リリイが落とした杖だった。

「リリイ。闇は任せろ。お前は、あいつを倒すことだけに集中

「カイト」

カイトの言葉を遮って、リリイは呼びかけた。

「大好きだよ。ずっと、ずっと……」

リリイがそう言うと、カイトは目を細めた。

「ああ。俺もだ」

その言葉に勇気づけられる。

貴方がいるから頑張れる。

強くなれる。

「私を、あいつの上に！」

カイトはリリイの言葉に応じるように上昇する。

闇がおってきた。

「風よ、木々よ、水よ、火よ、大地よ！」

リリイの呼び声に、精霊達は応え、闇を蹴散らしてゆく。

高度は山より少し上。

雲の間際まで近づいた。

そして、リリイはカイトから飛び降りる。

魔法円が浮かび上がった。

「大丈夫 私は此処にいるよ」

大丈夫 貴方が分かるから

大丈夫 目を覚まそう

大丈夫 もうすぐ夜明け」

それはいつしか聖樹の側で聞こえた唄。

それは、一体誰が歌いたかったのか。

誰に歌いたかったのか。

今なら分かる。

「 貴方は何処 血塗られた扉

貴方は何故 血塗られた道に行く

貴方に手を伸ばし 支えたかった

貴方も共に 歩みだそう

リリイは手を伸ばした。

「 救われたかったのは誰

生きた証が欲しかったのは私

助けたかったのは誰

殺さなければいけないかった

言いたかったのは誰

大丈夫だよ 歩みだそう

リリイの手がフェイトに触れる。

フェイトは、抵抗しなかった。

恍惚な笑みを浮かべ、まるで待っていたと言わんばかりにリリイに

手を伸ばす。

「 貴方と 共に」

フェイトは目尻に涙を浮かべていたのは気のせい？

リリイは目を細める。

気のせいなんかではない。

フェイトは、ずっと待っていたのだ。

自分に、答えをくれる人を。

「 an awakening of the self」

意味は、自我の自覚め。

光がほとばしる。

光が闇を追い払った。

闇という支えを失ったフェイトは落下してゆく。

それに、リリイは手を伸ばしてつかんだ。

離しては駄目だ。これ以上の哀しみを生まない為にも。

フェイトとリリイは光に包まれた。

第二十四章 光の先へ

フェイトは力なく、虚ろな瞳でリリイを見上げていた。
同じナンバーズ。

同じ事件に巻き込まれた。

なのに、違う運命を辿った二人。

「君は、知ったんだね……」

フェイトがそう言うと、リリイは優しく微笑んでいた。

この子は見ない間に、こんなに慈しむ顔が出来たようになったのか。
出会った時は、すさんだ目をしていた。

フェイトと同じ、希望さえ見えない瞳だった。

そんな君に、ひとすじでも良い。

チャンスをおあげたかった。

それが、僕のXXとしての定めだと思ったから。

全ては虚言。

でも、この国を憎んだのは本当。

君を求めたのも本当。

ただ一つ。君の手で、殺されたかった。

「私は、復讐なんてしない。この世界で生きて、この世界で死ぬわ」

リリイの頬に手を伸ばす。

「一つ。愚者を頼ると良い。本当の黒幕が分かるから」

培養液の中で、兄妹のようだった。

大切だった。とても。

口約束の恋人よりも、紙切れ一枚でつながれた夫婦よりも。

「確かな絆が、欲しかった……」

リリイは、フェイトの手を握った。

「うん。私も、その絆を知ったのは、つい最近」

フェイトの躰が崩れ始める。

自分の躰が崩れようと、フェイトは幸せだった。

そうか。彼女は、本物の絆を手に入れたのか。
「教えてよ。僕が、何の為に　生まれたのか。僕の存在する意味を」

精霊王。そう音もなく、フェイトが求めると、彼女は微笑んだ。
暖かい笑み。憎まれても良い。君にあげたかった物。

「誰かの為に生まれてきた。私に、チャンスをくれた」
彼女にしか答えられない答え。

フェイトの求め続けてきた物。

彼女の姿は、天使に見えたり、女神にも見えた。

「ああ。君の為に、蘇って本当に……」
よかった。

フェイトが灰になった後、リリイは立ち上がった。
木々からの間から、優しい光が差し込んでいる。

「さよなら」
リリイは仲間にそう言った。
拳を握りしめる。

彼は、既に人ではなかった。

アンデット。動く死体。

彼を召喚したのは禁術。

彼をかわいそうとは思わない。

それは彼を侮辱することでもあり、身勝手な彼の行動を許すことになる。

それは、してはいけないことだ。

「リリイ」

カイトの声に振り返る。

何度も呼んでくれた愛おしい声。

「来ないで」

近づこうとする気配に、牽制した。

俯いて、カイトの顔を見ないようにした。

「私は、化け物なんだよ。精霊王って、さつき知った。元々、私は化け物だった」

今までカイトをダメしていたことになる。

カイトを見る事なんて出来なかった。

「幻滅でしょ。今までダメして」

自分の躰を抱き締めた。

「今まで、カイトを傷つけてきてゴメンね」

足音が近づいた。

「もう、消えるから。貴方の前から消えるから」

涙が流れる。

お願い。近づかないで。

決心が揺らぐから。一人で、生きるって決めたのに。

「だから」

「だから、何だ」

それは、怒ったような、低い声音だった。

顎に手を引っかけ、無理矢理顔を上げさせられる。

腰に手が回り、抱き込まれた中で、カイトはリリイに深く口づけた。

息が出来なくなり、カイトの舌が入り込んでくる。

「ん……ふぁ……」

喘ぐような声が漏れ、急に恥ずかしくなった。

突っぱねようとしたが、思いの外腕の力は強い。

頭の中が真っ白になり、ぼおつとしてくる。

ようやく離れた頃、リリイは腰が抜けて崩れ落ちそうになる。

しかし、カイトがリリイを抱き締めていた。

「たかがそれぐらいで、今までの自分を否定するな。どんな力を持

つても、リリイはリリイだ。何があっても、俺が守るから。ずっと

守るから。だから、一人が良いなんて思うな。勝手に離れていくな」

嬉しかった。

嬉しくて、涙が出そうになる。

リリイはカイトを抱き締め返した。

この手を二度と離さないように。

「リリイは、どうしたい」

そう聞かれて、リリイは抱き締める力を強くした。

「この事件に、終止符を」

二度とナンバーズのような犠牲者が出ないように。

二度と離れないように。

「御意に」

追いつめられた狼はどうするのか？

第二十五章 愚者

夜。

リリイは王都でも一番塔が高い教会の屋根にいた。炎髪が鮮やかにゆれる。

リリイは王都を見回した。

肉眼で個人が特定できるわけがない。

リリイが視ているものは人や景観ではない。

自分と同じ気配。

「見つけた」

リリイの目が細められ、屋根からリリイは飛び降りた。

王都の路地裏。

その者はリリイを待っていたかのように現れた。漆黒の闇。

リリイの側にはカイトが控えている。

「よう。元気そうやなあ」

「貴方は、フェイトが死んだこと。気付いていたでしょ」

リリイの唐突な問いに、相手は笑った。

「せっかく手助けしてやったのになあ」

相手　ゼオンは月明かりに姿を現す。

細められた目は、何を見すえているのか。

得体の知れないこの男に恐怖さえしそうになる。

「まあ。でも「自由」を手に入れたかな。あいつは」

ゼオンはリリイを見て、何を考えているか分からない声音で言った。

「貴方は、何故？」

「何のことだか」

リリイの問いに、ゼオンは惚ける。

ナンバーズに結局の所悪人はいない。

復讐は悲しいことだと知っているから。

悪を許すことは、過去を許すことになってしまつから。けれども、ゼオンと名乗るこの男だけは何を考えているのか分からない。

フェイトよりも不思議と言えばそうなのだが。

「フェイトに、黒幕は別にいると言われたわ。貴方に聞け、とも」

「それはご丁寧なことで」

ゼオンはくぐもった笑い声を漏らした。

「貴方は何故、フェイトに力を貸したの？」

重なるリリーの問いに、ゼオンの笑いは止まった。

ゼオンの瞳がリリーを捕らえる。

背筋が泡立つような冷たさが、そこにはあった。

駄目だ。吞まれてはいけない。

リリーはゼオンを鋭く見返した。

「貴方は学園を襲撃した時、貴方は様子見と言った。アレは、聖樹にフェイトを近づける為ね？」

キケン。

全身がそう叫んでいた。

けれども逃げてはいけない。

リリーの手は、既に敵の尻尾をつかんでいるのだから。

「強いては、私と会わせる為。全ては貴方のシナリオ通りって訳？」

あと一手。

ここで手を緩めたら、二度と答えにはたどり着けない。

「そうや」

ゆっくりと含むようにゼオンは言った。

「フェイトも、リリーはんも、わいの思うとおりに動いてくれた。

有り難かつたわ。……おかげで、動きやすかつた」

「貴方は、敵？それとも、味方？」

「信用せえへんくせに、そう言うことは言わん方がええよ」

ゼオンは子供をあやすように言った。

「わいは、自由気ままに生きていただけや。わいは、リリイはんに様に精霊王でもなければ、フェイトの様な異形でもない。かといって、アンの様に闇に潜みもしなければ、ラピスはんの様な世界の管理者でもない」

「全部、貴方の手の内で踊らされていた訳ね」
同じナンバーズであつたのなら。

なるほど。行動も読みやすい。

ナンバーズはその者の意思とは関係なく、その位置によって翻弄される節がある。

「型破りで天才的な愚者らしいわね」

皮肉のつもりだった。

けれども、相手にしてみれば、痛くもかゆくもないらしい。

ゼオンは何処からかキセルを出して吸い始めた。

「つい、荷担してもうた。余りにもあいつに自由がないもんやから、自由にさせてやりたくてな」

「嘘つき」

きな臭い感じがした。

この男は嘘をついている。

かといって、全てが嘘でもない。

どれを本当と見分けるか。

「これだけは教えといたろ。黒幕はリリイはんの身内や。洗ってみるとええ。そんでもって、バルト領の方も行くの良いわ。……ああ。もしかしたら、女王が既に一手を詰めているかもしれんけどな」

それだけ言うと、ゼオンはリリイ達に背を向けた。

キセルを持った手を振る。

「わいは消えるわ。追わんといてな。リリイはんを殺したくないさかいに」

そう言つて歩いてゆく。

その後ろに、黒服の少女が何処からか現れてゼオンに寄り添った。

その少女と目が合う。

黒髪に、見たこともない銀の瞳をもつ10歳辺りの少女だった。二人は闇に消えてゆく。

ゼオンを追うことは憚られた。

ゼオンの言葉だけではなく、少女の放つ気配にリリイは驚いた。そして、動くことすら出来なかった。

フェイトよりも恐ろしくて濃い、闇。

「リリイ、どうする」

カイトの声で、リリイは我に返った。

今はそれどころではない。

「行くわ。心当たりが一つだけ、あるから」

バルト領。

場所はどうでも良い。

問題はその前。

リリイの身内に犯人がいる。

リリイには一人しか、思いつく人物はいなかった。

「あの日の決着を付けましょう」

闇が夜を包む。

逃げられる前に。

この事件に、終止符を。

「お義母様……」

全ての始まりはあの女から。

魔力が高いと言うだけでリリイを危惧した女。

最愛の兄・レグの生みの親。

今でも覚えている。

あの、狂った目を。

呪いの言葉を。

幼いリリイを殺すことを屁でも思っただけだったこと。

リリイが煩わしかったのだらう。

当主の座をリリイがもらうと思ったのか。

事実、レグはリリイに渡そうとまで思っていたみたいだが。

リリイを研究所に引き渡して姿を消した女。
今では、ケファイ家の家系図からも抹消された罪深き女。

狼は、自分で自分の首を絞める

第二十六章 終章

風に緑色の髪がゆれていた。

紫の瞳はリリイに向けたことのない無機質なまなざし。腰には剣を装備している。

王宮ではない屋敷の中を、マールは歩いていた。

「マール。お前ではなく、俺が裁きを下す」
後ろに歩いていたレグがマールにそう言った。

マールは首を振る。

罪人の処刑に女王自ら行くことは前例にない。けれども今回の騒動。

そして、王都を揺るがすかも知れなかったこと。

リリイの行動は全て把握していた。

カイトだけをリリイに付けるのでは報告にカイトが虚言を告げる可能性があった。

だから、ここ数日間のリリイを別の白翼に追わせていた。

一方、フェイトと名乗る青年は黒幕ではないことは分かっていた。

一緒にいたゼオンという者も。

では、真の黒幕は誰か。

マールは3年前の失態を思い出す。

何故、もっと早くに対処出来なかったのか。

何故、あんな小さな子供に重い足枷を与えなければならなかったのか。

何故、この手はこんなに非力だったのか。

何故、護れなかったのか。

何故、何故、何故、何故？

苦虫を噛んでいるような気分だった。

浮き上がるのはただ一人の女。

リリイをこれ以上血に染めてはいけない。

フエイトの抹殺をリリイに命令した時、自分が替われたらどんなに良かったか。

汚れるのは馴れた。

護る者の為には、それしか方法がないことも知っていた。

けれども、昔とは違う。

今のマールには女王という足枷がついてしまった。

即位前のような自由がない。

けれども、マールが即位した時は内乱が多発しており、そうしなければ収まらなかった。

マールはある扉の前で立ち止まる。

「ここから先は、私一人で行く」

マールの言葉に、レグは心配しそうな顔をした。

「俺の母親だ。俺が行く」

「私、一人で行くわ」

「けど」

マールはレグを横目で見た。

今はとても機嫌が悪い。

レグはマールと目が合つと、身を固めた。

強烈な殺気。

出していることは、自分でも気付いていた。

「同じ事を言わせないで」

レグは、それ以上何も言わなかった。

部屋に一人で入り、奥に鎮座する女を見すえた。

「まずは初めまして。私は、マール・グランディセ・マリーラ。貴方を処刑しに来ました」

マールは抜刀し、大股に女へ歩み寄った。

女は動かない。

マールは目を細めた。

「別に黒幕がいると言うことが」

女は目をつぶっていた。

やせこけた頬。

冷たいからだ。

その胸には大輪の赤い花が咲いていた。

死後2日と言ったところか。

物言わぬ、冷たい骸となりはてた女に、一瞥をくれる。

「憐れね」

マールは剣を鞘に収める。

これがこの事件の幕切れかと重うと、あっけないものだ。

犯人はこの女。

けれども、まだ、何かがある。

「レグ、リリイを城に呼んで」

死体の処理と共にそう告げると、マールは一足先に城へ戻ったのだ。
った。

ゼオンから情報を得た後、リリイの目の前に男が現れた。

片目に傷があり、その短髪は茶色。瞳は黒かった。

男に気付いたカイトは、男に礼をした。

「クロスさん。お久し振りです」

「ああ。久し振りだな」

気配もなく現れた男。

その身振りから、白翼であることが容易に知れた。

「リリイ・クルトです。初めまして」

「クロス・ブラウンだ。女王陛下からのお達しだ。明日、城へ召す

様に」

「ですけど、これからバルト領に……」

「そっちは陛下が行かれた。もう決着はついてる頃だろう」

クロスの言葉に驚く。

同時にゼオンの言葉を思い出して納得した。

「分かりました。では、明日」

リリイは一礼すると足早に家へ戻った。

マールは分かっていたのか。

最近変な気配がすると思ったら、他の白翼か、密偵だったのかも知れない。

その気配はもう、辺りにはなかったのだから。

リレイの中で、まだ何も終わっていない様な気がした。

次の日。

リレイとカイトは白翼の正装に着替えて、城へ行った。

城へ来るのは二度目だ。

謁見の間へ通されると、王座にはマールが座っていた。

「リレイ・クルト及び、カイト・クルト。参上しました」

カイトの礼に合わせてリレイも礼をする。

「面を上げよ」

マールの重々しい言葉で、ようやく二人は顔を上げた。

「よく参ってくれました。先の任務、ご苦労でありましたね」

女王らしいマールが、そこにはいた。

始めて会った時が砕けていたものだったからか、違和感を感じてしまふ。

けれども、その違和感はずぐに払拭された。

見れば見るほどマールは当たり前前の様に風景に溶け込んで見える。

まるで百年以上も前からそこに鎮座しているかの様に。

「今回の事件の首謀者、サレイア・クルノーツ・ケフィは処刑されました。これをもって、任務を終了とします」

唐突なマールからの宣言。

何故、マールが自ら出たのか。

それを聞くには憚られた。

「「御意に」」

リレイ達の応えに、マールは頷く。

「リレイ・クルト。其方に聞きます。力とは何か」

いきなりの質問に、リレイは眉を寄せた。

何が聞きたいか、分からなかったからだ。

「人を守るべきものと思います。どんなに強くとも、人は一人では生きていけませんから」

「その力で正義と振りかざして人を殺めることは、裁かれるべき事か」

リリイの方がゆれた。

マールアの意図するものが分かったから。

リリイの表情が強ばった。

正義の為なら、人を殺して良いのか。

女王の命令なら、人を殺すこともいとわないのか。

リリイは拳を握りしめた。

「殺めることは罪です。けれども、それでは人の世は治りません。

……それに、私は、彼を殺めたことに悔いはありません」

彼。が誰を指すのか。

マールアとカイトにしか分からないはずだ。

幸せに二度目の死を迎えられた。

それだけが、リリイの救いだった。

「良き答えね」

マールアは微笑んだ。

マールアが目配せをすると、隣にいた兵士が持っていた箱をリリイの前に差し出した。

その箱には、白翼の紋章がついた銀時計があった。

記憶を失って初めてカイトにあった時、彼がこれを手にしていたことを思い出す。

「ここに、正式にリリイ・クルトを白翼に任命します」

「拝命します」

リリイは、銀時計を受け取った。

闇の中で、笑う声がする。

リリイを見て、その眼を細めた。

その身に甘露を宿した少女。

手に入れられたら、きっと……

b e c o n t i n u e d ?

T
O

番外編 修行の合間に

本編よりも遡って、ライラの森。

それは、シエラがいて、カイトがいて、グノンがいた頃。

カイトは修行中にいなくなったリリイを捜していた。

年は10歳前後。

シエラとグノンは昼間家にいないからか、修行と言う名の遊びだ。

「リリイ？リリイー」

リリイを呼んでも応えはない。

仕方がない。魔法を使うか。

カイトがそう思った時、頭上に影が差した。

「いやっほおおおおおい！」

上を見れば赤色の影。それは紛れもなく愛おしい少女の影で。

「って、リリイ！」

カイトは焦ってリリイを受け止めようとするが、リリイは口笛を吹く。

風が吹きカイトが手を貸すまでもなくリリイは着地した。

「10点、10点、100点!」

どこかの選手のように両手を空高く上げる。

カイトは額に手をやり、呆れてしまった。

「危ないだろ。怪我したらどうするんだ!」

「その時はその時。カイトが助けてくれるでしょ?」

「そう言う問題でもなくて……」

大きくなってきて、カイトの言うことを聞かないのも問題だ。

カイトが頭を抱えていると、リリイが手を差し出した。

「いこ。カイト!」

その溢れんばかりの笑顔に、カイトは肩を竦める。

結局は勝てないのだ。この妹には。

「はいはい。行こうか」

たった一時の出来事。

だけでも、その積み重ねで今があるのだから。

番外編 修行の合間に（後書き）

休憩がてらに。

8月に出来た話。

もっと早くに出せば良かったですね

始まりは予感から

ラピスはハザマの世界にある泉のそばに立っていた。

「世界は、廻る。あの子達が見たのは魔法の終焉の始まり」
語り歌のように、ラピスは口ずさむ。

「始まりは1人の男。魔力を持たぬ、世界から見放された男」
泉は人間界の世界を移す。

この泉には、常世は映せないのだ。

「男は愛しい人を失った。その女は多大な魔力を持ち、恐れられて
殺された」

泉に浮かぶのはリリイ。

ラピスは目を細め、リリイを見下ろした。

「男は考えた。此の世に魔力は必要なのか」
次に浮かんだのはある男。

その男を見て、ラピスは笑みを深めた。

「男は禁術に手を染め、時は動き出す。全ては無の世界へ。力なき
世界への為に」

風が一陣吹く。

ハザマの世界。

この世界に死期は存在しない。

ラピスが許すもの以外は、生者や死者であっても、通ることは出来
ない。

けれども、この男なら、ここへ来るだろう。

リリイの力を利用するために。

ラピスを殺すために。

世界の終焉を迎えるために。

魔力が無へと帰すために。

「リリイ。全ての鍵を握る精霊姫」

全ての歯車は複雑に絡み合い、やがては一点に終結する。

「全ては、彼女の手の中に」

「リリイ？」

一陣の風が、リリイの髪を梳いた。

「どうした」

聖樹の上で隣にいたカイトに問いかけられ、リリイは振り向いた。

カイトは心配げにリリイを見ていて。

リリイは微笑み返す。

「なんでもない」

リリイは微かに感じた違和感を心の奥に潜めた。

誰かに見られていたような気がする。

気のせいだろう。最近は何んだか気が立っている。

「女王がまだ待機するようにだって」

それは、つい一ヶ月ほど前のことにある。

リリイの継母。また、女王の義母である女が、女王自らの手で処刑した。

女王とリリイの育て親が殺された兼に絡んでおり、何より、王の妹をの殺害未遂。

なによりも、ソレによって引き起こされそうになったナンバーズの反乱は、十分に処刑に値した。

「……あの人とは、私の手で決着をつけたかったな」

シエラを殺した。リリイを殺したいがために。

敵を討ちたかったわけではない。会って話がしたかった。

継母がリリイを捨てたから、リリイは辛い目にあった。

けれども、そのおかげでシエラやカイトに会えた。

大切な人に会って、多大な魔力も制御できた。

そこは感謝すべきなのかもしれない。

継母がリリイを憎み、己の私欲のために利用しようとしたからだとしても。

「リリイー!!」

アンネとトルチェが下で呼んでいる。

リリイは杖にまたがる。

「^{フライング}飛べ」

一瞬だけ上昇し、すぐに降下した。

「どうしたの？」

リリイが問うと、二人が呆れた顔をする。

「どうしたの、じゃない。古代魔法科のドルトン先生がお前を呼んでいたぞ」

そう言われて、リリイは明後日の方向を見る。
忘れてた。それもすっかりと。

「さつきさぼってて、レポート出してない……」

「早く出しといでよ」

「あの先生なら大丈夫だ」

「うーん。あの先生、いつも代理だから会ったこと無いんだよね」
二人に急かされながら、リリイは上を見る。

「じゃあ、カイト。後でね」

リリイが手を振ると、カイトも手を振っているのが見えた。

アンネはともかく、トルチェに至っては少し驚いている。

そう言えば、トルチェは普通の人だもんなあ。

職員室に行くまで、トルチェの視線に耐えきれなかったのは言うまでもない。

なんか……聞きたいならちゃんと聞こうよ。

そう無言で聞かれても困るんですけど。

「私、ケフィ家に帰るまでカイトの家で育てられたの」

「なんでだ」

そう切り替えされると困る。

本当のことを言えば、アンネも困るだろう。

だからといって嘘も吐きたくはない。

「……西区で起きた実験所の爆破事件。そこで被験者だった私には、
帰る家はなかったの」

本当のこと。

しかし、ここから先は相手が踏み込めない領域に出来る言葉。ナンバーズにも触れていない。

「それは、悪いことを聞いたな」

「ううん。そのおかげで、私は大切な人たちと出会えたから」
今があるのは過去を乗り越えたからだ。

職員室前に来ると、自然と会話は止まった。

「やあ。アンネ君、トルチェ君。リアリス君は連れてきてくれたかね」

入る前に声をかけられて3人は振り向いた。

「あ、はい」

「もちろんですよ」

二人が声を交わす。

振り向いた瞬間、リリイは目を見開いた。

銀色の科学者らしいほさばさの頭。しわが刻まれた顔は男の年齢が40は軽く超えていることを表している。園芸でもしてそうな優しいようなおじさん。

「お前は……」

リリイは反射的に身構える。

知っているわけがない。会ったばかりだ。けれどもドルトンの身にまとう空気がリリイの本能を刺激している。

危険。私ハコイツヲ知ツテイル。

「リリイちゃん。抑えて」

耳元でアンネが呟いた。

と、言うことはナンバーズに関わっているに違いない。

リリイは息を吐きながら、ドルトンにレポートを渡した。

「先生。背後から声をかけるから、びっくりしたじゃないですか」
リリイがそう言うと、ドルトンは声を上げて笑った。

「すまんすまん。初めましてリアリス・スノー・ケフィ君。私はドルトン・ゲフィーナだ」

「はい。よろしく願いします」
リリイも愛想笑いを返す。

どうにもおかしい。リリイは首をひねる。

あの時のことは昨日のことのように覚えている。

人も、建物も、構成術も全て。

なのに、ドルトンはそれのどれにも当てはまらない。

リリイの中に嫌な予感がした。

始まりは予感から（後書き）

遅くなつてすいません。

もう炎髪の魔女が始まつて一年始まると思つと早いです。

応援して下さいありがとうございます。

これからもお願いします。

第一楽章 話したくないこと

どうしてもドルトンのことが気になった。

何処かで会ったはずだ。

それだけは分かる。

それなのにも関わらず、数少ない出会った中の人々どれにも当てはまらない。

そんなにもおかしいことはなかった。

例えば、そう。

雰囲気似ているのだ。

あの暗い研究室に。

「リリイ？」

カイトの呼びかけでリリイは我に返った。

「あ。ああ……どうかした？」

「いや。特にと言って何も。コーンスープにソースはどうかと思うけど」

「へ？」

手元を見下ろすと、確かに、リリイはコーンスープにソースを入れようとしていた。

慌ててソースを机の上に置く。

「あ、あはは。ちよつと疲れてるのかな」

曖昧に笑いながら食事を続ける。

前に家は燃えたものの、精霊の力ですぐに元通りにした。

おかげで欠けている所は一つもない。

カイトは不審そうに眉を顰めた。

「……昼に別れてから様子がおかしいな」
ぎくりとした。

さすがカイト。よく見ている。

「何かあったのか」

「うんにゃ。何も」

「目が泳いでるぞ」

嘘をつけない自分が嫌になる。

「何にもないって」

カイトには秘密にしておこうと思った。

あくまでリリーの勘に過ぎない。

余計な心配はかけたくないと思った。

「リリー？」

にこりと笑っている。

待って。恐いです。その後ろの黒いのは何!?

「ごちそうさま。じゃ!」

リリーは自分の部屋に逃げ込む。

扉に鍵をかけて、息をつく。

これでカイトも入ってはこれまい。

カイトはリリーが精霊王だと知っても、変わらないでいてくれる。

それはありがたいが、想いが通じ合ってから、行動が大胆すぎるの

では?

ふと、リリーは顔を上げる。

……いや。待てよ。前にもこんな事なかったか?

「さて、結界も張らずに部屋に逃げ込んだリリーさん。話を聞こう

か」

ぽんつと、肩に手を乗せられる。

カイトが真後ろにいた。

「あは。あはは」

笑うしかない。

「何でもないので。本当に」

「へえ？」

カイトから黒い笑みが漏れる。

手首を素早く固定されてしまう。

これでは身動きがとれない。

「で、本当は？」

信じられていた気がしません。

頑固にも意地を張っていると、カイトがリリーの首筋に顔を埋めた。甘い痛みが首筋に走る。

リリーの両手を頭上に固定し、カイトは自由にした片手でリリーの服に手をかける。

カイトの唇はリリーの耳たぶに到着し、甘くかみつく。体の芯が震えた。

「なんにも……ないってば」

「強情」

カイトの手が服の下をまさぐり始める。

だんだんと腰に力が入らなくなっていくのが分かった。

体に力の入らなくなったりリリーをカイトは軽々しく抱え上げ、ベッドに連れて行く。

言わなければ続けるつもりなのだ。

唇をかみしめ、声を漏らさないように、言いたくなる自分を戒める。それに気付いたのか、カイトは無理矢理自分の口でリリーの口を開けさせた。

自分とは思えないような声が漏れる。

固定する必要のなくなったもう片方の手で、カイトはリリーの足をつたい始めた。

その手が到着点にいつてしまうと、リリーは今以上に余裕が無くなるだろう。

「言う。言うから！」

「もう、遅い。俺が我慢できない」

カイトはリリーの下着に手を入れる。

「カイト！」

リリーはカイトを突き飛ばす。

危なかった。もう少しで処女が失われるところだった。

羞恥に駆られ、顔を真っ赤にしながら、リリーは衣服を整えた。

ベッドに座り直すと、カイトは少し残念そうに肩を竦め、リリーの隣に座る。

そしてリリーはドルトンのことに関して話し始めた。

第一楽章 話したくないこと（後書き）

作「残念やったな。カイト」

カ「もう少しだったのに」

作「R15に指定したから、やろうと思えば出来るけどな」

カ「やってくれよ」

作「ほら、ここは良心的な小説だから。無理矢理するのはね」

カ「人を強姦魔のごとくに……」

作「それ以外の何か？」

カ「……」

作「ま、いつかはってことで。がんばりな」

カ「あんたが言うなああああ！」

第二楽章 人というもの

一通りの話が終わると、カイトは深い溜息を吐いた。

「アンネって、あの小回りのききそうな子だろ。まさか、彼女が隠者だったのは初めて聞いたな。ドルトン先生は……結構昔から学園に勤めている人で、古代魔法のスペシャリスト。そこへいくと、禁術を習得していてもおかしく無い」

カイトの意見にリリイは首を横に振った。

古代魔法の起源は禁術だ。

古代魔法のスペシャリストなら、数多くの禁術を扱えても不自然ではない。

「禁術は全てにおける魔術の起源でもある。本来みんな使えるはずの力」

「そんなの、ただの一説だろ。俺たちは禁術を使えないし」
魔法の起源など、星の数ほど伝えられている。

けれども、リリイは瞼をゆっくり閉じて俯いた。

「禁術。人を生き返らせたり、自然の理を無視した魔法……授業ではそう習うけど、本当は真逆なら、カイトはどうする？」

「……真逆って事は、自然の理通りって事だろ。でも、実際使われているのは理に反したことがかりじゃないか。リリイが一番身を以て知っているはずだろ」

そこまで言って、カイトはハツとした。

ナンバーズの実験は禁術の最たるものだ。

人とそれ以外の融合。

そして、命を弄ぶ行為。

その最中にリリイは身を投じていた。

「……ごめん。言い過ぎた」

カイトは顔を暗くして俯いた。

リリイは顔を上げ、カイトの頬を手で包み込む。

「大丈夫。そんな気にしないで」
穏やかに微笑むと、カイトは悲しげに笑い返してきた。
暫くそうした後、リリイは杖を手に取り、立ち上がる。
部屋を中心に立ち、呼吸を整えた。

「元々この世界に魔法はなかった。始まりは魔物によって支配された世界を救う為に魔力を人に与えた精霊王。でも、可笑しいとは思わない？ 精霊王が使っていたのは魔力ではなく、精霊を役するという意思……一種の生命力みたいな物。彼女は魔法を使っていたのかしら」

自分の前世だと言われても、未だ実感はわからない。
別にそれは良いのだが、分からないことが多すぎる。

もはや当時のことなど神話に近い産物なのだろう。
時はそれほど長く経ってしまったのだ。

「使ってたんじゃないのか。それでもなきや、ただ人に魔力を与えても意味無いだろ」

「それに、どうやって魔力の受け渡しをするの？」

リリイがそうカイトに問うと、カイトは気付いた様に顔を強ばらせた。

魔力があれば詠唱名無しにでも軽い衝撃は与えられる。

言霊を使うことで強力になり、属性（例えば日、水、土、風など）が変わるから詠唱破棄はしても詠唱名はどうしても省けない。

それに、魔法で魔力の受け渡しは出来ない。

渡すはずの魔力が魔法に吸収されてしまう為、相手に渡す前に消滅してしまうのだ。

「禁術で、魔法の受け渡しを？」

「人は土に還る。それは、人が自然の物質で作られていると言うこと。それはとても理通り。自然が関係するのなら、精霊王にも、出来ないことはないの。魂までは分からないけど、その人を作ることなら」

「止める！」

カイトは真つ青な顔でリリイを抱き締めた。

「リリイ。お前は、違う。あいつ等とは違う！」

カイトの肩が震えている。

リリイは黙ってカイトを見上げるしかできない。

心の中は凍った様に冷たくなっていた。

考えていたことが、確信に変わる瞬間。

禁術とは、リリイのもつ精霊王としての力に酷似している。

言葉など無くとも精霊達はリリイに応えてくれる。

それはリリイが精霊王だからだ。

しかし、かつての精霊王に子供がいたとしたら。

その子孫がこの国の人間達なら。

多少なりとも精霊王と近い力を持ち、言霊を使うことで精霊王に近

づこうとしたのなら。

全てはIFの話なのかも知れない。

全ての予想が外れてればいい。

けれど、人とはそう言う物だ。

より強くなりたいと願い、人でなくなっても良いと思う。

それが人だから、リリイは否定出来ないのだ。

リリイはカイトを抱き締め返し、その胸元に頭を埋めた。

「怖い。怖いよ……」

ただ、カイトのぬくもりを感じて。

リリイはそう呟いた。

第三楽章 知る者

マールは寝台から降りて窓辺に寄った。

空は暗く、夜明けまでにはまだ早い。

目を細めてテラスに出た。

「何か用……？」

視線の先にある闇から気配がした。

聞こえる笑い声。

闇は濃くなり、男が現れる。

男は宙に浮いていた。

「貴方が此処に来るのは久々ね。ゼオン」

マールが呼び掛けると、ゼオンはいつものものにやけ顔で挨拶でもするように片手を上げた。

「久しぶう。あんまり長居するつもりないけどな！」

変わらない話し方に思わず笑ってしまう。

「相変わらずね。彼女はどうしたの？」

以前会ったとき、ゼオンの傍に少女がいたのを思い出す。

ゼオンの顔つきが穏やかになった。

「森で留守番や。人見知りやさかい、堪忍してな」

「いつでも遊びにおいでって伝えてくれる？」

「もちろん。おおきに」

屈託のない顔でゼオンは笑った。

しかしそれはほんの一瞬。

ゼオンは本来の闇に近い顔つきになる。

「それより、ワイが此処にきた理由、分かってるやろ」

「さあ……？」

惚けた様子でマールは笑んだ。ゼオンは眉をひそめる。

「ええ加減になんとかしやなやばいで」

ゼオンの言葉にマールは眉一つ動かさない。

完璧なポーカーフェイス。

その顔からはなにも読み取れないだろう。

「あんた、ほんま何者や？」

ゼオンは鋭く目を細めた。

マールは口元を吊り上げる。

「愚者よ。私はただの女王でしかないわ。命がおいしいなら、それ以上詮索しない事ね」

何年もの付き合いだが、ゼオンはマールの正体を知らない。
教えてもいない。

教える気もない。

彼が知るのはマールが女王であるという事実だけ。

そしてこの国の状況を常に知っていること。

危機を未然に防ぐポジションに居ること。

最も、本当に分からないとは思えない。

確証がないだけで勘づいてはいるだろう。

「刻は動き出している。一人の男によって、全ての終末に……」
マールは笑みを深める。

この事件こそマールの望んだ未来。

この事件の終わりこそ世界が望んだ結果。

未来はどう変わるのかまだ分からない。

「全ての鍵はリリイあなたよ」

リリイは顔を上げ、目を細めた。

隣にはリリイを心配してカイトが添い寝してくれていた。

「……」

何も言わず、窓から空を見上げる。

空の中に一点の月が浮かんでいた。

リリイの瞳が金を増す。

「全ての終わり……そして始まる」

風がざわめく。

動物達は息を潜め、闇が世界を支配する。
その意味が分からないほどリリィは馬鹿でなかった。

第三楽章 知る者（後書き）

遊びでゲームを作りました。

Dearと炎髪の魔女のミックスです。

興味のある方はどうぞ

<http://avg-maker.com/568423.html>

第四章 忠告する者

早朝。

カイトよりも早く起きたリリイは家を出た。

森の奥へと進み、やがて小さな湖へと到着する。

深呼吸を繰り返して、落ちない様に気を付けながら、リリイは顔を出した。

昨晚眠れなかったせい、随分酷い顔をしている。

目元にはクマができ、目が充血していた。

こんな顔をカイトには見せられない。

リリイは湖で顔を洗い、息をついた。

一生懸命に過去を思い出そうとしなくて良いのかも知れない。

過ぎ去った日々。

地獄の、本当は思い出したくないおぞましい記憶。

無理に思い出さなくてもいい。

ドルトンのことは気のせいかも知れないのだ。

リリイの記憶の中に、ドルトンはいない。

だから、ナンバーズとは無関係の筈だ。

「大丈夫。そう、大丈夫」

リリイは自分を抱いてそう言い聞かせた。

何を怯える必要があるのか。

何も、怯える必要はない。

「リリイはん。大丈夫でつか？」

後ろから聞こえた声に、リリイは驚いて振り返る。

そこには、かつては敵（今もそうかは分からない）のゼオンがいた。

リリイは思わず後ずさる。

「何で、お前が此処に……」

「細かいことは気になさんな」

ゼオンは軽く手を振りながら、リリイに近づく。

リリイは杖を握りしめようとしたが、自分がなにも持っていないことに気付いた。

杖を部屋に置いてきてしまったのだ。

もつとも、今のリリイは魔力以外にも使える「力」があるのだが。

「それ以上近づかないで」

リリイは両手をゼオンに向け、3メートルの近さで待ったをかける。

ゼオンはピタリと動きを止めた。

両手を上げ、降参のポーズをとる。

「大丈夫や。リリイはんに、まだ何もせえへん」

まだ。

含みのある言い方に、リリイは眉を顰めた。

「どういう事よ」

「どうもこうもないわ。リリイはんに、警告しに来ただけや」

頭を掻きながら、うつすらと糸目を開ける。

闇。

まさにそれを思わせる気配。

絶望を知るからこそ出来る気配。

「あんたは覚醒した。でも、それは良いもんも悪いもんも引き寄せ

てまう。せいぜい気い付けや」

それは今から始まる何かを知っているかのような口振り。

リリイに背を向け、ゼオンは歩き出す。

「ゼオン」

リリイはゼオンを呼び止めた。

「お前は、これからどうするの？ 何をする気なの？」

「……わいは愚者。「自由」に生きさせてもらうまでや」

ゼオンはにやけ顔を作る。

しかし、先程の様な闇の気配は感じられなかった。

「もう一つだけ」

リリイは目を細める。

今までゼオンに一番気になっていたこと。

どうしても言いたかったこと。

「……その喋り方、変よ」

リリーの言葉にゼオンはこけた。

呆れた笑い声が響く。

「ははっ。これがわいのステイタスや」

ゼオンは木の陰へと歩み、一瞬で姿を消した。

闇のもの。

表の世界へ還る気は無いらしい。

一陣の風が吹く。

リリーの髪を乱すが、リリーは気にも留めない。

「今からか、もしくは既に何かが始まっているのね……」

瞼を閉じる。

精霊達は何も言わない。

それが恐怖となって肌を震わせる。

「カイト……」

自然と求めていた。

今でも壊れそうな私を支えて欲しい。

お願い。

離れていかないで。

お願い。

恐れないで。

お願い。

置いていかないで。

お願い。

側にいて。

そして、忘れないで。

私が、化け物だと言ったことを。

もし、私が私でなくなったら、その時は　貴方が、私を殺して。

第五章 嫌う者

リリイが呼ばれて振り向くと、ドルトンの姿があった。

「何か」

どうしても不機嫌に聞いてしまうのは、第一印象が悪いからか。

いや。危険人物だからだ。

「そう睨まないでくれるか。何もしたらんじゃないか」

「私達にはしたくせに」

決めつけるのは良くない。

ドルトンの目がわずかに細められた。

かまをかけたつもりだが、当たっていた様だ。

こいつは。

「スノー君。そんなに課題が嫌だったのかい？」

「……は？」

ドルトンの言葉にリリイは首を傾げる。

彼の言うスノーとは、この学校の先生がリリイに対する敬称として使っている。

出生が貴族だから、育ちが庶民だったとしても敬わなければならぬいからだろう。

「否。言わなくて良い。……そうか。他の生徒もあのレポートについて是不評だったしなあ」

穏やかな笑みを浮かべながら、ドルトンは頭を掻いた。

リリイの聞きたかったこととは的はずれにも程がある。

「……古代魔法の構成式か教科書に載っていない古代魔法の名称は、さすがに学生の知識では難しいと思います」

「うむ。正しく出来たのは数人だったからなあ。元々出来ないことを想定して出した物だから、良いのだがね」

毒気を抜かれてしまう。

本当にこの教師に、リリイはキケンを感じたのだろうか。

「……そんな物を生徒に提示して、何か意味でもあるんですか」
「例題を一つ出そうかと考えていたんだが、スノー君のレポートは興味深い。確か、天から大雨を起こす古代魔法の構成式……だったかな」

現在使われている魔法は空から矢や雷、雨を降らすことが出来ても、完全に天候を変えることは出来ない。

古代魔法は失われているものがほとんどで、失われた理由は、一度に使う魔力の量が多すぎたからだ。

リリイは精霊王だから一日に何度も使うことが出来るが、一般人がリリイと同じだけ使うとなると、命に関わるほど、魔力が無くなる危険性が出てくる。

まだ成長段階である学生が古代魔法を使えば、まず一ヶ月は魔法が使えなくなるだろう。

「あまりに詳しくすぎて驚いた。もしかして、古代魔法を使えるのかい？」

「……ドルトン先生ほどではないと思います。一応はカイト・クルトの母に教えて頂きましたから」

心の中で舌打ちをする。

学生で古代魔法を使える者は少ないのだ。

「その方は、教授か何かかな」

「……ただの龍族です。もう、亡くなりましたけど」

カイトが龍族であるという事実はその容姿から分かることだ。

必要以上の知識を与えてやる必要など無い。

「それは……すまない事を聞いたね」

本当にすまないと思うなら、放って置いて欲しいものだ。

「それでは、私はコレで」

立ち去ろうとしたリリイの腕をドルトンが引き止めた。

苛立ちながら、顔には微塵にも出さずに振り返る。

「何か」

「そう睨まんでくれ。頼みたいことがあるんだよ」

一番始めの会話に戻った様な気がするのはいか。

「今日の授業で古代魔法を……」

「そう言うのは先生がして下さい。私はいやです」

すぐ立ち去ろうとしたリリイにドルトンは追いつがった。

「そんな！ 古代魔法を使える者が少ない今、是非実習として見せたいんだ！」

もつともな意見だが、リリイは冷やかな目でドルトンを見下ろした。

「そもそも、古代魔法が魔力を多く使うのは、その威力からでしょう。大雨でも降らせて、被害届でも出されたら、どうするんですか」

「そこをなんとか。責任は私が持つ！」

「嫌です！」

激しい言葉の攻防を繰り返しながら、リリイは拒否し続けた。

「……リリイ。何をやってるんだ」

救いの声と思う前に、リリイは振り向く。

「カイト！」

そこには案の定、カイトがいた。

カイトは呆れて額に手を置いている。

その後ろには何故かクロスの姿があるのが凄く不思議だ。

嫌な予感に口端が歪むのを止められなかった。

「クロスさん、一ヶ月ぶりです」

以前あった時は言葉少なに挨拶を交わしただけだった。

白翼の一人であり、かなりの剣の腕をもつと思われる。

王都を守護する黒翼の隊長になったと、風の噂で聞いたことがある。

「ああ。久し振りだな」

「どうしてこちらに……」

リリイの問いに、クロスはドルトンを見た。

ドルトンはクロスに深々と礼をとる。

「今度の訓練に学園の生徒が来るから、その打ち合わせに来ただけだ」

クロスの説明に瞠目したりリイへ、カイトが補足した。

「一年に一度、黒翼の魔法訓練に古代魔法を使った実戦を交えるんだ。いつもは黒翼だけなんだけど、今回学園からの依頼で、生徒が見学することになったんだ。それで俺とリイは訓練に出ることになったから」

「ちよつと！ そんなの聞いてない！！」

「言っていないからな」

さらりと流される。

リイはジロリとカイトを睨んだ。

「……よく、兄様が許したよね」

ぎくりとカイトの躰が震える。

どうやら、勝手にやっている様だ。

「大丈夫だ。お前等は王宮魔術師の格好をしてもらうから、顔は見えない」

王宮魔術師の格好は頭から膝あたりまで隠れたローブに顔にはベールを付けているから顔が分からない。

「そんなの、本物の王宮魔術師にしてもらえばいいじゃないですか！」

「奴等よりも、お前の方が強い」

そんなの堂々と言っていいのだろうか。

そもそも、ドルトンの目の前で、怪しくないか。

自分が白翼だとリイが自白している様なものだ。

クロスは悪気もなく言っただけだ。

「俺が本気でやりたいだけだ」

「クロスさん、言葉を選んで下さい」

カイトは溜息を吐いて、リイの肩を叩く。

「ドルトン先生は俺たちの正体を知ってるから安心しろ。陛下から安全は確認済みだ」

「まさか、ドルトン先生は、白翼……？」

「違う。でも、陛下が良いとおっしゃった。んでもって、この訓練

についてはさつき命令になったから」

レグには通していないらしい。

しかし、マールラの命令は白翼にとって絶対。従わなければならない。

「何で……色々黙ってたの」

「え？」

よく聞こえなかったらしい。

逃げ道を無くす為にリリイにカイトは訓練のことを伝えてなかったらしい。

始めはおそらく不確かなものだったのだろう。

リリイが止めると思っ黙っていたのだ。

命令になる、ついさつきまで。

「カイトなんて、大っ嫌い！」

思いつきり杖でカイトを殴り飛ばした。

「任務まで、口聞かないから!!」

リリイはそう言い捨てるとその場から走り去ったのだった。

第六章 小さき者

「なあ、リリイ。リリイってば」

帰ってから何度もカイトは呼びかけてくるが、リリイはカイトに見向きもしない。

自室の椅子に座って分厚い本を読んでいた。

「確かに、任務を黙っていたことか色々黙っていて悪かったよ」

「……」

「でも、そんなに怒らなくても良いじゃんか」

「……」

リリイは完璧無視を決め込んでいた。

カイトは肩を落としながら、地団駄を踏む。

「頼むから、会話してくれよ」

リリイは頼まれてもカイトに見向きもしなかった。

むしろ、リリイの視界にカイトは入っていない。

また一枚とページをめくった。

「っもついいい！ リリイこそ、勝手にすればいいじゃないか」

逆ギレしたカイトは部屋を出て行き、荒く扉を閉めた。

けれども、それにさえリリイは気付かないふりをする。

いや。思考がそもそも「外」に向けられていないのだ。

分厚い茶色の本を読んでいく。

その眉には皺が寄り、目は細められていた。

いつものカイトなら気付いていただろう。

リリイの様子がおかしいことに。

今のリリイに声は愚か物音さえ聞き取れない。

それは自主的に「外」との接触を断っているからだ。

一区切りついたところでふと、顔を上げる。

「あれ、カイトの声がした気がするんだけど……」

カイトが居なくなつて2時間が経過していた。

夜にさしかかった時間。

まだ風呂に入っていないかった気がする。

いつもはこの時間にカイトは良いに来るのだが。

まだ、風呂の準備が出来ていないのだろうか。

『あーあ。あいつ、拗ねちまった。リリイが無視なんかするから
笑い声と共に魔法陣が形成される。』

現れたのはリリイの兄、レグだった。

「……カイトが拗ねたって、どういう事？」

リリイにしてみれば耳に入る物を一切遮断していたのでよく分らない。

レグは声を立てて笑った。

「カイトが何言ってもリリイが反応しないから、拗ねたんだ」

リリイは眉を寄せる。

「いたの？ 全然気がつかなかった。悪いコトしたかな」

率直な感想に、レグは頬を引きつらせる。

「今回はかりはあいつに同情するぞ」

「そんなことよりも、貴方はどうして此処に？」

「そんなこと」とまとめてしまえば本当に可哀想かも知れないが、
レグがリリイの部屋に直接転移して来るのは珍しい。

普段王務が忙しくて、これないはずなのに。

レグはリリイの頭を撫でた。

「少し外に出ないか。カイトに内緒で」

「なんでカイトに内緒なの？」

別に知られても、カイトなら何の問題もないはずだ。

今や内緒にしていることなど何も無い。

……逆にされていることはあるが。

聞くと、レグは少し困った顔をした。

「誰にも知られてはいけないことだからかな」

あまりに深刻そうな顔をするから、リリイは立ち上がり、本を机の上
に置いた。

「貴方がそうおっしゃるのなら、従います」
杖を持ち、二度床を軽く叩いた。

「移動」

視界は一瞬で歪み、今いる場所が変わる。

そこは、森の奥深く。誰も来ない様な場所だ。

辺りを明るくできるのは月の光のみ。

鬱蒼と茂った深い森の中、リリイはレグと向き合う。

「どうぞ？ 此処ならカイトが私を見つけるのに大分時間がかかるはずですし」

幾ら龍族でも精霊の助けが無ければリリイを見つけることなど出来ない。

リリイが頼めば、精霊達は言うことを聞いてくれるから、時間稼ぎくらいはしてくれるはずだ。

レグは柔らかく笑い、リリイに近づこうとした。

「それ以上、近寄らないで」

リリイはレグに対して杖先を向けた。

「リリイ？」

「気安く呼ばないでくれる？ こうして話すのは初めてかしら」

リリイがそう言うと、レグの姿ががらりと変わる。

空間自体が歪み、一人の少女が現れた。

不吉な黒の長髪に月の様な銀の瞳。

黒いフリルの着いた服を身にまとった少女。

以前あったのはゼオンと一緒に居た時だろうか。

「精霊王。初めまして」

少女は柔らかく礼をとった。

「初めまして。闇の者」

明らかな侮蔑の言葉と共にリリイは微笑んだ。

幻術により相手に自分の姿を変えるなんて高度な技術、ただの子供に出来るはずがない。

感じ取られたのは以前あった時と同じ、深い闇の気配。

少女は意に介した風もなく、リリイを見上げた。その瞳には何の感情も見いだせない。

「ゼオンは一緒じゃないの？」

「愚者は居ない。風の王の元へと行ったから」

少女の声音はともかく、その喋り方には違和感があった。年齢相応の話し方ではない。

此処にいるのも、ゼオンとはなんら関係ない様だ。

「貴女を騙すつもりはなかった。貴女なら、分かると思っていた」

「そう。なら、始めっからその姿で現れて欲しかったわ。じゃなきゃ、こんなに警戒しないもの」

「それは……」

少女は眉をゆがめた。

これを言うのは少々酷だったか。

そう思ったものの、今更撤回する気もない。相手はそれなりに強い。

この少女なら、躊躇無く、人を殺せるだろう。

「ともかく、何の用かな？」

リリイが聞くと、少女は腰を折り、再び一礼した。

「精霊王の、力になりたくて。このままでは、世界の均衡が崩れてしまうから」

紡がれた言葉に眉を潜ませる。

世界の均衡。

他国との勢力か。

魔物が攻めてくるのか。

違う。この少女はそんなことを言っているのではない。

「話を聞きましょう」

リリイが頷くと、少女は頬を綻ばせた。

「ありがとう」

その笑顔だけは、年齢相応の笑顔だった。

第七章 闇の者

「私の名は……」

「話さなくて良いわ。もう二度と会う事なんて無いかも知れないし」
リリイは少女を押しとどめた。

すると、少女は少しがっかりした空気を出す。

もちろん、無表情だが。

「そうですか」

そう言った少女に、リリイは目を細めた。

闇の者。

闇に生き、闇に死ぬもの。

関わらない方が良い。

本能がそう告げているが、彼女は「精霊王」に話しかけている。
むざむざ放っておくことは出来ない。

「冗談よ。教えてくれる？」

リリイが許すと、少女は胸に手を当て、服の裾をつまむと一礼した。

「私の名はアンモビウム。闇に生きる者」

少女がそう言うと、リリイは貴族としての礼をとった。

「私は……リリイと呼ぶと良いわ。私も、貴女をアムと呼ぶから」

まさか答えが返ってくるなどとは思っていなかったのだろう。

しばらくアムは瞠目し、再び頭を下げた。

「それでは、早速話に入らせて頂きます」

そう言っ頭を上げる。

そこには先程の無表情が戻っていた。

「……なるほど。確かにそれは、手に負えないわね」

話を全て聞いた後、リリイは肩を竦めた。

「これは闇の者にとっても、この世界の者にも、悪としかありません」

リリイは暫く考え込んだ。

揃わなかったパーツが揃ってゆく。

それは当然の様に。

まるで、世界の意思の様に。

「貴女は闇の者達から恐れられる南の 炎髪の魔女。精霊王としても覚醒された」

「その言い方じゃあ、他にも居るようね」

リリイの問いにアムは頷く。

東西南北に一人ずつ。

計4人の闇の者から恐れられ、憧れられる存在がいる。

南の魔女、別名・炎髪の魔女は言うまでもなくリリイだ。

剣を取ることで、愛する者を守ることを決めた東の騎士。

全てを包み込み、不可侵の森の中で生きる西の盾。

人々を癒すと言われ、雪深い神殿に住まうは北の巫女。

「で、私に何をして欲しいの？」

「調律者を、教えて欲しいのです」

ピクリとリリイの眉が上がった。

「闇を光に変え、光を闇に変える事の出来る調律者。【世界の意思】が生み出した神の子供」

リリイはアムを睨み付け、鼻で笑った。

調律者。

その名はリリイも知っている。

そして、その人物も。

調律者は人間でなければならぬ。

人間であって、人間ではない者。

その本質はナンバーズと同じだろう。

「教えると思う？ 調律者を殺してきた者達に」

闇の者は調律者を恐れる。

何故？

答えは簡単。

普通の人間は闇の者を殺すことにすると多大な犠牲を伴う。しかし、調律者は【想う】だけで闇の者を殺せるのだ。調律者の力は絶対。

【想い】の強さが【力】の強さになる。

本来は生命を生み出す役目の者。

闇の者は恐れて調律者を刈り始めたのはそう新しくもない。

そして、十数年前には、最後の調律者の里が滅ぼされた。

その生き残りも知ってはいる。

一線を退き、愛おしい者を守る為に王都を去った。

もう、此方側に戻したくはない。

「全ては貴女と調律者が握っている。私も、この世界を失いたくない」

アムの言葉は本当に聞こえた。

信じない。信じてはいけない。

この子供は、間違うことなく【愚者】のパートナーで【闇の者】なのだ。

本来は精霊王としても、敵対する者。

アムは深く頭を下げた。

「気が向いたら、力を貸して下さい」

そう言っアムは闇の中に消える。

「……」

リリイはただ一人、その場で溜息を吐いた。

第七章 闇の者（後書き）

久々の更新です。

更新速度が遅くてすみません（| | ;）

即興演奏

彼女は空を見上げた。

金色の短髪が、風であおられる。

その手には小さな赤子が二人。

王都を去って半年以上が経った。

星の巡りは自分を戦いの世界へ戻そうとしているのをひしひしと感じた。

愛おしい人の待つ王都。

愛おしいから離れてしまった。

そんな自分を許してくれる訳がないと、目を伏せる。

「スウアンさん」

舌足らずな声で呼ばれてその方を向けば、少年が彼女を見上げていた。

手を伸ばしてくるので双子の妹を少年にそっと差し出す。

少年は戸惑いながらも、妹を優しく抱きかかえた。

「ドクターがまっていますよ」

「わかった」

少年と共に歩き出す。

分かっている。

所詮、戦いからは離れられない。

いつかは子供達を置いて死ぬのだろう。

女の腰に双剣が揺れる。

出立の時は近い。

第八章 傍観を辞めた者

かつて、女王マールが王女だった頃。

其処は暗い裏路地。そこで、二人は出会った。

一方は強欲者として。もう一方は暗殺者として。

暗殺者は家族、友人全てを失い、闇を憎んだ。しかし、追っ手により深い傷を負わせられ、もう命を投げ出していた。

マールは両親の命が残り少ないことを知り、力を欲していた。だが、まだ小娘の自分が満足に力を振るえないことを憂いていた。そして、二人は出会った。

「私は力を望む。満足に動く手足を」

「わ、たしは……」

黙った暗殺者にマールは手を伸ばした。それに暗殺者が眼を見開こうが、関係ない。

力が欲しい。何にも負けぬ強い力。そして、自由に動ける手駒が。

「ねえ」

マールは呼び掛ける。

暗殺者はマールを見上げた。

揺るぎない強き意志。瞳に宿る願い、強欲、渴望、そして諦め。

「私に貴女を頂戴」

暗殺者はじっとマールを見つめた後、静かに頷いた。

死ぬつもりだった命。くれてやる。
そう言おうとしたが、口が動いただけで言葉にならなかった。
だが、それでも。マールは頷く。それは、暗殺者に命を吹き込んだ瞬間。

マールの差し出された手を、暗殺者に拒む理由はなかった。

つい昔を思いだして、マールは息を吐く。
それが、血塗られたマールの歩む道の始まり。暗殺者、スウアンと出会った。

大臣の反逆、領主達の粛正。裏切り、哀しみ、憎しみ。
戦争は起こらなかった。それは何故かと問われれば、マール一人の力ではない。

テラスに振り向いた人影に、マールは眼を細めた。

「久しぶり。スウアン。今、貴女が来るような気がしたの」
「相変わらず、勘の良いことで」

スウアンは肩を竦める。

腹は平らになり、彼女の様子から、無事に出産出来たようだ。
おめでとうと言えば、照れ屋なスウアンは頬を染めて頷いた。
しかし、その雰囲気も直ぐに変わる。

スウアンが王都にいる。これがどれだけのことか。分かるのはマールくらい。

スウアンは無表情に眼を伏せる。

「戻ってきた。お前の予想通り、【奴】が動き出している。見

「過ごす訳にはいかない」

スウアンは視線をマールラに合わせる。

マールラもまた、スウアンから眼を離さなかった。

同じ王座に座るリリイの兄、レグ。

初の女宰相クリネ。

その弟であり、白翼の騎士クロス。

竜の末裔のシエラ。

そして、暗殺者であり、調律者の スウアン。

白翼と呼ばれたこの者達は、この国の礎を築いた。

そして、今。

南の魔女を受け継ぐ者、リリイ・クルト。

シエラの息子、カイトと共に運命の歯車を回して行く。

「皮肉なものね」

マールラはもう、物語の主人公ではない。

紡ぐべき者は他にいる、はずだった。

「私達は二度と、集まらないと思っていたのに」

揺らぐ人影。

何人かはもう死んだ。

ここにいるのは、今生きている元、白翼。

「マールラ……」

レグがマールラに膝を折る。

それは、王としてでも、夫としてでもない。臣下として。また、他の者達も、頭を垂れた。

「肅正を」

テラスに映る影が告げる。

マールは静かに頷いた。

「肅正を。世界の、反逆者に」

全員が動き出す。

一人になったマールは、空を見上げ、月を睨み付けた。

王女であった時の方が、まだ自由だった。だが、今は違う。己にしか出来ないことを知っている。

「私は、マール。国を統べし者。貴様に何も渡すものか」

宣言。

傍観していた女王も動き出す。

全ては、

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
?

第八章 傍観を辞めた者（後書き）

何か久々過ぎてどうしょ。

何か違う気が（ノ T）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1021j/>

炎髪の魔女

2011年12月27日23時52分発行